

教育実践総合センター年報

滋賀大学教育学部
Faculty of Education

2025 年 3 月 第8号



SHIGA UNIVERSITY

教育実践総合センター年報 第8号

1 共同研究事業	1
1) 滋賀県の高校理科に関する実践研究	芦谷 道子
ー児童が安心して成長できるソーシャルサポートルーム(SSR)のあり方	
2) 理科教育に関する研究	藤岡 達也
主体的に学習に取り組む態度の実現を目指す高等学校理科の授業改善	
3) デジタル・シティズンシップの育成を目指す中学校における取組のあり方	岳野 公人
ーデジタル技術の活用に焦点を当てた組織的な取組を通してー	
4) 幼稚園における遊びの中で気づき、学び、楽しむ魅力的な造形活動の追究	青木 善治
ー造形遊びや鑑賞活動を通してー	
5) 保育園における遊びの中で気づき、学び、楽しむ魅力的な造形活動の追究	青木 善治
ー造形遊びや鑑賞活動を通してー	
6) アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子ども の育成 2024	青木 善治
ー対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通してー	
7) アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子ども の育成 2024	青木 善治
ー大規模校における対話型朝鑑賞(朝鑑賞)の活動を通してー	
8) 「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう、小・中学校における校内研究のあり方Ⅱ	辻 延浩
ー児童生徒の学びの姿を見取ることを通した教員一人一人の探究的な学びー	
9) 大津市中学校部活動地域移行検討プロジェクト(3年次)	辻 延浩
10) 校内研究からみる学校改革	渡邊 慶子
ー中学校区における Lesson Study シートを活用した教職員の学び合いー	
11) 数学的に考える資質・能力の育成に向けた「問題開発・解決の過程」を遂行する 高等学校数学科の授業改善	渡邊 慶子
ー数学的活動を充実させる指導の工夫を通してー	
12) 継続した運動遊びにつながる園内研修のあり方	山田 淳子
13) 幼児を対象とした運動遊びカルタの開発と実践	奥田 援史
14) 投げる動きを積極的に取り入れた運動遊びの保育実践	奥田 援史
15) 中学校特別支援学級の生徒の「共に学ぶ交流及び共同学習」の充実	窪田 知子
ー生徒が持てる力を発揮するための自立活動を通してー	

- 16) ことばの教室における読み書きチェックの活用について.....窪田 知子
- 17) 児童一人一人が自分の考えを数学的に表現する力の育成大橋 宏星
ー1人1台端末を用いた学びの蓄積と活用を通してー
- 18) 確かな学力を身に付け、自ら学び合う児童の育成を目指して.....大橋 宏星
ー「読み解く力」の視点を踏まえた確かな学力を身に付ける算数科の授業づくりー
- 19) 自分の考えに自信をもち、共に学び合う姿を引き出す授業づくり大橋 宏星
ー自力解決と集団解決を連動させて深めた学びを児童自身が実感できる算数科の指導を通してー
- 20) 特別支援学校教育相談担当者研修の実施.....山川 直孝
ーアセスメント力の育成に焦点をあててー
- 21) 中学校における特別支援教育研修の実施.....山川 直孝
- 22) 中学校音楽科における箏の授業開発プロジェクト.....林 睦
- 23) OJT 研修による人材育成.....田中 満
～心をたがやすボトムアップ～
- 24) 教職員の学びを再構築田中 満
～PBL 型手法を用いた校内研究を窓口に～
- 25) 小学校における児童自ら主体的に探求する姿勢の育成について.....田中 満
- 26) 子どもが夢中になって学ぶ授業を目指して.....北村 拓也
～授業について「見方・考え方」をもって語れる教師集団を礎として～
- 27) 話合いの深まりをめざして.....北村 拓也
～話してよかった 聴いてよかったと 感じられる伴谷っ子～
- 28) 言葉を大切にし、自分の考えを豊かに表現する子を育てる.....北村 拓也
- 29) 理科指導力向上研修の企画研究糸乗 前
～専門家から学び、授業の質を高める～
- 30) 教科横断的な学びを通した言語能力の育成.....山本 はるか
ー小学校国語科「書くこと」で学んだ知識を使う授業実践ー
- 31) 義務教育現場を対象とした【声を鍛えるトレーニング】の作成・実施.....渡邊 史
「フィジカルトレーニング編…耳を育てる」
- 32) 石山っ子わくわく親子で畑体験隊.....森 太郎
- 33) エージェンシーの発達を保障する小学校社会科教育の創造.....岸本 実
- 34) 創発学級をつくる教師の指導力を向上する OJT 研修岸本 実
- 35) 話し合いを進める資質能力の系統表を軸とした校内研修とカリキュラム・マネジメント ...岸本 実

2 石山プロジェクト	71
3 出前講義	73
4 教職探究講座	83
5 教育臨床研究	85
6 情報教育研究	89
7 教育実習支援	91
8 教師力向上支援	93
9 キャリア支援の取り組み	95
10 教員志望について「志望の変遷」を追う	97
11 地域教員養成プログラム	109
12 業務報告	110

1 共同研究事業

1) 小学校不登校に関するプロジェクト研究—児童が安心して成長できるスペシャルサポートルーム（SSR）のあり方

1. 事業名および担当者

事業名は「小学校不登校に関するプロジェクト研究—児童が安心して成長できるスペシャルサポートルーム（SSR）のあり方」である。

本事業は滋賀県総合教育センターとの共同事業であり、担当者は以下のとおりである。

学部教員：芦谷道子

滋賀県総合教育センター：獅子堂秀雄（所長），大林義宜（次長），加藤由紀（参事）

山川直孝（主任研究員），北村拓也（主任研究員），山田喜明（係長）

久保田宏紀（研修指導主事），唐崎展之（研修指導主事）

田中彰（研究員），西尾芽（研究員）

滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課：田中哲郎（主査）

滋賀県教育委員会滋賀県 SSW SV：上村文子（スクールソーシャルワークスーパーバイザー）

湖南市立石部南小学校：浦谷大三郎（教諭）

長浜市立神照小学校：嘉瀬井弘美（教諭）

守山市立河西小学校：寺井真理子（教諭）

野洲市立北野小学校：吉川祐持（教諭）

草津市立渋川小学校：宮永真紀（教諭）

大津市立瀬田北小学校：南野亜弥（教諭）

彦根市立高宮小学校：宮田多恵（教諭）

2. 事業の目的

文部科学省（令和5年）は、「誰一人取り残されない学びの保証に向けた不登校対策（COCOLOプラン）」において、校内教育支援センター（SSR など）の設置促進を促している。本事業では、小学校不登校傾向児の学校での居場所である、SSR の環境整備を進め充実させることを通して、SSR がその場を利用する児童にとって安心して成長できる居場所となることを目指す。滋賀県総合教育センター及び滋賀県内の小学校研究協力校7校と連携し、研究協力校における SSR の実践と研究会での研修との往還を通して、小学校向けの取組事例集、児童、教職員に向けた SSR 理解のための資料を作成する。始期と終期に教職員質問紙調査を行い、SSR 活用に伴う児童の変容や指導者の成果と課題について検証する。

3. 事業の概要

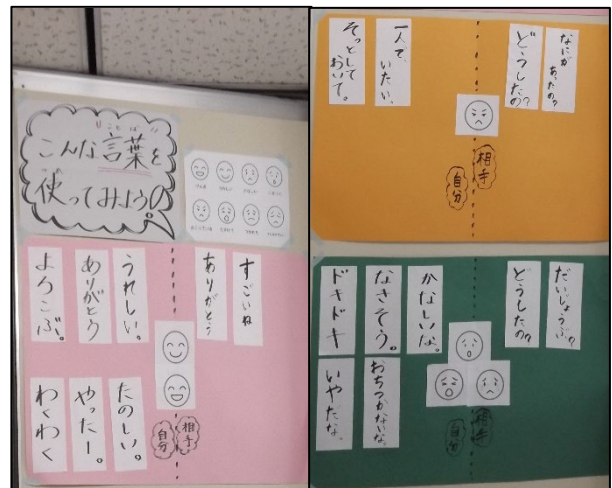
SSR を児童が安心して成長できる場とするために、「人とのつながり」「安心できる環境づくり」「周囲の理解」の三つの要素を軸にした支援の充実を図った。また、全5回のプロジェクト研究会を実施し、各校の取組の交流や講義、研究協議を通して、安心して成長できる SSR のあり方について検討を行った。

取組の実際と研究の成果は次の通りである。



- (1) 「人とのつながり」の支援においては、指導者がアセスメントとプランニングを行い、児童への理解を深め関わった。また、コミュニケーション能力を育むためのソーシャルスキルトレーニングや他者と交流する機会を設定することで、児童が安心して指導者に自分の思いを伝えることができるようになり、自己存在感の高まりや他者と関わる意欲が生まれたりした。

「今日のわたしノート」



表情カードの活用

- (2) 「安心できる環境づくり」の支援においては、児童の実態に応じて環境を整えたり、児童自身が自己決定できるように促し、児童が安心して学校生活を送ることにつながった。



学びの空間の工夫

週予定を活用した自己決定の工夫

- (3) 「周囲の理解」の支援においては、校内での研修や情報共有を随時行い、多くの教職員の視点から児童のアセスメントとプランニングを進めた。それによってSSRについての理解が深まり、「チーム学校」として組織的に不登校支援や未然防止に向けた対応につなげることができた。
- (4) 児童の社会的自立を見据えた三つの要素を軸にした支援を充実させることで、児童の自己表現が促された。SSRが利用する児童にとって安心して成長できる居場所の一つとなった。

4. 今後に向けて

- (1) 児童が更に安心して成長できるSSRにするために、日頃から児童の状況について情報共有、連携を図りながら全ての教職員が主体的にSSRに関わり、校内体制としてのSSRを確立し、継続して運営できるようにしていく必要がある。
- (2) 関係機関等との連携や学校を越えた教職員同士のつながりを大切にしたいうえで、情報共有や相談することができる仕組みの構築が求められる。

(芦谷 道子)

1 共同研究事業

2) 理科教育に関する研究

主体的に学習に取り組む態度の実現を目指す高等学校理科の授業改善

1. 事業名および担当者

事業名は、滋賀県の高校理科に関する研究であり、担当者は以下のとおりである。

教育学系：藤岡達也（代表・トータルアドバイザー）

滋賀県総合教育センター：加藤由紀（参事），澤寿朗（係長），木村晋輔（研修指導主事）

福西洋一（研究員）

滋賀県教育委員会事務局高校教育課：河原真（指導主事）

滋賀県立玉川高等学校：福永裕子（教諭），滋賀県立守山高等学校：西本千晃（教諭），

滋賀県立米原高等学校：林和輝（教諭）

2. 事業の目的

これまで、教育学系理科講座と滋賀県総合教育センターとでは、学校と連携して派遣された研究員とともに、県内での新たな理科教育の開発に取り組んできた。さらに、その取組は教職大学院のストレートマスターにも学びの機会を提供することになっている。今年度も昨年度に引き続き、生徒が自ら課題を設定し、探究の過程を通じた学習活動を充実させることで、高等学校理科で育成を目指す資質・能力の一つである、自然の事物・現象に主体的に関わり、科学的に探究しようとする態度を養うことをねらいとした。特に、「生徒が主体的に学習に取り組む姿」につながる仕掛けについて多角的に協議することで授業のデザインの改善点を見いだすことが本年度の目的とされた。

3. 事業の概要

1. に記載したメンバーからなる専門・研究委員会は総合教育センターを中心に5回開催された。また、各高等学校での実証授業は、それぞれ2回実施された。実証授業の前後には教育センターで、様々な視点から授業内容や方法について振り返り、科目・学校に関わらず、共通的な観点からの探究活動の在り方を探った。右の写真はそのような振り返りを行っている状況を示している。特に実証授業の後は、探究の過程を通じた学習の展開や学習評価に関する教員の実態を把握し、高等学校理科における課題を明らかにして、指導改善の視点を明確にした。



昨年の取組を踏まえて、今年度も「課題の設定」を重視する探究の過程を通じた指導計画を行うにあたり、本研究では課題の把握(発見)において「自然事象に対する気付き」から「課題の設定」につなげる学習活動の展開が試みられた。具体的には、観察や実験等を通して、他者の意見や得られた結果と自身の考えとの差異を基に、生徒自身で課題を設定する学習活動を実施した。今年の取組による成果を考察する。重要であったのは、第1回目と第2回目の間に行われた協議と言える。第1回実証授業の検討

から、3名の研究委員の試行錯誤によって、生徒が自ら考え、学習を進める中で、結論にたどり着いたり、疑問を解決したりする様子を共有することができたと言える。その後、探究の過程を進めるにあたって、「自然事象に対する気付き」、「課題の設定」、「仮説の設定」、「検証計画の立案」に関する質問について、指導上の困難さを共有した。これを踏まえ、第2回の実証授業にあたっては、取組の過程に「自然事象に対する気付き」、「課題の設定」、「仮説の設定」、「検証計画の立案」のいずれかを含めることとし、授業を計画し、実証授業が行われた。写真はその一例として「生物」の授業に関する準備状況である。最初の授業後には、計画された授業案をもとに生徒が主体的に学習に取り組むための仕掛けについて協議が行われた。「生物」の授業案は「仮説の設定」と「検証計画の立案」を取りあげた。光合成についての単元で、授業の導入部をどう工夫をすれば生徒が自分事ととらえて学習を進めるのかについて事前協議が行われた。課題の設定に生徒が参加できる場を作る、自分の意見と周りの意見や教科書の内容、観察結果等との違いに気付かせるという手法が検討された。「化学」の授業案は、「仮説の設定」、「検証計画の立案」、「表現・伝達」の過程を取りあげ、導入を生徒が自分事として捉えることのできるものにするにはどのような手立てがあるかについて協議が行われた。協議の中で、「ヘスの法則に生徒が気付く」ことを目標に授業を組み立てる方向に変更して、検証計画を立案、実験を実施し、ヘスの法則を自分の言葉で説明ができることを最終目標とする授業展開を行うこととなった。「地学基礎」では、「仮説の設定」と「考察・推論」を繰り返すことで、ハドレー循環や低・中・高緯度に存在する大気循環について理解をするということを目的にしたものであった。途中経過の状態をどのように見取り評価するか、ワークシートに最初から書ける生徒と、最初は書けなかったが活動の結果書けるようになった生徒との違いをどのように見取るか等の評価の視点での議論や、書けるスキルを身に付けさせるための長期的な視野を持った指導の必要性についても協議がなされた。これらの授業改善に取り組まれ、第2回実証授業が行われた。これらの成果も踏まえ、最終的なまとめがされた。



4. 今後に向けて

高校生に対して、探究的な活動を促すことを目的とした取組であったが、指導する教員の探究的な取組の経験は大きいと考えられる。昨年に引き続き、生徒自身が見通しを持ち、観察や実験等の取組を通して、他者の意見や得られた結果と自身の考えとの差異を基に、課題を設定する学習活動を行うことが目指されたが、指導する教員側の力量形成は不可欠である。教員自身の学びや経験は重要であり、継続的な課題である。確かに、探究の過程を通じた学習活動の展開の中で、協働的な学びを充実させるために、多様な他者と協働して、課題に対して解決しようとする姿勢は、教員としても意識する必要がある。ただ、生徒自身の乏しい知識の中で、探究活動を進めようとしても学びの質の向上は期待できない。

今後、高等学校理科に求められる資質・能力を育むために、様々な生徒の実態に合わせた指導計画の充実を図り、学校や個に応じた探究の過程を踏まえた学習活動の推進を教員が意識する必要がある。評価面では、探究活動の中でのルーブリックの効果的な活用を、観点別評価の整合性とも図りながら研究を進める必要がある。さらに、県下の高等学校では、教科・科目についての横断的な取組の意識が全体的に弱いのが気になる。今後も引き続き、理系総合的な STEM や文理融合型の STEAM 教育の動向を掌握し、これからの時代に対応した科学教育の在り方を検討していくことが求められる。（藤岡 達也）

1 共同研究事業

3) デジタル・シティズンシップの育成を目指す中学校における取組のあり方 ーデジタル技術の活用に焦点を当てた組織的な取組を通してー

1. 事業名および担当者

事業名は、「デジタル・シティズンシップの育成を目指す中学校における取組のあり方ーデジタル技術の活用に焦点を当てた組織的な取組を通してー」であり、担当者は、次のとおりである。

滋賀県総合教育センター：獅子堂 秀雄(所長)，加藤 由紀(参事)，西塚 洋(研修指導主事)，
北村 拓也(主任研究員)，中西 祐二(研究員)

滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課：皆川 健人(主査)

湖南市立石部中学校：山際 真陽(教諭)

愛荘町立秦荘中学校：稲葉 勇人(教諭)

学部教員：岳野 公人

2. 事業の目的

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(答申)」において、子どもたちの資質・能力を確実に育成するため、学習指導要領を着実に実施することと「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実が求められており、これには ICT の活用が重要であると述べられている。また、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実には、子どもたちのデジタル・シティズンシップの育成が重要であるとされている(「Society5.0 時代の実現に向けた教育・人材育成に関する 政策パッケージ」)。このことは、「滋賀の教育大綱(第4期 滋賀県教育振興基本計画)」においても、デジタル・シティズンシップの観点を踏まえ、デジタル社会の構成員の一人として、自ら判断し責任ある行動ができる力や、自らの意思で積極的にデジタル社会と関わっていく態度を育むことの重要性が示され、滋賀県においても求められていることである。令和5年度は、滋賀県総合教育センターにおいて、小学校を対象にデジタル・シティズンシップを育成する研究に取り組んだ。今年度は、中学生を対象として研究を行い、デジタル技術の活用に焦点を当てた授業実践や学校内で組織的な取組を行うことを通して、「自ら判断し、責任ある行動ができる力」と「積極的にデジタル社会と関わっていく態度」という生徒のデジタル・シティズンシップの育成を目指す。

3. 事業の概要

本事業では、「デジタル・シティズンシップの三つの観点に基づいた指導の方向性について共通理解を図ること」「技術分野、社会科、道徳科、特別活動においてデジタル・シティズンシップの学習テーマと関連付けた授業を実践し、成果と課題を検証すること」「生徒会活動などで授業での学びを生かす取組を行うこと」「学校での学びを家庭に発信し、家庭との連携を図ること」の4つを取組として行い、中学校におけるデジタル・シティズンシップを育成する取組のあり方を示すことにつなげた。

本事業の研究の経過は以下のとおりである。学部教員は、専門・研究委員会および実証授業、質問紙調査の結果の分析において指導助言を行った。

4月：研究構想研究推進計画の立案

5月：研究協力校での研究説明の実施，生徒・保護者・指導者対象質問紙調査(始期)の実施と分析
6月：第1回専門・研究委員会
7月～8月：実証授業Ⅰ，第2回専門・研究委員会
9月～11月：実証授業Ⅱ，生徒・保護者・指導者対象質問紙調査(終期)の実施と分析
第3回専門・研究委員会
12月～3月：研究のまとめ

(1)実証授業Ⅰより

第3学年の道徳科の授業「言葉の向こうに(日本文教出版)」において、「対人関係とコミュニケーション」の学習テーマと関連付けた授業を実践した。ネット上でのやりとりには、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、オンライン上でよりよいコミュニケーションを図ろうとする判断力を養うことをねらいとし、教材文のオンライン上に書き込まれた内容を「良いと感じる内容」「悪いと感じる内容」「どちらともいえない内容」に分類したり、どの段階でどのような行動をしていけばよかったのかを考えたりする学習内容であった。

授業において、オンライン上の投稿は人によって受け止め方が異なることや、投稿する際には肖像権等について注意しなければならないことを発言する生徒の姿が見られた。授業後の協議で、「デジタル機器、特にSNSについて、生徒の中で、使うことが好ましく思われていない現状があるのではないかと感じる。活用の好事例を紹介して、大人や生徒の認識を転換していく必要がある」ことを助言した。

(2)実証授業Ⅱより

第3学年の社会科の授業「民主政治と政治参加」において、「ニュースとメディアリテラシー」の学習テーマと主体的に政治に参画するための方法を考える学習内容を関連付けた授業を実践した。有権者の一人として、インターネットを有効に活用し政治に参画する方法を考えることができることをねらいとし、「世論とマスメディア、メディアリテラシーについて理解する」や「インターネットを活用して投票意欲を高める方法を考える」などを学習内容とした実践であった。

授業では、「だれに投票していいかわからない」や「選挙に興味がない」という課題に対して、「SNSを使って政策をわかりやすく伝える」「ネット投票を進める」などの意見が出され、SNSを活用して若年層の投票率が低いことをどのように解消していけばよいかを考える姿が見られた。授業後の協議で、「生徒がデジタルデバイスを日常的に使用している中で、学校においてデバイスの使用をどう社会参画につなげる学習をしていくかが重要である」ことを助言した。

4. 今後に向けて

本事業を通して下記の課題も示された。

- ・全ての生徒が授業での学びを生かす取組に関わることができるよう、教育活動全体においてカリキュラム・マネジメントの視点から学習内容や学習計画を見直し、デジタル・シティズンシップの育成を図る取組を開発、充実させていく必要がある。
- ・デジタル技術をよりよく活用することの重要性が一層高まっていく中で、就学前から高等学校まで、それぞれの発達段階に応じて系統的な学びができるように研究を進めていく必要がある。

今後はこの課題を踏まえ、さらなる推進が期待される。

(北村拓也・岳野公人)

1 共同研究事業

4) 幼稚園における遊びの中で気づき，学び，楽しむ魅力的な造形活動の追究 ～造形遊びや鑑賞活動を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「幼稚園における遊びの中で気づき，学び，楽しむ魅力的な造形活動の追究～造形遊びや鑑賞活動を通して～」であり，担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木 善治

豊郷幼稚園：大和 高成（園長），教職員

2. 事業の目的

幼稚園児における造形遊びや鑑賞活動の効果を検証する。

3. 事業の概要

（1）研究の目的

申請者は4月に依頼を受け，6月に豊郷幼稚園教員を対象として造形遊びや鑑賞活動の研修会（図1）講師をさせていただいた。その研修会の内容を受けて，子どもたちを対象とした造形活動や対話型鑑賞活動などの共同研究の依頼を受けた。そこで，筆者が幼稚園児を対象とした出前授業を行い，その様子を豊郷幼稚園教員に参観していただきながら，幼稚園児における魅力的な造形活動の在り方を学び合う機会とした。



図1 職員研修中の様子

（2）成果と課題

10月に年長・年中児童を対象として，ステージもある広い空間において「対話型鑑賞（作品2点）」と「造形遊び」を休憩時間を含めて約60分間実施した。造形遊び「いっばいつかってなにしよう」においては，紙コップ3000個，エコプラス，コースター，傘用ビニール袋などを豊富に準備し実施した。

対話型鑑賞においては，主に「何が見えますか？」「この作品になまえを付けるとしたら，どんな名前・題名をつけますか？」という投げかけに対して，幼稚園においても小学生と同様に，図2のように進んで発表する姿がみられた。そして，友だちが発表した内容に笑顔で拍手をおくる園児の姿が見られた。その後の造形遊びにおいては，思い思いに材料を手にしながら，新しい意味や価値をつくりつくりかえつくり続け，没頭する姿が見られた。



図2 対話型鑑賞中の様子



図3 造形あそびに夢中になって取り組む園児の姿

その様子を参観されていた先生方も、子どもたちの姿から子どもが感じ、考えることや子どもの気持ちに思いをはせ、寄り添いながら、保育において大切なことを学び合う姿をみることができた。参観された先生方が記した任意のアンケートにその成果が端的に記されているので一部紹介させていただく。

- ・職員が6月に受けた内容と似た内容の造形遊びをしていただき、子どもたちの発想力の豊かさを改めて感じました。 同じ素材に対して、様々な表現方法でそれぞれのイメージを形にしており、一人で黙々とあそぶ姿・友だちと一緒にあそぶ姿など取り組みも様々で、見ていて楽しくなりました。とても勉強になりました。ありがとうございました。
 - ・子どもたちのエネルギッシュな活動に目をうばわれてしまいました。 自分で決めて、自分でつくる充実感も味わっていたように思いました。あと30～60分間活動する時間が長ければ、どうなっていたらこうと考えるとわくわくします。紙コップを並べていた子たちは、わくわくしたり、どきどきしたり、落胆したりして、心がずい分動いていました。子どもたちの普段のあそび（おにごっこやかくれんぼ、ドッジボールなど）と共通点が多い活動だなと思いました。
 - ・つくりながら、頭を使い「次こうしようかな」「いいこと思いついた」と思慮する姿がとても印象的で、子どもたちの頭の中が見えたように感じました。 「何にでもできる幅の広い題材設定」ということが子どもたちもひかれて、造形活動に夢中になれたのではないかと思います。年少児でもできそうなものがありましたので、やってみたいで
- （下線部は筆者追記）

他の年齢の園児における題材の工夫などを明らかにするために引き続き共同研究を継続していきたい。今後の課題とする。

4 今後に向けて

幼稚園における遊びの中で気づき、学び、楽しむ魅力的な造形活動を追究し、成果と課題を明らかにすることができた。今後は、共同研究を継続させていただき、幼稚園児が互いのよさや個性を認め尊重しやすい造形活動を更に追究すると共に、幼稚園教諭の省察を促しやすい研修のあり方も追究していきたい。

（青木 善治）

1 共同研究事業

5) 保育園における遊びの中で気づき、学び、楽しむ魅力的な造形活動の追究 ～造形遊びや鑑賞活動を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「保育園における遊びの中で気づき、学び、楽しむ魅力的な造形活動の追究～造形遊びや鑑賞活動を通して～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木 善治

愛里保育園：小野 淳（園長），教職員

2. 事業の目的

保育園児における造形遊びや鑑賞活動の効果を検証する。

3. 事業の概要

（1）研究の目的

申請者は4月に依頼を受け、6月に愛里保育園教員を対象として造形遊びや鑑賞活動の研修会（図1）講師をさせていただいた。その研修会の内容を受けて、子どもたちを対象とした対話型鑑賞活動や造形活動の共同研究の依頼を受けた。そこで筆者が保育園児を対象とした出前授業を行い、その様子を愛里保育園教員に参観していただきながら、保育園児における魅力的な鑑賞活動や造形活動の在り方を学び合う機会とした。



図1 職員研修中の様子

（2）成果と課題

11月に年長児童を対象として、広い空間において「対話型鑑賞（作品2点）」と「造形遊び」を休憩時間を含めて約60分間実施した。造形遊び「いっぱいつかってなにしよう」においては、紙コップ3000個、エコプラス、コースター、傘用ビニール袋、わり筆などを豊富に準備し実施した。対話型鑑賞においては、主に「何が見えますか？」「この作品になまえを付けるとしたら、どんな名前・題名をつけますか？」という投げかけに対して、保育園においても小学生と同様に、図2のように指示棒を効果的に使いながら進んで発表する姿がみられた。

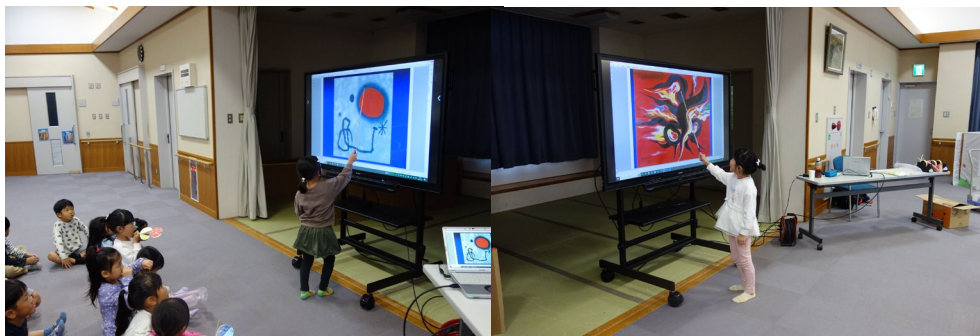


図2 年長児における対話型鑑賞中の様子



図3 造形あそびに夢中になって取り組む保育園児の姿



図4 出前授業後に教室でつくる園児の姿

その後の造形あそびにおいては、思い思いに材料を手にしなが、新しい意味や価値をつくりつくりかえつくり続け、活動に没頭する姿が見られた。参観されていた先生方は、子どもたちの姿から正解がない造形あそびの魅力を再確認することにつながり、造形活動や保育において大切なことを出前授業後の研修会においても学び合う姿をみることができた。驚いたことに、出前授業後に園児たちはもっとやりたいと保育士にお願いし、図4のように保育室でつくり続ける姿をみることができた。参観された先生方が記した任意のアンケートに本事業の成果が端的に記されているので一部紹介させていただく。

- ・環境のつくり方で、子どもたちの遊びが広がるのが改めて分かった。遊びの中で工夫したり、友だちと一緒に協力したり、一緒の場に居ることで意識して遊びが広がったりする姿が多く見られた。
- ・正解がない遊びというのが、自由な発想につながっているのだと感じました。イメージしながら取り組んでいる子もいましたが、「やってみて」そして「感じて」そしてまた「やってみる」姿も多く、この姿が遊びを広げたり、友だちともつながったりしていました。この自由な発想は、主体的な姿につながるんだとも感じました。造形あそびだけでなく、日々の保育にもつながることも多く、今回学んだことを活かしていきたいと思いました。
- ・あっという間の造形あそび、ありがとうございました。子どもたち全員が興味をもって活動に参加していました。自信のない子たちが多いので、絵を見て自由に発言できる場でも「○○って言うといいかな？」と聞いてくる子がいました。それでも時間と共にリラックスし、後半には「もっとしたい」「あれほしい」「続きやりたい」と楽しさを十分に感じている様子が伝わってきました。ありがとうございました。
- ・青木先生によるご指導が終わってから、保育室に戻った子どもたちは「もっとやりた〜い」と保育士にお願いして、活動を再開しました。その活動は次の日の登園後にまで及び、保育室の半分が紙コップの造形物に占拠されることになりました。高く積むために椅子に乗ったり、崩れてもまた積み直したりしてとても素敵な造形物になりました。これを見ながら、子どもたちは給食を食べたり、緩衝材でものづくりをしたり、帰りの会をしたりしていました。満足感、充実感にあふれた子どもたちの表情がとても印象的でした。

(下線部は筆者追記)

4 今後に向けて

今後は、保育園児が互いのよさや個性を認め尊重しやすい活動や環境のあり方と共に、保育教諭の省察を促しやすい研修のあり方も追究していきたい。そして、共同研究を継続させていただき、保育園における遊びの中で気づき、学び、楽しむ魅力的な造形活動を更に明らかにしていきたい。

(青木 善治)

1 共同研究事業

6) アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 2024 ～対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 2024～対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木善治

彦根市立平田小学校：北川祐子（校長）、教職員・学級担任等

2. 事業の目的

朝学習時における朝鑑賞（対話型朝鑑賞）の4年目の効果を検証する。小学校には「朝読書」「朝学習」など、朝学活前に短時間の学習活動を行う時間がある。その朝学習に充てている時間を活用し、学級担任がアート・カードなどの美術作品を使用し、「対話型鑑賞」を実施している。4年目の効果と課題を明らかにする。

3. 事業の概要

（1）研究の目的

筆者の前任校および、埼玉県所沢市立三ヶ島中学校において効果のあった朝鑑賞を共同研究依頼のあった彦根市立平田小学校において2021年9月より実施し優れた効果が表れている。特定の美術についての知識を介さずに作品を楽しむ体験を他者と共有することを通して、アート思考や、想像力や自分で考える力を育てること、自分の考えを話す力や他者の話を聴く力といったコミュニケーションの能力や新しい意味や見方や感じ方並びに自己肯定感を育むことが可能となる。アート思考や教師の変容にも着目しながら、毎年異動職員が伴う中での効果や課題を更に明らかにしていく。

（2）成果と課題

朝鑑賞を実施された担任の先生方が記した任意のアンケートにその成果が端的に記されているので紹介させていただく。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・朝鑑賞のとき、子どもが絵を楽しそうに見ていて、鑑賞する楽しみに気づいている。・他の子の意見を聞いて想像を膨らませる子もいた。・<u>1枚の絵をもとに様々な意見を自由に出し合える雰囲気がとてもいいな</u>と思いました。<u>こういった雰囲気が日頃の授業にも活かされていたように思います。</u>・友だちの発表を聞いて、「なるほど」「たしかに見える」など肯定的な言葉を言えるようになってきました。・低学年（2年生）の子どもたちは、意欲的に発表をしています。<u>普段、授業の中でなかなか発表しない子どもも、積極的に発表をしています。</u>・子どもたちは、その絵や立体を見て自由に発想し自由に発言している様子が見られます。<u>友だちの感じ方に、自分とは違うものを感じて驚く子もいます。その時間は違いを楽しむ時間かなと思っています。</u> |
|---|

- ・1学期に比べ学校生活の中で友達の意見を否定することが2学期は減った気がする。子ども同士の意見のつながりが発表の仕方や発表内容に出てきた感じがする。
 - ・お互いの考え方を受容する大切さや、他者のよさを参考に必要性について学ぶことができた。多様性の時代であり、このような取組の意義を感じる。
 - ・いろいろな見方や考えを認め合う経験が、朝鑑賞時自然にでき、子どもたちの顔がとても穏やかでよいなと思います。
 - ・多様な考えにふれることができ多面的にもものを見ようとする力がついたように思います。
 - ・自情学級で今年、朝鑑賞をして今までで一番面白かったです。子どもたちの創造力の豊かさ、一人の児童の発言から話がどんどん膨らんでいくのが楽しかったです。2学期最後の朝鑑賞では、今まで一度も発言できなかった子が発表でき、成長を感じることができました。
 - ・子ども達が自分の思ったことを思ったように話せるよい時間となっている。話し終わったあとの笑顔がよいです。
 - ・絵の細部までよく見て考えることができています。絵の裏にあるストーリーを組み立てて楽しんでいる。
 - ・どの子も自分の思いをみんなの前で発表できた。1～6年まで様々な学年の子がいるのが同じ絵を見てみんなで色々話せていた。子どもの発想力、創造力はすごいと思った。
- （下線部は筆者追記）

また、平田小学校の先生方から随時次のような質問や悩みをいただいている。

「どういったアート・カードを題材として選ぶとよいのか（図工のアート・カードの中から）毎回悩みます」「1～6年までが考えられる絵を見つけることが難しい」等、これらの貴重な質問や悩みに対して、筆者は「平田小学校朝鑑賞参観レポート」を随時記し、少しでも一助になればと思い、発行させていただいてきた。

Q2：発表者が限定されてしまいます

A2：ファシリテーターは先生がされているので、挙手していなくても子どもの表情を読み取って指名されてはいかがでしょうか。「何が見えますか」に対してなら、作品にもよりますが、見えていることを述べるので発言しやすいと思われます。その際、答えられなかったら「また後で考えがまとまったら教えてください」と伝えてみてはいかがでしょうか。ただし一番大切なことは子どもが「発言する」ことではなく、子どもが「思考する」ことです。友達の発言を聞いているようであれば、それを受けて発言していない子も思考しているはず。子どもたちの発言などの表面的なことではなく、表情などから子どもたちの内面（思考）を先生は常に捉えるようにしていきましょう。友達の発言をしっかりと聞ける（傾聴）ことの方が実はとても難しいことだと感じています。そんな姿勢でいていただけると幸いです。

私は朝鑑賞時の際に、ポストイット等の付箋をあらかじめ配布しておき、子どもたちが考えた題名と氏名を書いてもらい、廊下などに作品と共に掲示しておきました。すると、発言できなかった友達の考えやアイデアを共有することができました。

先生方一人ひとりの悩み事に引き続き対処させていただき、継続していきたい。

4 今後に向けて

朝鑑賞実施4年目を迎えると、異動されてきた先生方との意識の違いがみられてきた。そこで異動された先生方に朝鑑賞のミニミニ研修会をさせていただき対話型鑑賞の魅力を体感していただいたり、「朝鑑賞参観レポート」を配布させていただき、朝鑑賞の留意点などの確認をさせていただいたりしてきた。4年目を迎えた平田小学校は、どの学級も朝からとてもよい雰囲気である。朝鑑賞の効果や課題を引き続き明らかにしていきたい。

（青木 善治）

1 共同研究事業

7) アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 2024 ～大規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「アート思考や自己肯定感を高め、互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成 2024 ～大規模校における対話型朝鑑賞（朝鑑賞）の活動を通して～」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木 善治

米原市立米原小学校：億田 明彦（校長），教職員・学級担任等

2. 事業の目的

小学校には「朝読書」「朝学習」など、朝学活前に短時間の学習活動を行う時間がある。その朝学習に充てている時間を活用し、学級担任が美術作品を使用し、「対話型鑑賞」を実施する。すなわち「朝鑑賞」を月 1 回程度実施し、米原市内の大規模校、3 年目におけるその効果や課題を明らかにする。

3. 事業の概要

（1）研究の目的

「朝鑑賞」とは、朝学活の前に朝読書や朝学習に充てた 10 分～15 分間を使い、担当の教師が絵画等の作品を各教室に持参し、全校で対話型芸術朝鑑賞を行うという取組である。今年度も異動された先生方が大勢いらっしゃったので、4 月下旬に異動された先生や希望者の先生方に対して、朝鑑賞に関する職員研修会を実施させていただいた。米原小学校は学年 3 学級以上の大規模校である。滋賀県内には大規模校も多くあるため、大規模校における「朝鑑賞」の成果と課題、そして適切な運営方法等を明らかにしていく。

（2）成果と課題

朝鑑賞を実施された学級担任の先生方が記したアンケートにその成果が端的に記されているので、その一部を紹介させていただく。

- ・選ぶ題材聞き方によって子どもの目が輝いて、堂々と話す日がありおもしろかった。
- ・自分の思いや感想を、思ったままに伝えられるようになってきました。
- ・学力がしんどい子も前向きに参加できる。どんな意見でも受け入れられる。
- ・朝鑑賞の時は、正解がそれぞれにあるから自由に発言できるという安心感がありました。
- ・正解が自分の見えたことや考えたことというのが子どもたちにとっても取り組みやすいものだったので、とても意欲的に発表する姿が見られた。発想力の向上につながったと思う。
- ・子どもたちが自由な発想で発言することができた。
- ・朝鑑賞を重ねることで、どんな考えでも発信していいんだという様子が増えていった。
- ・学力が高い子も低い子も、自由に発言することができる。正解がないため、楽しく自由に想像して話す姿が見られた。
- ・自由に子どもたち同士で意見を出し合い、聴き合うよい時間になっています。図工の鑑賞の時間より細かい所まで見るようになったと思います。朝により良い話し合い活動から始めることが一日のよいスタートが切れていると思います。

・子どもたちは朝鑑賞大好きです。子どもならではの面白い考えがポンポン出てきて、楽しんでいます。私自身も「そんな見え方もできるかな～」と新しい発見があります。

・子ども達が楽しく活動し、朝から明るいムードになる。意見を述べても否定されないことがないので、どの子も前向きに参加でき、朝鑑賞をしている時は、クラスの一体感が高まっています。この一体感が一つのクラスとして大切なところだと思っています。自分自身も予想しながらことが、子どもの考えによって出てきますし、活動していて楽しいです。

・一時期、なかなか発表できないような雰囲気があったのですが、朝鑑賞ではたくさん手が挙がり、発言しやすい雰囲気をつくることができていました。また、学習では厳しい児童も、朝鑑賞では多くの想像をして、いきいきと発表することができていました。

・答えがなくて、自由に答えられるという点で、朝鑑賞が好きな子が多かったです。私自身もいろいろな絵や作品が見れて楽しかったです。

・絵からわかることを意欲的に見つけられるようになってきた。また、想像力も豊かになったと思う。

・今年度教科担任制で6年の社会をしていて、資料や出来事から「なぜこのようなことが起きたのか」「人々の思いは」などの見方・考え方を鍛えることが朝鑑賞でできると思いました。

・図工の鑑賞の視点が磨かれた。

・正解がなく、子どもたちが見て感じたこと、思ったことを自由に発言でき、安心して楽しく取り組めたことがよかった。友だちの意見を聞いて更に想像もふくらみ、子どもたちは毎月楽しみにしていた。
(下線部筆者が追記)

米原小学校の先生方から次のような質問や悩みをいただいた。筆者は「米原小学校朝鑑賞レポート」を随時発行させていただき、その中でQ&Aとして先生方一人ひとりの悩み事に対して少しでも一助になればと思い、以下のような内容のものを発行してきた。「実施するなかで教師と児童の1対1になってしまうことが、難しいと感じます」等の悩みをいただいた。

これらの貴重な質問や悩みに対して、筆者は「米原小学校朝鑑賞参観レポート」の中でQ&Aとして以下のようなかたちで随時発行させていただいてきた。

Q4：月1だと、成果が実感しにくい。・朝鑑賞の学びを他教科につなげることが難しく感じた。帯で「こんな取組（力をつけていく）」というのがあると、もっとやりやすさを感じた。

A4：率直にお書きいただきまして、誠にありがとうございます。ご質問の朝鑑賞の学びを他教科につなげることが難しく感じたや成果が実感しにくいについて、そもそも私たち教師が子どもたちの姿で一番求めるものはなんでしょうか。私は、「思考し続ける子ども」の姿だと考えています。子どもが考えているかどうかが一番重要なのです。実は、授業中教師が熱心に教えれば教えるほど、「お客さん」が大勢生み出されていきます。自ら思考しなくても、先生の説明を聞いて板書を書き写していけば、学んでいると勘違いしてしまいます。そして、「主体的・対話的で深い学び」ではなく、受動的な学びになります。したがって、子どもを見る際に、全ての授業において、子どもが発言するかどうかではなく、「思考しているかどうか？」この視点で、常に子どもたちと向き合っていくと、子どもに対する見方や自分の授業のやり方が変わっていきます。ぜひ、この視点でチャレンジしてみてくださいましたら幸いです。

引き続き、先生方一人ひとりの悩み事などに対処させていただき、継続していきたい。

4 今後に向けて

中日新聞（2024年6月28日「米原小美術作品を朝鑑賞 正解ない問い考え発表 児童の自己肯定感育む」）に米原小の朝鑑賞の様子が掲載された。子どもたちは、朝鑑賞中と同じ作品を見ていても、多様な見方や感じ方があり、互いのよさや個性を発揮しやすく、同時に認めやすい環境もつくられ、自分なりの答え（最適解）を楽しみながら生み出すといったアート思考の一端の姿も確認することができた。引き続き、朝鑑賞の効果や可能性を今後も追究し、全国への朝鑑賞の普及に努めていきたい。

（青木 善治）

1 共同研究事業

8) 「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう、小・中学校における校内研究のあり方Ⅱ ー児童生徒の学びの姿を見取ることを通した教員一人一人の探究的な学びー

1. 事業名および担当者

事業名は「「新たな教師の学びの姿」の実現に向かう、小・中学校における校内研究のあり方Ⅱー児童生徒の学びの姿を見取ることを通した教員一人一人の探究的な学びー」である。担当者は次のとおりである。

教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）：辻 延浩，教育学部附属小学校：齋藤昌代副校長，栗東市立葉山中学校：山中美幸主幹教諭，野洲市立祇王小学校：森渉太郎教諭，多賀町立多賀小学校：奥村いつ子教諭，大津市立富士見小学校：福井尚美教諭，米原市立米原中学校：横塚祐衣教諭
滋賀県総合教育センター：島内佑祥研究員，竹内達哉研究員，寺川絵理研修指導主事，高橋利彰主査，加藤由紀参事

2. 事業の目的

本研究では、プロジェクト研究実践校の校内研究主任を務める研究委員が、校内研究活性化に関する研修と実践の往還を通して自校の教員が校内研究の主題達成に向け、問いを立てて実践し、児童生徒の学びの姿を見取ることを通して授業実践を省察し、次の実践に生かす探究的な学びの実現を目指した校内研究の取り組みをまとめるとともに、成果と課題について検討する。

3. 事業の概要

(1) 教員の探究的な学び

校内研究において教員一人一人の授業に対する考え方を広げ深めて、「新たな教師の学びの姿」の実現を目指す。そこで、教員が自らの学びをデザインできるように、教員の探究的な学びを四つのプロセスで捉え(図1)、校内研究を進める。

1) 立問(問いを立てる)

教員一人一人が、自校の現状や課題を把握し、自分の強みや課題を基にして、校内研究の主題の達成に向けた自分なりの問いを立てる。その際、目指す児童生徒の学びの姿を明確にし、問いに基づいた具体的な手立てを考えることができるようにすることで、教員の探究的な学びを充実させる土台づくりを行う。

2) 実践(実践する)

授業実践では、指導案で本時における目指す児童生徒の姿と指導の手立てを確認し、本研究で新たに作成した「『子どもの学びの姿』見取りシート」(図2)を活用して、授業者の問いに基づく手立ての有効性を児童生徒の学びの姿から見取る。「『子どもの学びの姿』見取りシート」には、参観の視点として授業者の問いと、その問いに対する本時における目指す子ど



図1 教員の探究的な学びのプロセス

「子どもの学びの姿」見取りシート		
校内研究主題		
目指す子どもの姿		
授業者の問い(参観の視点)		
a		
授業者の問いに対する本時における目指す子どもの姿(ルーブリック)		
A	B	C
参観しての気づき		
b		
場面	子どもの学びの姿	授業者の指導の手立て
	○○○○○ ○○○○○	・授業者の手立て①
	△△△△△ △△△△△	・授業者の手立て②
	□□□□□ □□□□□	・授業者の手立て③

図2 見取りシート

もの姿(ループリック)を示し(図2のa)、授業実践の場面、学びの姿、指導の手立てを記録する欄を設ける(図2のb)。

3) 省察(成果と課題を明らかにする)

授業実践後の研究会等で、授業者は「『子どもの学びの姿』見取りシート」を活用して見取った児童生徒の学びの姿を参観者と共有し、成果と課題を考察する。授業における児童生徒の学びの姿は、授業者の問いに基づく手立ての有効性を検証するうえでの根拠となる。

4) 再考(新たな問いにつなげる)

授業者は、省察した授業実践の成果と課題を基に自分の問いを再考し、新たな問いにつなげる。授業研究会や日々の自己研鑽で得た気づきや学びを整理し、それを踏まえて新たな問いを立て、次の実践に向かうことで「継続的な学び」へとつなげる。

(2) 教員および児童生徒の変容に関する考察

1) 教員対象質問紙調査の結果

教員を対象とした質問紙調査始期(6月)、終期(11月)を実施した。終期では、今年度の校内研究の取組が、自分自身の考え方や行動を変容させるものであったかについて、「変容的学習尺度」を用いて調査を行い、滋賀県教育委員会が定める三つのキャリアステージ別に分析した。「変容的学習尺度」における「パースペクティブ(ものの見方)の変容」「混乱的ジレンマ」「自己省察」においては有意な差は見られなかった。キャリアステージごとの分析では、第IIステージの教員の「パースペクティブの変容」が有意に向上した。

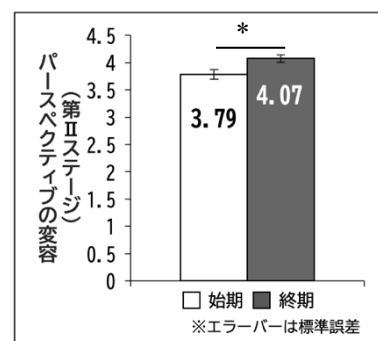


図3 第IIステージ教員のパースペクティブの変更

2) 児童生徒対象質問紙調査の結果

児童生徒を対象とした質問紙調査始期(6月)、終期(11月)を実施したところ、555人の回答があった。具体的には、校内研究の取組が、児童生徒の主体的に学習に取り組む態度が向上するものであったかについて、3因子15項目で構成される「主体的学習態度尺度」4)を用いて調査した。なお、本尺度は因子分析を行い、統計的に信頼できることを確認している。始期と終期における得点の平均に差が見られたか分析したところ、有意な差は見られなかった。その一方で、第8回研究会において、研究委員からは「年度当初と比べ、教員から見る児童生徒の学びの姿には全体的に変容が感じられる」という意見が挙がった。分析結果と研究委員の意見との間にある差異の要因を探るため、児童生徒の学びの変容を、始期の平均得点を基準に、平均より高いグループを高群、低いグループを低群に分けて更に精査した。その結果、低群は「主体性」「協働性」「学習方略」のいずれも有意に得点が向上した。

4. 今後に向けて

教員の探究的な学びを進める際に、校内研究の主題や目指す児童生徒の姿に基づいた「立問」の難しさを、校内研究で支えることによって緩和することができたものの、その解消には至らなかった。教員一人一人の探究的な学びを更に促進するためには、教員の「立問」を支える手立てについて引き続き考える必要がある。また、校内研究を通して教員が授業改善に向けた自己省察をし、自立的に学び続けるためには、教員一人一人がキャリアステージごとの学びの特徴に応じて自分に合った学び方が選択できるようにすること、学んだことを生かして様々なキャリアステージの教員と学び合うことのできるコミュニティの醸成に向けた手立てを講じることにについて更に研究を進める必要がある。

(辻 延浩)

1 共同研究事業

9) 大津市中学校部活動地域移行検討プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名は「大津市中学校部活動地域移行検討プロジェクト」であり、担当者は次のとおりである。

教育学系教育学部：辻 延浩，立命館大学：長積 仁教授，びわこ成蹊スポーツ大学：黒澤寛己教授，
成安造形大学：藤井俊治講師，大津市立瀬田中学校：西田 勝校長，大津市立唐崎中学校：米田博文校長，
大津市スポーツ協会：小野清司会長，大津市市民部スポーツ課：松田直樹課長

大津市教育委員会事務局：上杉康晴学校教育課長，南出 晃学校教育課長補佐，柴原良樹学校教育課指導主事，
川原綾子学校教育課指導主事，小松且弥学校教育課指導主事

2. 事業の目的

中学校部活動の地域移行に向けて、大津市の基本コンセプトを確認するとともに、昨年度実施したモデル事業の拡大と新たなモデル事業の開発に着手し、成果と課題について協議する。

3. 事業の概要

(1) 部活動地域移行コンセプト 一部活動地域移行を進めていく上で大切にしたい点一

○コンセプト：“魅力”を感じる笑顔輝く大津の部活動

○方針：部活動の地域移行を進めることにより，生徒が中学校時代の「今」を充実するとともに「将来」の豊かな人生につながることはもとより，同時に，保護者，地域関係者，教員等の関わる者すべてが，その良さを享受し，「魅力を感じながら豊かな人生につなげていくことができる取組とする。

○取組の方向性：大津の地理的状況，部活動所属人数等の状況を踏まえ，できうところから柔軟，段階的に取り組む。

- ・モデルケース1：人的支援（地域連携）
- ・モデルケース2：所属人数が少ないチームスポーツ
- ・モデルケース3：文化部における大学連携
- ・モデルケース4：個人種目が主なスポーツ
- ・モデルケース5：多様なスポーツや文化体験

学校部活動
指導者：教員

モデルケース①
・部活動指導員、外部指導者の拡充

モデルケース②③
・ソフトボール部における合同部活動
・陸上部、水泳部における合同部活動、クラブ活動

学校部活動
指導者：教員
部活動指導員
外部指導者

地域と連携した活動
指導者：地域指導者等

モデルケース②③④
・成安造形大学による美術部の活動
・ソフトボール協会における活動

モデルケース⑤
・ボルタリング体験会（市教委主催）

地域主体の担い手づくり
・学校運営協議会における協議
・地域スポーツ団体等への協力要請等

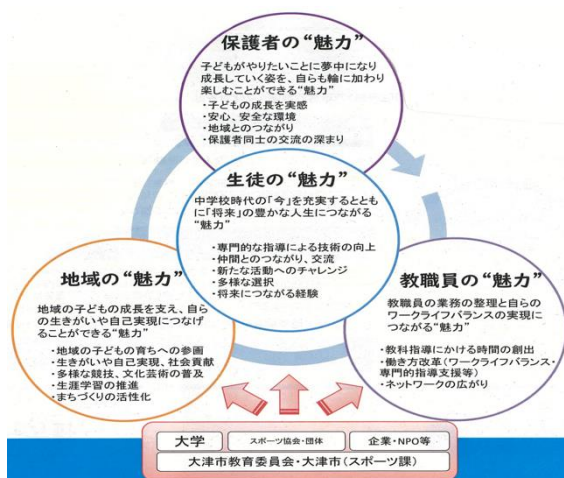


図1 部活動の魅力

図2 取組の方向性と内容

(2) 令和 6 年度事業の実績

①モデル事業 1 ～ソフトボール部のエリア別合同部活動～

A：北部エリア 時間：9：00～12：00，合計 4 回実施，4 校延べ 83 名が参加。

B：南部エリア 時間：9：00～12：00，合計 4 回実施，4 校延べ 199 名が参加。

- ・ 専門的な指導を受け，多様な練習ができ，他校の生徒との教え合いなどで技術が向上したことに喜びを感じている。練習への充実感を得られている生徒が多い。
- ・ 引率の負担は生じるものの，競技経験，指導経験のない顧問にとっては，指導における疑問を競技経験豊富な指導者に質問でき，指導を学ぶ機会になっている。

②モデル事業 2 ～成安造形大学との連携による美術活動～

活動場所：成安造形大学，時間：10：00～12：00，合計 8 回実施，4～7 校が参加。

- ・ 他校の生徒と一緒に一つの作品を創作し，大学生や教授から専門的な指導を受けられることに充実感や達成感を得られている生徒が多い。
- ・ 一度参加したら，続けて参加する生徒が多く，休憩時間も作品作りに没頭するなど，回を重ねるごとに表現力が豊かになっている。

③モデル事業 3 ～陸上部の合同部活動・練習会への学生派遣～

A：3 中学校（志賀中・真野中・堅田中）合同部活動 時間：13：00～16：00，合計 2 回実施。延べ 53 名参加。

B：大津市中学校体育連盟 陸上専門部合同練習会

- ・ 的確な指示や豊富な練習内容など，専門性の高い指導を受けることで，満足感が大きい。タータンなどの環境での活動に充実感を得ている。他校の仲間との練習に刺激を受けている。
- ・ 新たな指導方法の発見や競技経験，指導経験のない顧問にとっては指導における疑問を競技経験豊富な指導者に質問でき，指導を学ぶ機会になっている。
- ・ 引率が 1 名でいいので，部活動指導の負担軽減になっている。

④モデル事業 4 ～多様な機会：ボルダリング体験会～

場所：ロックメイト大津 13：00～15：00，令和 7 年 1 月 25 日（土）に実施。

参加者 17 名（7 校） 志賀中・日吉中・栗津中・北大路中・南郷中・瀬田中・瀬田北中

- ・ 過去に経験したことがない競技種目に参加することで，意欲，向上心をもって参加していた。達成感や充実感があり，グループ同士での声掛けや応援などの交流が活発に行われていた。
- ・ 保護者は新規体験会の機会提供に対して喜んでおり，子どもの新たな活動のチャンスになることを望んでいる。

4. 今後に向けて

令和 7 年度の実施方針として「大津の地理的状況，部活動所属人数等の状況を踏まえ，できうることから柔軟，段階的に」を掲げ，次の 6 つの視点をもとに取り組む。すなわち，①集約化：所属人数が少ない部活動，合同による活動が可能な部活動等，ともに活動する機会を確保。②一般化：モデル事業（ソフトボール，陸上，水泳，ボルダリング，美術）で得た仕組みを他の競技，種目へ。③連携強化：大学・スポーツ協会・競技団体・民間等との更なる連携と指導者の確保。④人的支援：部活動指導員の増員，外部指導者の確保，大学生の活用。⑤制度設計：実施主体の確保，地域クラブ要件等の制度設計，兼業申請，他市事例調査等の実施。⑥取組周知：生徒・保護者・地域・関係団体等への取組周知である。これらの取組の成果と課題について，引き続きこの懇話会で検討がなされる。（辻 延浩）

1 共同研究事業

10) 校内研究からみる学校改革

～中学校区における Lesson Study シートを活用した教職員の学び合い～

1. 事業名および担当者

事業名は、「校内研究から見る学校改革～中学校区における Lesson Study シートを活用した教職員の学び合い～」であり、次の担当者ならびに機関によって遂行された。

[学部教員] 渡邊慶子

[連携先機関] 甲賀市教育研究所、甲賀市立水口小学校、甲賀市立伴谷東小学校、甲賀市立城山中学校

[連携先担当者] 小松史子(甲賀市教育研究所・課長補佐)

2. 事業の背景と目的

本事業では、各学校の教職員組織が、共同研究をするための場として「校内研究」を捉えている。これまで各学校では、子どもの実態や課題を詳細に捉え、その改善・解決のために、目指す子どもの姿や方向性を各学校内でのみ共有し、具体的な方策を立てて研究を進めてきた。そのために、「校内研究」は、基本的に各校に委ねられてきた。ましてや学校種が異なれば、「校内研究」の目的や方法を共有する機会は一層少ない。したがって、子どもたちの「小中9年間」を一貫して「校内研究」は検討されておらず、同一中学校区における現実的に必要不可欠な小中連携の視点から行われる教育研究活動とはなっていなかった。

甲賀市教育研究所では、令和3年から「校内研究」の在り方を研究してきた。そこでは、「自治体(市)がつなげる校内研究」と題し、「校内研究」を小中連携の視点から研究するための具体的な方法を探ってきた。その成果として、「LSシート」というデジタルツールを介して共有できるワークシートを開発した。LSシートは、「Lesson Study シート」の略名であり、同じ市町内で小学校から中学校へと一貫して持続可能な校内研究を行っていくために、対象となる学校で共通して使用するデジタルワークシートである。そのシートの作成に際して、自校ではない学校の「校内研究」の内容や方法を共有して学び合える教員組織を子どもたちの校区に合わせて設置し、その組織的な研究を具体的かつ継続的に作り上げることを目的とした(令和4年度事業)。このLSシートには、授業計画(Teaching Plan)から授業後の授業検討会(授業評価と改善案: Check&Action)までの経過が記録でき、保管・閲覧・共有等がチャットツール Teams で可能なものとなる。その実用性も令和5年度事業で明らかにした。

これらを受けて、本年度事業の目的は、子どもたちの「小中9年間」の学びの一貫性を意識して、同一中学校区(小学校2校、中学校1校)の「校内研究」を対象とし、異なる学校の教員同士で目的をもって相互に学び合える研究体制をつくることとした。特に、次の点を本事業の研究課題とする:【研究課題】同一中学校区の教職員が、授業実践のための課題や方法の共通点をいかにして相互に発見し合えるか? その際、LSシートはどのように活用できるか?

3. 事業の概要

(1) 同一中学校区の研究主任および自治体(甲賀市)等による組織作り

研究協力校の校内研究主任(研究推進委員)が他校の研究授業や校内研究会に参加することで、他校の教職員の姿に刺激をもらおうと同時に、他校の取組から自校が大事にしていることを再確認することができた。また、3校の取組の中で結び付けられることや新たな視点を見いだす機会を得ることができ、例

例えば次のような変容や気づきが見られた：校内研究の進め方を自校流にアレンジして取り入れる/校内研究のテーマを子どもに浸透させる/部会で取り上げた課題について全体にアイデアを求める/自校がブラッシュアップするための働きかけ方を考える/中学校区として学校教育目標や校内研究テーマに関連性をもたせる/管理職との連携が必要となる等である。

（２）本事業の研究課題とそれに対する結果

本事業の研究課題は次の通りであった。

【研究課題】同一中学校区の教職員が、授業実践のための課題や方法の共通点をいかにして相互に発見し合えるか？その際、LSシートはどのように活用できるか？

本事業の結果として、各校のLSシートをTeams上で共有し、Power Pointのコメント機能を有効活用して、書きことばで交流を行ったことで、その作業の簡易性、具体性、および再生刺激性において効果が得られた。また、それらの効果に関わって、研究協力者となった教員から得られた本事業の取り組みに対するコメントは、次の５タイプに内容を分類できた。①他校の実践のよさ、自身の実践に結び付ける内容、②授業改善を進めるための授業参観の必要性に関する内容、③具体的に同一中学校区の学校間で共通して実施できる取り組み（ICTの効果的な活用、家庭学習（ノート）の在り方）に関する内容、④学習集団づくりの大切さに関する内容、⑤指導工夫や指導上の困難性における相違点や類似点の相互理解に関する内容。二

上記①から⑤に見られるように、教員同士が相互に学び合うためには、第一に、相手となる学校を知ろうとすることや他校の取組から学ぼうという姿勢が必要であった。「校内研究」の目的・方法・内容を相互に知り合うことで、他校の取組のよさや苦勞を知ることが必要である。第二に、教職員一人一人が自分の「指導背景」や子どもたちの学びへ向けた思いを、「校内研究」に関わって言語化することが必要であった。自身の考えを確認したり、学校間や校種を超えて共感ができたりしたという点で、「子どもたちのこれからに向けた学び」を確実に研究しているという自覚につながり、意義深いものとなった。そして、第三に、言語化されたことを「活字」として残すという点も、「校内研究」の反省を再生刺激的に実現でき、具体的な学習指導の分析につながった。このことは、一層、各校の教職員たちが自校の実践、そして同一中学校区全体の教育をよいものにしていきたいという気持ちを高めた。

４．今後に向けて

（１）LSシート及びTeamsの活用の一層の推進

「校内研究」の連携実施のためには、できるだけ多くの教職員が参加できる「場」と、明確に価値観の共有や教育の方向性を確認し合える「機会」の設定が不可欠である。本年度の事業ではTeamsでの共有に一定の成果がみられた。このチャットツールを授業観察や会議の開催に有効利用していきたい。

（２）同一中学校区内での共同研究の実現

同一中学校区での共通した校内研究テーマを設け、共同研究を実現したい。そのために、共通する子どもの実態と課題を明らかにして、そこから適切な研究テーマを設定することが必要となる。これを実現するためには、当該学校同士だけではなく、自治体および有識者による組織作りが一層重要である。

（３）小中連携を通じた教職員の資質向上

校内研究主任の言動は各学校の研究の活性化に直結する。「チーム学校」としての組織力を高めるために、ミドルリーダーとして校内研究主任を担うことができる教職員の育成に本事業をつなげたい。

（小松 史子・渡邊 慶子）

1 共同研究事業

11) 数学的に考える資質・能力の育成に向けた「問題開発・解決の過程」を遂行する高等学校数学科の授業改善～数学的活動を充実させる指導の工夫を通して～

1. 事業名および担当者

事業名は、「数学的に考える資質・能力の育成に向けた問題開発・解決の過程を遂行する高等学校数学科の授業改善～数学的活動を充実させる指導の工夫を通して～」である。

〔学部教員〕 渡邊慶子

〔連携先機関〕 滋賀県総合教育センター

〔連携先担当者〕 長井翔也（研究員）、大石泰士（研修指導主事）

2. 事業の目的

本事業の目的は、滋賀県総合教育センター研究員研究に参加することを通して、県内の教科教育のより一層の発展に寄与することである。本研究では、滋賀県内高等学校の数学科指導者が、数学的活動を充実させる指導の工夫を通して、「問題発見・解決の過程」を遂行する高等学校数学科の授業改善を進めることで、生徒の数学的に考える資質・能力を育成できる授業の構成原理を作成することを目指した。

3. 事業の概要

本研究は主に5つの取り組みを行った。

- 数学的活動についての認識の現状、指導における課題等を把握する。そのために、滋賀県内の高校数学科指導者を対象とした質問紙調査を行う。
- 実証研究協力校の生徒と教師の数学科の授業状況について授業の動画データなどにより把握する。
- 本研究の目的に即した指導計画を作成する。
- 滋賀県内の高等学校の数学科指導者に実証授業の参観を案内し、参観者と意見交流を行う。
- 実証研究の協力校の生徒と教師に事後調査を行い、本研究の成果を表す動画データをとる。院生はデータ分析の補助を行う。

(1) 滋賀県内の高校数学科指導者を対象とした質問紙調査

県内の県立高等学校数学科教師を対象とした質問紙調査において、「設問④数学授業において大切にしていること」を次の4つの選択肢の中で複数回答できるようにアンケートを行っている。その結果、「問題を解けるようにする」という回答が78%であった（根拠をもって公式やきまりなどを活用できる [134] / 生徒が自身の解答などを説明できるようにする [126] / 演習等を通して、問題を解決できるようにする [156] / 自身で問題や予想を見出すことができる [31] / 日常生活や社会の事象を関連付けられるようにする [31] / その他 [5] 回答件数199件）。その他の調査結果も踏まえると、「問題を解く」ことを重視するが、問題を解く過程で必要な「問題の意味を理解する力」や「解法の方針を立てるための力」といった「問題発見・解決の過程」については、被調査者に強く意識されてはいなかったことなどが明らかになった。

(2) 実証研究協力校の数学科授業の状況把握

本研究の実践は、滋賀県内の複数の公立高等学校からの協力の下で実施された。実践にあたっては、事前事後に当該学校やクラスの数学科授業における状況を把握した。そこでは、通常の数学科授業において、生徒たちにどれほど発言させているか、教科書はどのように使用されているかなど、クラス文化についても調査された。

(3) 学習指導案の作成

本研究では、高等学校数学Ⅱ「三次関数の最大値・最小値」の単元構成を従来の構成から変え、生徒た

ちが問題解決するためのポイントを自ら考えて導くような授業の実現を目指した。具体的には、「導関数と微分係数、増減表と極値、三次関数のグラフ、三次関数の最大値・最小値」と順次進められていく問題解決に必要な学習内容ははじめから開始せず、「導関数と微分係数」の学習後に「三次関数の最大値・最小値」で出題される問題「次の関数の最大値・最小値を求めよ $y=x^3-3x$ ($-1\leq x\leq 2$)」を出題して、自力解決がどこまでできるのかを認識させた。この際、接線に着目して増加傾向を考えたり、接線の傾きを表すのが微分係数であることに注目したりと、自ら増減表や極値に関する情報を集めている生徒たちの姿が観られた。このような姿が、本研究における「主体的に学びに向かう力」と確認できた。また、そのような力の育成のために、本研究では、生徒たちに探究させるための単元構成の見直しが、高校数学には重要であることを見出した。

(1) 研究の進捗状況に関する研究組織による議論

本研究は、実践授業後にそのまま授業研究会や研究会議等が開催されてきた。このような自治体（高校・中学校・小学校での教員経験のあるメンバーを含む）スタッフ、多様な高校の数学科教師、そして研究者が一堂に会して研究会を開くという取り組みは、一般に難しいと言われる。本研究を通じて、高等学校数学科における授業研究の方法や組織作りについての具体策を得ることができた。

(2) データの収集と分析

本研究では、授業研究や調査のために、動画や静止画等で「研究データを収集する」という活動を重視した。

4. 今後に向けて

本研究には、3点の特徴・価値が認められた。

1点目は、「生徒なりの数学」つまり「生徒の数学における創造性」に着目されていたことである。特に、「未習の問題に試行錯誤しながら挑む」生徒の姿に焦点を当てたことが、「高等学校数学科における固有な数学的活動」を具体化し、そのような活動を生み出す教材や指導の特徴を鮮明にした。

2点目は、「数学する生徒」つまり「数学するために生徒がどのような活動をするのか」あるいは「生徒に数学させるために私たちは何をさせたいのか」といった生徒たちの「活動性」に着目されていたことである。本研究では、「ループリック」と「マスめがね」によって、「教師側の指導の意図を明確に授業で示す」機会が設定された。これは、「生徒たちの学習に対する規範（～すべき）」を示している。他方で、生徒たちの活動は、「提出箱」に提出されたシートを通してみることであった。さらに研究面では、動画を撮影し、生徒たちの発言と行動をしっかりと記録し、分析をした。これらは学習の記述的研究を実現しており、生徒たちの自由な学びの足跡を捉えられることに通ずる。数学教育研究は、この記述的研究と規範的研究のサイクルで進められるということを踏まえると、本研究は、数学教育学の主要な研究手法を踏んだものであったと思われる。

3点目は、高等学校数学科の「数学する」環境の変化、つまり「数学する環境の多様性」に着目されていたことである。たとえば「定義や定理を先生に教えてもらって、それらを適用して問題を解く」ことは、基本的な高等学校数学の授業スタイルでもあった。近年は、このスタイルだけではないことが強調され、急速に多様な授業スタイルが推奨されはじめた。この状況は、近年、高等学校の学習の場に「混乱」を生んでいるという声も上がっており、デジタルツール、生成AIなどの普及も、この多様化に拍車をかけている。本研究は、このような現状を直視して、高等学校数学科の学びの環境の多様化に対してその対応策を探ったものでもあった。その結果、「生徒たちが自分で悩んで、経験して、問題を見出し、解決する」という学びの「探究」環境を作り上げた。

今後も、近年の高等学校数学科の課題に真摯に向き合い、特に、高校生たちに数学について「考える」機会を適切に与えられる教材開発に取り組みたい。

(渡邊慶子・長井翔也)

1 共同研究事業

12) 継続した運動遊びにつながる園内研修のあり方

1. 事業名および担当者

事業名は、「継続した運動遊びにつながる園内研修のあり方」であり、担当者は以下のとおりである。

学部教員：山田 淳子

草津市立笠縫こども園：管 久美子（園長），鵜 奈緒子（副園長），
中森 百香（3歳児担任），溝渕 吉祥（3歳児担任）
田村 正祥（4歳児担任），槇田 美知世（5歳児担任）

2. 事業の目的

本研究では、草津市立笠縫こども園において年間を通して継続した幼児の運動遊びにつながる園内研究を試み、その成果を幼児の遊びに関わっていく姿から検証することを目的とした。特に本研究では運動遊びに焦点を置き、こども園の教育・保育目標の合言葉「みんな友だち 遊ぶの大好き 笠縫っ子」の達成につながるような実践を学部教員の支援のもと保育者（担任）とで行った。

3. 事業の概要

1) 活動の概要

本研究対象のこども園は、4年前から学部教員が子どもの運動能力の向上を目的として運動遊びの指導している。本年度は、今までの継続した取組を活かして、教員がさらなる運動遊びへの関心と指導スキルを身につけていくことをめざした研修会として位置付けた。年間7回の取組の中で、1，3，6回目については主指導を学部教員が行い、各担任は子どもたちといっしょに活動することを通して運動遊びのやり方等を学んだ。2，5，7回目については各担任が指導を行うことから運動遊びをスタートさせ、時間経過とともに学部教員が子どもたちの遊びの種類を増やしたり、遊びの難易度を高めたりしていくことを意図とした支援を行った。さらに研修後、各担任は各回の研修で学んだことを学級での継続的な活動として取り組み、その成果と課題を子どもの姿から明らかにした。

2) 本年度の活動内容

① 6月24日（月）主指導：学部教員

- （3歳児）全身を使ったリズム運動遊び
- （4歳児）走る、跳ぶ、スキップなどの基本的な動きを取り入れた運動遊び
- （5歳児）簡単な鬼ごっこなどの集団遊び

② 8月27日（火）主指導：（前半）担任（後半）学部教員

- （4歳児）リズムに合わせた運動遊び（図1）
- （5歳児）集団遊び

③ 9月2日（月）主指導：学部教員

- （3歳児）サーキット遊び
- （4歳児）ボール遊び（投げる、蹴る）
- （5歳児）かけっこ、リレー遊び



図1 もっともっとおおきくうごいてみよう

④10月7日（月）指導：こども園教員，学部教員

（4歳児）運動能力調査

（5歳児）運動能力検査

⑤11月25日（月）主指導：（前半）担任（後半）学部教員

（4歳児）サーキット遊び

（5歳児）なわ遊び

⑥1月17日（金）主指導：学部教員

（3歳児）サーキット遊び（図2）

（4歳児）寒い時期のいろいろな運動遊び（図3）

（5歳児）ボール遊び（図4）

⑦2月17日（月）主指導：担任→学部教員

（3歳児）スカーフを使った運動遊び

（4歳児）ルールのある遊び

（5歳児）ボール遊び



図2 すごくおしりがあがっているね！



図3 「ピンク」か「あお」
こんどはどっち？



図4 ボールをつかって
いろいろできるよ！

3) 子どもの姿から成果と課題

（各担任からのコメントより）

（3歳児）

サーキット遊びを通して、体幹が強くなり、できたことを喜び、くりかえし遊ぶ姿や挑戦する姿が見られるようになった。生活発表会では自信をもってサーキット遊びを保護者に披露することができた。外での八角ジム，雲梯および鉄棒が早い時期から触れることができた。

（4歳児）

教えてもらった動きを外遊びでも楽しむ姿が見られた。特に，ボール遊びは楽しかったようで，継続して遊ぶ姿が見られた。身体の使い方や基本的な動き方など，子どもの体の動きに目を向けたり運動に親しんだりすることの大切さが実感できた。

（5歳児）

運動遊びは，「げんきっこひろば」での活動とリンクした内容で「やったことある」「ちょっとできる」からのスタートとなり，その上でのさらに遊び方を知ることができたことが「こんなこともできる」につながった。子どもたちの中で「運動遊びは楽しい」という気持ちが根付き，体を動かすことを嫌がることがなくなった。大学の先生からは，自らの運動指導のやり方にプラスαのコメントをもらったり実際にやり方を見せてもらったりした。そこで学んだことを日々の指導に活かすことができた。

4. 今後に向けて

継続した取組により，こども園の子どもたちや教員の方々と学部教員の信頼関係をつくることができた。また，毎回の運動遊びの日を楽しみにしている姿が感じられた。今年度は特に，教員において継続的な取組の成果が見られた。具体的には，各担任が昨年度に学部教員から学んだ運動遊びのやり方を，自らの担任する学級の発達年齢に合わせた運動遊びにアレンジして指導を行うという実践である。今後は，子どもの活動とともに行う研究会から見られた子どもの成長を語り合い，日々の保育にいかしていけるような研究のあり方を検討していきたい。

（山田 淳子）

1 共同研究事業

13) 幼児を対象とした運動遊びカルタの開発と実践

1. 事業名および担当者

事業名：幼児を対象とした運動遊びカルタの開発と実践

担当者：教育学部（学部教員）・奥田援史，教育学部附属幼稚園（副園長）・大矢明

2. 事業の目的

【研究の目的】

滋賀県の幼児の運動能力は低い水準のままであり，その主な原因は身体活動量の低下にある。そこで，幼児の身体活動量が増えることを目指した運動遊び教材を開発し，実践する。すでに本教育実践総合センター（令和4年度共同研究）の支援をいただき作製した運動遊びカードをベースに，これを改良した新たな「運動遊びカルタ」の開発・実践をする。

【取組内容】

前々年度の運動遊びカードの実践を踏まえて，「運動遊びカルタ」は次の3つの点を考慮して作製する。1) 幼児が主体的に取り組めること。2) 多様な動きを含むこと。3) 1回の遊びで1,000歩程度の身体活動量があること。

これらの点に留意して作製した「運動遊びカルタ」を滋賀大学教育学部附属幼稚園5歳児クラスで実施する。

3. 事業の概要

1) 「運動遊びカルタ」の開発

「運動遊びカルタ」は，幼児期運動指針(2013)に記載のある36の基本的な動きを参考に内容を決めた。また，幼児が楽しみながら自発的に活動できるよう，「忍者になりきって修行をする」設定とした。さらに，カルタを「ノーマルカード」「動物カード」「道具カード」「親子カード」の4つに分け，遊びの場面によって使うカルタを変えられるように工夫した。カルタは読み札と絵札，それぞれ26枚の合計52枚である。



図1 作製した「運動遊びカルタ」の一部

2) 大学生による「運動遊びカルタ」の試験的实施

遊び方ルールを確認するために、大学生 13 名で実施したところ、所要時間は約 20 分であった。万歩計による身体活動量の測定では平均値 525 歩であった。



図2 大学生による「運動遊びカルタ」の試験的实施の様子

3) 幼児を対象とした「運動遊びカルタ」の実践

年長児（5歳児）20名（万歩計測定人数は19名）を対象に、「運動遊びカルタ」を実践した。遊び時間は約30分であり、歩数の平均値は921歩であった。

幼児らは、忍者になりきったり、ときには動物に変身したりしながら思いきり身体を動かし、友だちと一緒に楽しみながら取り組む姿がみられた。実践の中では、取り札を取る人の偏りや、活動に夢中になることによる子ども同士の衝突防止への配慮が必要であることがわかった。



図3 幼児への運動遊びカルタの実践の様子

4. 今後に向けて

今年度は、作製にあたり掲げた3つの目標（主体的に取り組めること、多様な動きを含むこと、1回の遊びで1,000歩程度の身体活動量があること）のもと、「運動遊びカルタ」を作製し、実施した。その結果、概ねこれらの目標を達成できたのではないかと判断する。

今後は、この「運動遊びカルタ」を、他園や家庭でも利用していただき、その効果等についてさらに検討したい。

（奥田援史・大矢 明）

1 共同研究事業

14) 投げる動きを積極的に取り入れた運動遊びの保育実践

1. 事業名および担当者

事業名：幼稚園における運動遊びを促す実践活動

担当者：教育学部（学部教員）・奥田援史，教育学部附属幼稚園（副園長）・大矢明

2. 事業の目的

【研究の目的】

最近、ボールを投げたり捕ったりが上手くできない子どもが増えているため、幼稚園で「ドッジボール」を楽しむことが難しくなっている。そこで、投げる動きを積極的に取り入れた運動遊びの内容を工夫し、実践することを目的とする。

【取組内容】

投げる動きを積極的に取り入れた幼児運動遊びプログラムを作成し、附属幼稚園の4，5歳児クラスの幼児を対象として実践する。

3. 事業の概要

投げる動きの遊びとしては「コマ回し」や「紙飛行機とばし」などがあり、本園でもそのための環境構成をしている。それでも、投げる動きのある遊びはとても少ないのではないかとと思われる。そこで、これら以外にも投げる動きのある運動遊びを積極的に実践した。

①新聞紙ボールを用いて

怪我がないように、新聞紙を丸めた「新聞紙ボール」を作製し、動款的に当てる遊びを実施した（図1，図2）。



図1 新聞紙ボール



図2 新聞紙ボールを的的に当てる遊びの風景

②ターゲットに向かってボールを投げる遊び

園庭に設置されているターゲットボード（図4）の前に、図3のボールを入れたカゴを置いた。すると、幼児が主体的にボールを投げて遊び始めた。さらに、ターゲットを決めて投げたり、距離を長くし

て投げたりなど、いろいろな遊び方がみられた。本園の幼児らは発想力豊かに遊ぶことができることから、より多様な遊び方ができるような環境構成が必要であると思われた。



図3 幼児向けボール



図4 ターゲットに向かってボールを投げる風景

③ドッジボール遊びの始まり

秋頃になって、まだ自分たちでラインは引けないものの、年長児のドッジボールが始まった。片手でボール（幼児用0号サイズ）を投げる姿はあまりみられないが、これから少しずつ上達していくはずである。幼児だけでラインを引き、グループ分けができ、ボールの取り合いなど様々な葛藤体験も経て、主体的に楽しむことができるようになって、卒園を迎えたいものである。



図5 ドッジボール遊びの様子

4. 今後に向けて

年間を通じて、投げる動きのある遊びを積極的に取り入れた保育を実践したが、日頃の幼児の様子を見ていると、まだまだ投げる動作が少ないのではないかとと思われる。今後は、家庭での実践を目指して親子で投げる動きがある遊びについて啓発するとともに、具体的な遊び方を提案していきたいと考える。

（奥田援史・大矢 明）

1 共同研究事業

15) 中学校特別支援学級の生徒の「共に学ぶ交流及び共同学習」の充実 ―生徒が持てる力を発揮するための自立活動を通して―

1. 事業名および担当者

事業名は「中学校特別支援学級の生徒の『共に学ぶ交流及び共同学習』の充実―生徒が持てる力を発揮するための自立活動を通して―」である。滋賀県総合教育センターの研究事業「研究員派遣による学校支援に関する研究（中学校，特別支援教育）」におけるトータルアドバイザーとして関わった。

担当者は、次のとおりである（生徒の個人情報保護の観点から，研究協力校名を伏せて報告する）。

学部教員：窪田知子

滋賀県総合教育センター：加藤由紀（参事），西川昭子（研究指導主事），石田あすか（研究員）他

研究協力校：滋賀県内 X 中学校，Y 中学校

2. 事業の目的

今日，共生社会の実現やインクルーシブ教育の推進に向けて，交流及び共同学習の充実を図ることが求められている。滋賀県教育委員会（2019）の「滋賀のめざす特別支援教育ビジョン（基本ビジョン）」においても，「共に学ぶ」ことは基本理念の達成の柱の1つに位置づけられており，「それぞれの子どもにとって授業内容が分かり，学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら充実した時間を過ごすことができるなど，障害のある子どもが十分な教育を受けられることを前提に，障害のある子どもと障害のない子どもが同じ場で共に学ぶこと」がめざされている。その一方で，「相互のふれあいを通じて豊かな人間性を育むこと（交流）」と，「教科等のねらいを達成すること（共同学習）」といったそれぞれの目的が十分に理解されておらず，特別支援学級に在籍する生徒が通常の学級で何をどう学ぶのか，そのために各教員（交流学級担任，教科担当教員，特別支援学級担任）がどのように連携して働きかけるかといった観点がおざなりになっている実態も指摘されている。そこで本研究では，特別支援学級に在籍する生徒が，持てる力を発揮し，学習活動に参加している実感や達成感を得られるよう，「自立活動」および「交流及び共同学習」のあり方について検討することを目的とする。

3. 事業の概要

（1）研究の進め方

2校の研究協力校において，以下のスケジュールで研究を進めた。週に1回，研究員の石田教諭（特別支援学校籍）が各校を訪問し，「自立活動」と「交流及び共同学習」の参与観察を続けながら，生徒への支援や情報共有のあり方などについて検討し，校内の教職員が参加して研究協議会を行った。

	X 中学校	Y 中学校
生徒の実態把握を踏まえた 自立活動・交流及び共同学習の実践	1 学期	
【第1回派遣研究協議会】 自立活動の充実，連携方法の工夫に向けた協議	R6年8月7日（水） 13：30～15：30	R6年8月26日（月） 10：00～11：50
【第2回派遣研究協議会】 研究成果の検証	R6年11月11日（月） 14：00～16：40	R6年11月27日（水） 13：05～16：30

（２）各校における研究協議

【X 中学校】

第１回研究協議会（８/７）では、まず研究員による１学期の参与観察や個別の指導計画をもとに、対象生徒（２名：自閉症・情緒障害学級在籍）の特徴や課題、目標などについて共有した。その上で、２学期の共同学習（「音楽」「保健体育」「総合的な学習の時間」）の目標と、その目標を達成するための具体的な取り組みについてグループで話し合った。第２回研究協議会（１１/１１）では、その取り組みを振り返り、共同学習の目標を具体的に共有することで、交流学級担任や教科担当教員の役割やはたらきかけが明確になることや、それが生徒自身の学習に参加する姿勢や学びの手応えを支えることを確認した。

【Y 中学校】

第１回研究協議会（８/２６）では、まず研究員による１学期の参与観察や個別の指導計画をもとに、対象生徒（１名：知的障害学級在籍）の特徴や課題、目標などについて共有した。その上で、２学期の交流および共同学習（合唱コンクール）の目標と、その目標を達成するための具体的な取り組みについてグループで話し合った。第２回研究協議会（１１/２７）では、その取り組みを振り返り、共同学習の目標を具体的に共有することで、交流学級において対象生徒が安心して練習に参加できるための配慮（ex.「どこで」「誰と」練習するかを具体的に伝える）がなされたことや、交流学級での活動に参加する上で生徒が苦手さや困難を経験していることに対して、自立活動の中で意識的に指導を行うことができたことなどの成果を確認した。

（３）まとめ

本研究では、特別支援学級に在籍する生徒が交流及び共同学習に参加するにあたって、特別支援学級担任・交流学級担任・教科担当教員が対象生徒の実態や課題について共通理解を図った上で、その目標を具体的に共有することで、それぞれの役割とはたらきかけが明確になり、より充実した交流及び共同学習に寄与することができた。ある教員は、研究の始期には「生徒が交流及び共同学習に参加さえすれば、何か学びがあるだろうと考えていた」が、終期には「この時間にこの生徒は何ができるかというのを考えるようになった」と振り返っている。こうした教員一人ひとりの意識の変容が、インクルーシブ教育の推進を支えていくことにつながると考える。今後は、特別支援学級担任と交流学級担任・教科担当教員らがお互いの忙しさや遠慮を超えて、交流及び共同学習のさらなる充実に向けた持続可能な取り組みをどう展開していくか、各校の実情に応じた仕組みを構築していくことが課題といえる。

４．今後に向けて

交流及び共同学習の意義は、障害の有無を問わず、「経験を深め、社会性を養い、豊かな人間性を育むとともに、お互いを尊重し合う大切さを学ぶ」ことにある。特別支援学級に在籍する生徒にとっては、卒業後の自立や積極的な社会参加につながる基盤となり、通常学級に在籍する生徒たちにとっては、多様性を尊重し、地域の担い手として共に成長していく機会となることが期待される。今後は、通常学級に在籍する生徒たちの学びや成長にも焦点を当てた実践研究を進めていくことも必要と考える。また、本研究では、特別支援学校教諭である研究員が中学校の特別支援学級・交流及び共同学習の実践において重要や役割を果たしたことから、特別支援学校のセンター的機能の一環として、その知見や専門性を地域の特別支援教育にどう活かしていけるかも検討していきたい。

（窪田 知子）

1 共同研究事業

16) ことばの教室における読み書きチェックの活用について

1. 事業名および担当者

事業名は「ことばの教室における読み書きチェックの活用について」である。担当者は、滋賀県 X 市のことばの教室指導教員および窪田（学部教員）である。なお、ことばの教室に通っている子どもの個人情報保護の観点から、本誌では連携先自治体名、担当者氏名を伏せて報告する。

2. 事業の目的

ことばの教室（通級指導教室）は、主に、ことばや学習面、コミュニケーション面にいろいろな課題を持つ幼児・児童および生徒に対して、保健・医療・福祉・就労との連携を図りながら、一人ひとりに合わせた継続的な教育サービスを提供する場である。個別の教育支援計画や個別の指導計画をもとに、子どもが所属する校園と連携しながら、教育的支援や教育相談などを実施している。X 市における対象は、年中児～中学3年生までである。

通級による指導とは、通常の学級に在籍し、ほとんどの授業を通常の学級で受けながら、障害の状態に応じた特別な指導を週1～8単位時間、特別な指導の場で行うものを指す。言語障害や弱視、難聴、肢体不自由、病弱・虚弱のほか、自閉症や学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）の子どもが対象となる。今日、通級による指導を受けている児童生徒は年々増加の一途をたどっている（図1参照）。滋賀県内においても、通級による指導を受けている児童生徒数はこの10年間で約2倍に増加しており、2023（令和5）年度現在で2,212名（小学校90教室、中学校31教室）が利用している。このような中で、通級指導教室では、児童生徒の実態を的確に把握し、適切な指導・支援を行っていくことが求められている（図2参照）。

X市では、ことばの教室で市内の低学年児童を対象に、読み書きのつまずきを把握し、効果的な指導や支援につなぐことを目的に読み書きチェックを行っている。本研究では、その活用の仕方について、子どもの実態の変化やこれまでの結果の分析などをもとに検討する。

通級による指導を受けている児童生徒数の推移【学校種別・国公立立計】

○通級による指導を受けている児童生徒数は全国で198,343人（前年度比+14,464人）
（小学校・中学校・高等学校に在籍する児童生徒数に占める割合は1.6%）

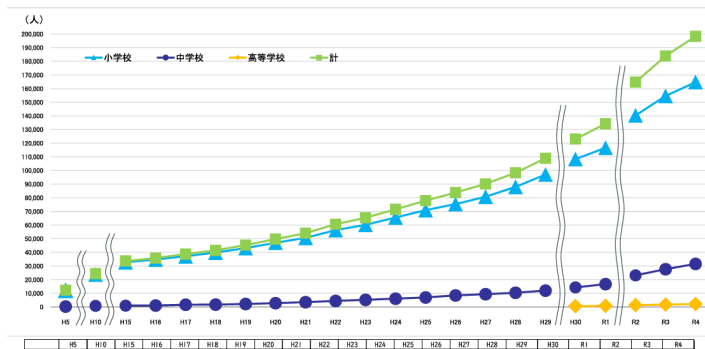


図1 通級による指導を受けている児童生徒数の推移(全国)

【出典】文部科学省（2024）

「令和4年度通級による指導実施状況調査結果」について

年度	小・中児童生徒数			小・中 教室数	高校 生徒数
	小	中	合計		
H26	1,096	111	1,207	57	
H27	1,098	126	1,224	61	
H28	1,135	148	1,283	62	
H29	1,226	172	1,398	70	
H30	1,276	205	1,481	74	5
R1	1,353	282	1,635	86	3
R2	1,465	277	1,742	93	3
R3	1,476	376	1,852	100	4
R4	1,597	451	2,048	111	4
R5	1,703	509	2,212	121	4

図2 通級による指導を受けている児童生徒数の推移（滋賀県）

【出典】滋賀県教育委員会（2023）
「滋賀の特別支援教育（令和5年度）」

3. 事業の概要

(1) 研究の進め方

読み書きチェックの結果の分析に関して、複数名のことばの教室の指導員と共に検討を行った。

① 第1回検討会@X市役所会議室

令和6年8月20日(火)9:00~12:00, 小学2年生を対象とした読み書きチェックの結果について検討した。主に、音韻の識別と表記の一致、特殊音節の書き取り(聴写)の分析結果について、意見交換を行った。たとえば、2年生ではカタカナの書字でつまずきを経験している児童が少なからずいるが、読み書きチェックの実施時期や、ひらがなの書字を丁寧にみていくことで、カタカナでつまずきしている児童に早期に気づけるかどうかなどについて検討した。また、誤答率や要支援率の傾向をどう分析し、その結果を学校現場や子どもたちの指導にいかに関元させていくのかについても検討を行った。その中で、学校ごとの傾向を把握し、具体的な支援方法の提案を行っていくこと、その効果の検証を今後行っていく必要があることなどを確認した。

② 第2回検討会@X市ことばの教室

令和6年12月17日(火)15:30~17:00, 小学1年生を対象とした読み書きチェックの結果について検討した。1年生の読み書きチェックでは、主に音韻と字形について確認している。その中で基準のあり方(ex. 評価の妥当性・信頼性)などについて意見交換を行った。また、就学前の文字との出会いについて、個々の子どもの経験の差が大きい中で、1年生での文字指導の重点をどこに置くのか、文字の読み書きを支える基盤の課題をどうとらえていくのか(ex. 生活経験、粗大運動、姿勢・体幹、手先の巧緻性など)についても検証していく必要があることを確認した。

③ 第3回検討会@X市ことばの教室

令和7年3月19日に、第3回目の検討会を行う。今年度行った1年生および2年生の読み書きチェックについて総括するとともに、今後の活用の方角性について協議する。また、これまでのことばの教室での指導実績などを踏まえて、書字の苦手な子どもたちがどのように成長していくかの見通しや、具体的な支援方法などについても検討する予定である。

4. 今後に向けて

読み書きにつまずきを経験している子どもたちの指導・支援にあたっては、「子どもが一生懸命に書いたものから『誤りを抽出し、誤り方に傾向がないか』をじっくり調べ」ることが重要になる(竹田, 2024)。そうした分析を通じて、「子どもたちがどこでつまずいているか」「つまずきの背景にどのような認知特性がみられるか」を的確に把握することで、適切な指導・支援につなげていくことが可能となる。そのためにも、今後は、読み書きのつまずきのアセスメントの妥当性・信頼性をさらに高めていくと同時に、その結果を、学級・学校・地域の教育全体にどう還元していけるかという視点を持って、さらに有効な活用方法を模索することを課題としたい。

《参考・引用文献》

竹田契一監修・村井敏宏著(2024)『読み書きの「つまずき」アセスメントブック』明治図書

(窪田 知子)

1 共同研究事業

17) 児童一人一人が自分の考えを数学的に表現する力の育成 ー 1人1台端末を用いた学びの蓄積と活用を通してー

1. 事業名および担当者

事業名は児童一人一人が自分の考えを数学的に表現する力の育成ー1人1台端末を用いた学びの蓄積と活用を通してーであり、担当者は次の通りである。

滋賀県総合教育センター：獅子堂 秀雄（所長），加藤 由紀（参事），橋本 健（研究員）

教職大学院：大橋 宏星

2. 事業の目的

「読み解く力」の視点を踏まえた問題発見・解決の過程の四つの段階を基に、それぞれの段階に応じて考えを進める場面や数学的に表現する場面を設定できるよう授業改善を行う。その中で、1人1台端末を用いて、クラス全体で共有した数学的な見方・考え方や数学的な表現などを蓄積し、児童一人一人が自分の考えに応じて必要なものを選択し、活用しながら自分の考えを数学的に表現できるようにする。このように、児童自らが数学的な見方・考え方を働かせ、数学的な表現を用いることで、論理的に考えを進めようとしたり、新たな事柄に気付いたりすることにもつながっていくであろうという仮説のもと、小学校算数科において、1人1台端末を用いた学びの蓄積と活用を通して、「読み解く力」の視点を踏まえた問題発見・解決の過程の四つの段階を基にした授業改善を行うことで、児童が自分の考えを数学的に表現する力の育成を目指す。さらに、児童が論理的に考えを進めようとしたり、新たな事柄に気付いたりする姿につなげていく。

3. 事業の概要

本研究では、小学校2校の研究協力校に各校週1回研究員を派遣し、研究協力員とともに、各校の実態や課題を把握し、小学校算数科において、問題発見・解決の過程の四つの段階をもとにした授業構想を通して、それぞれの段階に応じて考えを進める場面や数学的に表現する場面を設定し、1人1台端末を効果的なタイミングで取り入れ、学びの蓄積と活用の実践を行った。

3-1 数学的な見方・考え方を働かせ、数学的に表現することを大切に授業づくり

算数科は、学習内容の系統性を意識することが大切な教科である。そのため、児童が既習事項を基にして考えたり判断したりすることができるように、指導者は数学的な見方・考え方を系統的に捉えて授業づくりを行う必要がある。そこで、本研究の過程で学習指導要領解説等を用いて数学的な見方・考え方の系統性を指導者と共に整理し、図、数、式、表、グラフなどの数学的表現を児童が活用できるように授業づくりを行った。

各時間の授業づくりにおいては、令和5年度研究の成果物である「単元構想シートⅡ」と「授業構想シート」を基に、「単元構想シートⅢ」と「授業構想シートⅡ」（図1）を作成した。各時間の授業において「目指す児童の姿」や「働かせたい見方・考え方」に加え、「数学的に表現する姿」を記入する欄を設け、数学的な見方・考え方を働

図1 「授業構想シートⅡ」

かせて数学的に表現している児童の姿を具体的にイメージできるようにした。

3-2 1人1台端末を活用した学びの蓄積と活用

本研究では、児童が多様な考えの中からこれからも使いたい数学的な見方・考え方や数学的な表現などを蓄積したり、新たな学習問題に取り組む際に活用したりするために、1人1台端末を積極的に活用した。そして、1人1台端末に蓄積していったものを学びの道具箱「マイ・スタディ・ボックス」（以下、「マイ・スタ」という。）と呼び、個に応じた指導の充実を図る手立てとした。また、「マイ・スタ」の中には、クラス全体で共有した学びを蓄積していく「クラス・ログ」と、児童一人一人が解決過程を整理した自分の学びを蓄積していく「マイ・ログ」を作った。児童がこの「マイ・スタ」に蓄積した学びを振り返り、繰り返し活用することで、数学的に表現する力の育成を図った。

3-3 研究協力校の児童と指導者の変容

研究の始期と終期に行った児童質問紙調査から、「マイ・スタ」を活用して、数学的な見方・考え方や数学的な表現などを蓄積したり活用したりしたことで、主体的に問題解決に取り組んだり、自分の考えを数学的に表現したりすることができ、筋道を立てながら論理的に考えを進めようとする姿が伺えた。また、指導者が問題発見・解決の過程の四つの段階を基に授業構想を行い、「マイ・スタ」に蓄積された学びを児童が効果的に活用する場面を設定することで、児童が新たな事柄に気付く姿にもつながった。さらに、「児童が『マイ・スタ』に蓄積された、学びを活用して、自分の考えを表現するだけではなく、他に表現する方法はないかと、『マイ・スタ』をもう一度見返したり友達と考え方を確かめ合ったりする姿が多くなった」という指導者の声も聞くことができた。

4. 研究の成果

学びの共有・選択・深化の過程に応じて学びの道具箱「マイ・スタ」を用いることで、既習事項を「クラス・ログ」で確認するだけではなく、児童一人一人が解決過程を振り返り、自分の学びを「マイ・ログ」に蓄積したり、自分の考え方に応じて活用したりすることができ、自分の考えを数学的に表現する力の育成につながった。また、「授業構想シートⅡ」を用いて問題発見・解決の過程の四つの段階を基にした授業づくりを行うことで、児童が考えを表現する際に用いたい数学的な見方・考え方や「マイ・スタ」を活用するタイミング等を指導者が意識することができた。さらに、児童の問いや気付きを指導者が意図的に引き出し、それらを基に学びを深める授業改善を行うことができた。

5. 今後に向けて（課題）

個に応じた学びを充実させていくとともに、学級全体での協働的な学びにおいても、さらに工夫・改善することで、より確かな学びにつながる。そのため、個の学びと協働的な学びにおける内容や時間などのバランスを取りながら授業づくりを行っていく必要がある。

「クラス・ログ」には、数学的な見方・考え方や数学的な表現などを中心に整理して蓄積してきたが、「マイ・スタ」を充実させるためには、児童の発達段階や経験などに応じた知識・技能などを蓄積することも必要であることがうかがえた。児童が主体的に学びを進め、考えを表現していくためには、指導者が児童の実態を把握したうえで、「マイ・スタ」に蓄積する内容を整理していく手立てを検討することが望まれる。

（大橋 宏星）

参考：滋賀県総合教育センター令和6年度研究員派遣による学校支援に関する研究 研究論文

1 共同研究事業

18) 確かな学力を身に付け、自ら考え学び合う児童の育成を目指して

—「読み解く力」の視点を踏まえた確かな学力を身に付ける算数科の授業づくり—

1. 事業名および担当者

事業名は「確かな学力を身に付け、自ら考え学び合う児童の育成を目指して—「読み解く力」の視点を踏まえた確かな学力を身に付ける算数科の授業づくり—」であり、担当者は次の通りである。

東近江市立能登川北小学校：木村 直人（校長）

教職大学院：大橋 宏星

2. 事業の目的

- ① めあてを発見するための4つの方法（ズレ、対立、障壁、疑問）から、子どもたちとともにめあてを設定し、学習意欲を高める
- ② 振り返りの場面で自分の学びを確認したり、自己の変容に気付いたりしたことを整理し、文章を書く活動を充実させる

上記2つのことにこだわって授業展開し続けることで、子どもたちの学びに向かう力を高め、思考力や表現力を育成することをめざし、授業実践・省察を行う。また、子どもたちの学ぶ力を向上させるとともに、指導案検討や事後研究会での学びを教員自身が自分事として捉え、教員一人一人の指導力向上に努める。

3. 事業の概要

年間を通して、全クラスで研究授業を行い、働かせたい見方・考え方を明確にして、単元計画を立てるとともに、問題解決の際にどのように数学的な見方・考え方を働かせるかを子どもの学びの姿から検証する。算数・数学の問題発見解決のプロセスと、滋賀県の読み解く力の育成を関連付けながら、大学担当者は、事前の指導案検討および事後研究会の指導助言にあたる。

5月23日(木) 5年指導案検討	9月18日(水) 研究授業② 3年 かけ算の筆算
6月12日(水) 研究授業① 5年 体積	10月9日(水) 研究授業③ 6年 場合の数
8月21日(水) 1年・4年 指導案検討	10月30日(水) 研究授業④ 1年 ひきざん
8月26日(月) 3年・6年 指導案検討	11月27日(水) 研究授業⑤ 4年 面積

研究授業① 第5学年 体積

「複合図形の体積を、直方体に分割したり、欠損部分をひいたりする考え方で求めることができる」ことをねらいに授業を行った。本学級の児童は、どうしたらそうなるのかの過程や仕組みを理解するより、答えにこだわることが多い。そのため単元を通して、正しい答えを出すことよりも、どのようにして体積を求めようとしているのかという過程に焦点を当てて授業を進めた。グループに分かれてそれぞれの考え方を仲間分けしたり、全体交流で式から友だちの考えを予想したりすることで、どうしてそのように分けたり、補ったりしたのか、数学的な見方・考え方を顕在化させるように取り組んだ。

本時では、直方体で作ったロボットの腕の部分（L字型）の体積を求めようと課題を提示し、子ども

の解きたいという意欲の向上と、求積公式で求められないという既習知識とのズレから、本時の課題を設定した。解決の見通しを持つ段階で、既習の見方・考え方を振り返ったことから、自力解決時には「全体から引く」「切って移動する」「分ける」考え方が出された。数学的な見方・考え方を大切にして授業を進めていたことから、子どもたちの交流場面でも、答えを確認するだけではなく、考え方を交流する姿が多くみられた。さらに、本時の解決に使った考え方を振り返る段階では、「面積の学習で使った考え方に似ている」と、汎用的な考え方に気付く姿も見られた。

事後研究会では、指導者が「どうして分けたの?」「分けたらどうやりやすいの?」など、切り返し発問をすることで、それぞれの考えの共通点に気付かせることができ、深い学びにつながったという意見が出た。子どもが数学的な見方・考え方を意識するための教師の有効な手立てとして、共通理解を図ることができた。

研究授業③ 第6学年 場合の数

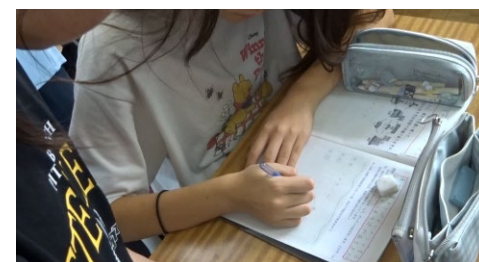
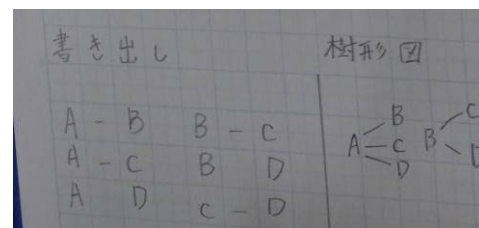
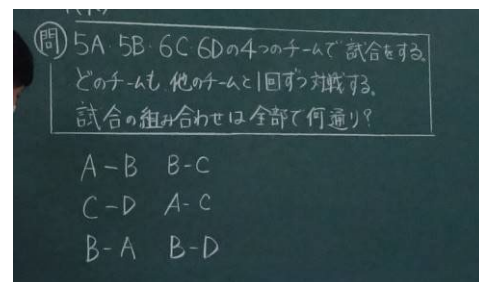
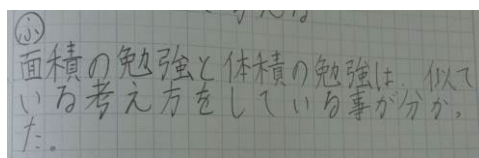
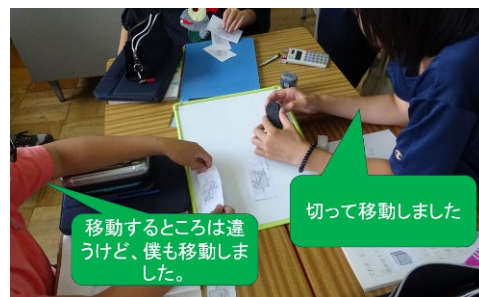
「いくつかのものの中から順番に関係なく2つを選んだときの組み合わせ方の総数を求めることができる」ことをねらいに授業を行った。前時までは並べ方や順番が全部で何通りあるかを、図や表などを用いて落ちや重なりなく求める学習をしてきた。本時は、順番に関係なく2つを選んだ時の選び方は全部で何通りあるかを調べる学習である。

授業は、適当に組み合わせを列挙して調べることから始め、わざと落ちや重なりを生じさせることで、前時までのように図で表したり、一つを決めて順番に考えたりする必要性を実感させてから自力解決に入った。子どもたちは、前時までの考え方を生かして、順番に書き出す方法や、樹形図を使って考える方法、さらに計算で表そうとする姿も見られた。交流場面では、並べ方の考え方と、組み合わせの考え方の違いを丁寧に教え合う姿が見られた。

4. 今後に向けて

能登川北小学校の校内研究会に関わらせていただいて4年になる。ズレなどを用いて、問題を焦点化させ、子どもの主体的な学びを引き出したり、数学的な見方・考え方を大切にしつつながら深い学びにつながる授業改善が進んできている。数学的な見方・考え方を大切にした授業の積み上げがされてきていることから、子どもたちの振り返りの記述内容が、解決過程を振り返ってどのような考え方が大切だったのか、前時や既習の単元の考え方と比べるなど記述の質の高まりも見られる。今後は、さらに子どもたち自身が数学的な見方・考え方を意識して、子ども主体で問題発見・解決もプロセスを回すことができるようにすることを目標としたい。

(大橋 宏星)



1 共同研究事業

19) 自分の考えに自信をもち、共に学び合う姿を引き出す授業づくり

－自力解決と集団解決を連動させて深めた学びを児童自身が実感できる算数科の指導を通して－

1. 事業名および担当者

事業名は「自分の考えに自信をもち、共に学び合う姿を引き出す授業づくり－自力解決と集団解決を連動させて深めた学びを児童自身が実感できる算数科の指導を通して－」であり、担当者は次の通りである。

栗東市立治田西小学校：杉田 信一（校長）

教職大学院：大橋 宏星

2. 事業の目的

個別最適な学び・協働的な学びを軸に、児童の課題を把握し、それに応じた支援に取り組み、児童同士をつなぎ、交流の視点を明確にした授業づくりに取り組むことで、児童がわかる・できる楽しさを実感し、学びを高めることをめざし、授業実践・省察を行う。また、指導案検討や事後研究会での学びを教員自身が自分事として捉え、教員一人一人の指導力向上に努める。

3. 事業の概要

算数科で年間6回の研究授業を行い、授業の在り方を子どもたちの学びの様子から検討する。主な視点として、

- ① どの子ども学習に向かおうとする学習活動・学習課題の工夫
- ② 児童同士をつなぎ、交流の視点を明確にした場づくり
- ③ 基礎学力をつける取組

をもとにした研究協議を行い検証し、大学担当者は指導助言を行う。併せて、事前の指導案検討についても、大学担当者は指導助言にあたる。

年間の校内研究会のスケジュールは下記の通りである。

6月26日(水) 研究授業① 特別支援 6年指導案検討	9月11日(水) 研究授業③ 5年 整数の性質
	10月23日(水) 研究授業④ 2年 三角形と四角形
7月10日(水) 研究授業② 6年 角柱と円柱の体積	11月20日(水) 研究授業⑤ 3年 分数
7月24日(水) 校内研修(授業づくり) 指導案検討(2～5年)	12月11日(水) 研究授業⑥ 4年 面積

年間6回の研究授業のうち、研究授業⑤の実際について紹介する。

研究授業⑤ 第3学年 分数

「分数の加法の意味や計算の仕方について、単位分数のいくつ分とみて考え、自分自身の考えを、式や数、文や言葉、図で表現することができる」ことをねらいに授業を行った。「どの子ども学習に向かおうとする学習活動・学習課題の工夫」として、児童の「ズレ」を生かした課題の提示と、児童どうしをつなぐ工夫を行い、「交流の視点を明確にした場づくり」として、児童の考えや発言を、「単位分数のいくつ分で考える」という「数学的な見方・考え方」でつなぐ展開とまとめの工夫を行った。

本時の導入は、問題文を確認した後「分数ってどんな数？」という問いから授業が始まった。分数の

見方・考え方を確認し、1をいくつ分に分けた大きさであることを確認した後、小数の加法の計算の仕方を振り返った。もとにする数

「0.1」のいくつ分で考えた既習の考え方を基に、本時の課題である $3/5 + 1/5$ の計算方法を考えた。教師が $3/5 + 1/5 = 4/10$ という誤答を提示したところ、子どもから「違う！」「分子だけ足して分母は足さない」「答えは $4/5$ です」と意見が出た。そこで、「どうして分子だけ足すの？」という教師の問いかけから、本時の学習のめあて「分数のたし算は、なぜ分子だけ足すのか考えよう」が設定された。

解決の見通しを持った後の自力解決時の子どもたちの様子は、図や言葉を用いて、分母を足さない理由を熱心に考え、友達に積極的に説明する姿が見られた。子どもたちの中には $4/10$ が答えだと思っていた子や、分子だけを足す理由を図や言葉ですぐに答えられない子がいたため、教師があえて誤答を示したことで、そのズレを説明したいという気持ちを引き起こさせるものとなった。また、既習の見方・考え方を振り返ったことで、本時働かせる見方・考え方とつながり、解決の見通しが持ちやすかったことから、子どもの主体的な学びの姿につながったと考えられる。

全体交流では、液量図、数直線図、言葉で考えた3通りが交流された。まとめの時間においては、教師の「それぞれの考えで似ているところはどこ？」という発問において、子どもからは期待する反応が少なかったことから、教師が図と言葉を関連付けて考える説明を行った。その後、どの考えももとにする分数のいくつ分で考えているという言葉が出てきたが、全体交流時にそれぞれの考え方について押さえておく必要性も見えた。

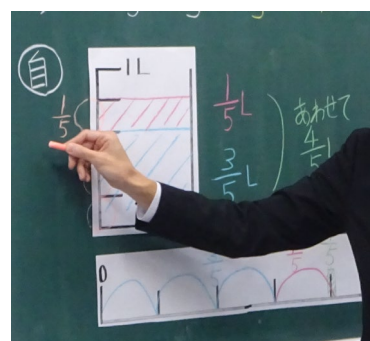
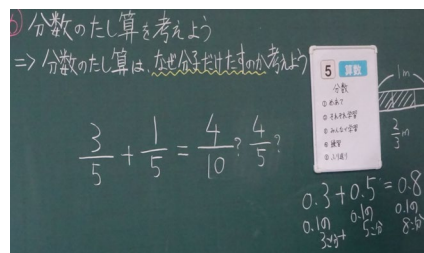
(考察)

児童のズレを生かした課題設定については、本時は教師の誤答提示によってズレを生じさせたが、子どもたちは、図や言葉を用いて熱心に友達に説明する姿が見られたことから、説明する必要性を感じさせる手立てや、解決したいと意欲的に取り組むこととして有効だと感じた。また、年間を通して数学的な見方・考え方を大切にして授業を行ってきたことから、子どもたちが答えを導き出して終わりではなく、どうしてそう考えたのか、既習の見方・考え方と似ているところはどこかと、解決過程を振り返る姿が見られたことは大きな成果である。

4. 今後に向けて

個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実することを軸に授業改善を行う上で、算数科においては、数学的な見方・考え方を働かせ、問題発見・解決の過程のサイクルを回すことが重要であることを年間を通して、治田西小学校の先生方と確認してきた。先生方も子どもたちも、問題解決の際に数学的な見方・考え方を働かせる意識が高まり、子どもたちの交流の内容や振り返りの記述内容の質の向上が見られたことは大きな成果である。今後は、さらに子どもたち自身が数学的な見方・考え方を意識して、子ども主体で問題発見・解決のプロセスを回すことができるようにすることを目標としたい。そのために、学校全体の積み上げを意識して、今後も全職員で共通実践を積まれることに期待している。

(大橋 宏星)



1 共同研究事業

20) 特別支援学校教育相談担当者研修の実施 ーアセスメント力の育成に焦点をあててー

1. 事業名および担当者

事業名は「特別支援学校教育相談担当者研修の実施ーアセスメント力の育成に焦点をあててー」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：山川直孝

滋賀県立北大津養護学校教諭：中村佳代

2. 事業の目的

特別支援学校の教育相談担当者は、自校の児童生徒への支援と関わって保護者や担任等への相談、支援にあたるほか、センター的機能の役割を果たすべく、小・中学校等に在籍する児童生徒、保護者、教員等への相談支援も行っている。適切な助言を行うため、主訴をふまえ実態把握を行うことが必要であり、児童生徒を細かく観察したり、心理アセスメントの実施や結果を分析したりすることが求められる。そこで本研究では、特別支援学校教育相談担当者の資質向上を目的に、最新の心理アセスメントを取り入れた研修プログラムを開発し、そのプログラムの効果を実証するための研修を行う。研修は心理アセスメントの概要についての講義のほか、事例検討を取り入れた演習を行う。心理アセスメントに関する深い知識と理解、さらには具体的な活用について一体的に学びアセスメント力の育成をめざしたい。

3. 事業の概要

本研究では、実践校として滋賀県立北大津養護学校を指定した。教育相談担当教員は、小学校等からの特別支援教育に関する巡回相談、市教育支援委員会の委員として就学に関する相談等を行っている。実践校では中村が本研究の窓口となった。8月に以下の研修プログラムを実施した（表）。

表 研修プログラム

時間・研修項目	内容
45分：心理アセスメントの概要	・なぜ心理アセスメントを行うのか ・冰山モデルとは ・支援で活用できる心理アセスメント
60分：WISC-Vの概要	・対象年齢 ・全検査IQ、主要指標、補助指標 ・合成得点、分類記述、パーセンタイル順位、信頼区間 ・個人間差と個人内差 ・解釈の方法 ・換算アシスタント
60分：事例検討（ペアワーク）	・中学校特別支援学級の生徒の事例を取り上げ、生徒の行動観察やWISC-Vの結果などから今後の支援方針、支援方法の検討を行う。
15分：質疑、ふりかえり	・質疑応答、ふりかえり ・事後アンケートの記入

担当者と打合せを重ね、参加者のニーズに即したものとなるように研修プログラムの検討を進めた。8月下旬に3時間の実証研修を実施した。研修には教育相談を担当する10名の教員が参加した。研修内容は大きく3つの柱から成り立っており、「心理アセスメントの概要」「WISC-Vの概要」「事例検討」

で構成した。研修では、意見交流の時間を設定し、参加者は自分の考えをタブレット端末より回答する場面を設定した。参加者がリアルタイムでメッセージを送受信できる機能を活用し、一人ひとりの教員の考えを全体に反映できるようにし、参加者が主体的に研修に参加したり、多様な意見にふれられたりするように工夫した。

「心理アセスメントの概要」では、「なぜ心理アセスメントを行うのか」「冰山モデルとは」「支援で活用できる心理アセスメント」の説明を行った。冰山モデルとは、問題解決のためには水面上に見える問題行動に加えて、水面下に隠された背景を掴んで支援を検討する必要がある。水面下の（見えない）要因を探る考える際に心理アセスメントが有効であることを説明した。実態把握の方法として、観察法、面接法、検査法等の直接的な方法が考えられる。それぞれの方法の特徴を十分に踏まえる必要があることをふまえた上で、「支援で活用できる心理アセスメント」としては、チェックリスト式（KIDS 乳幼児発達スケール、S-M 社会生活能力検査等）と個別式（WISC-V 知能検査、新版 K 式発達検査 2020 等）があることを説明した。

「WISC-V の概要」では、検査の対象やこの心理アセスメントから何がわかるのか（全検査 IQ や主要指標、補助指標の意味等）、解釈の方法などについて説明した。参加者の中には、実際に WISC-IV を実施している教員もいたため、WISC-IV と V の違いにもふれながら説明した。換算アシスタントとは、受検者の生年月日や検査の粗点等を入力すれば、検査結果がレポート形式で出力されるコンピューターソフトである。今後、WISC-V を実践校でも実施していくことが想定されるため、その機能等を紹介した。

事例検討では、この研修で学んだことを参考にさせていただきながらペアで、生徒の行動観察や WISC-V の結果などから今後の支援方針、支援方法の検討を行った。各ペアで出された支援方針などをシートに書き込んでもらい、その内容を全体で交流した。

研修実施後に、研修の有用性、主体的な参加、研修内容の理解等について、4 件法と自由記述により事後アンケートを実施したところ、参加者はすべての項目で肯定的な回答をした。自由記述では「ポイントを絞って、わかりやすく伝えていただいた」「具体的な検査内容だけでなく、その後の支援内容の検討まで体験できることで、WISC の良さを感じられるとともに、より学びたいと感じられた」などと回答した。このことから、参加者の研修への満足度は高く、教育相談担当者のニーズに即したものであったことがうかがえた。

4. 今後に向けて

研修に取り組む様子や事後アンケートの結果から、心理アセスメントについて理解を深めたり、事例検討を通じて検査結果の解釈や支援方針を検討したりと、特別支援学校の教育相談担当者の資質向上につながる実践的な内容であったと考える。今回の研修は専門家である大学教員が中心となって進めた。参加者からは「地域の小中学校から、本校への検査依頼は増加傾向で、その依頼や相談に応えられるような力量形成を個人だけでなく、組織としてつけていかなければならないと思っている」とのコメントも寄せられた。今回の研修の続きとし、分掌部会等を活用して事例検討や情報交換を行う時間を設定することは、効果的な支援に結び付けることはもちろん、個々の教員の専門性の向上や後進の育成にもつながるのではないだろうか。自校の人材資源を活用して学校が自律的に研修を実施できる発展的なプログラムの検討が必要になると考える。

（中村佳代，山川直孝）

1 共同研究事業

21) 中学校における特別支援教育研修の実施

1. 事業名および担当者

事業名は「中学校における特別支援教育研修の実施」であり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：山川直孝

長浜市立西中学校：澤田智子教諭

2. 事業の目的

特別支援学級に在籍している生徒や通常の学級における特別な支援を必要とする生徒が増えており、学校全体で共通理解の上、組織的に支援を進めていくことが求められている。本研究では、中学校の教員を対象に、昨今の特別支援教育に関する動向や、発達障害や精神疾患等への支援に関する内容が充実した生徒指導提要等にもふれながら、特別支援学級や通常の学級の中での支援について、教員の理解を促すことや支援の改善につなげることを、さらには組織的に取り組むことの意義の確認を目的とした。研修はペア・グループワークを取り入れるとともに、タブレット端末を活用して参加者同士が瞬時に多様な意見を知ることができるように工夫した。これは、講師による一方的な講義形式だけの説明ではなく、教員同士が多様な意見にふれることで、障害のある生徒への理解や、個に応じた支援の具体的な進め方等について、教員一人ひとりに気づきを促していきたいためである。さらには、自身の実践を省察することや教員同士が連携することの意義を再認識することで、教員が自ら主体的かつ組織的に生徒への支援の見直しを進めたり、授業改善の推進につなげたりしていければと考える。

3. 事業の概要

本研究では、実践校として長浜市立西中学校を指定した。実践校には、今年度469名の生徒が学んでいる。実践校では特別支援教育コーディネーターの澤田教諭が本研究の窓口となった。8月に以下の研修プログラムを実施した（表）。参加教員は32名だった。

表 研修プログラム

時間・研修項目	内容
40分：特別支援教育の現状、生徒の実態	・効果的な支援とは（ペア・グループワーク） ・自己効力感の育成について（心理検査の体験と結果の分析：ペア・グループワーク） ・自己肯定感が低くなる要因 ・特別支援学級在籍者数、通常の学級における特別な支援を必要とする児童生徒数の状況
40分：中学校での支援のあり方	・現在、どのような支援を行っているか（ペア・グループワーク） ・予防的支援の重要性 ・引き継ぎ、関係機関との連携 ・担任だけで抱え込まず、組織的な取り組みの必要性（受容的・支持的・相互扶助的な同僚性） ・情報の共有は必須で、有効な支援についても共有すること ・多様な生徒の実態に対応できるよう、授業改善や生徒指導の指導方法や指導体制の工夫改善を進めること ・重層的支援構造（生徒指導提要）
10分：質疑、ふりかえり	・質疑応答、ふりかえり ・事後アンケートの記入

研修前半の特別支援教育の現状、生徒の実態では、まず参加者「効果的な支援とは何か」を話し合った。この意図としては、支援について参加者がどのようなイメージをもっているかを確認するとともに、特別支援教育での支援のあり方について具体的に考えてもらうためである。支援は支え助けることという意味があるが、特別支援教育においては、対象となる生徒一人ひとりの教育的ニーズを把握し、そのもてる力を確認して伸ばし、学習や生活で抱える困難さを軽減し改善するための適切な指導や支援を行う教育である。つまりは、教員には、生徒の主体性や可能性を広げるための姿勢が支援で求められる。自己効力感の育成と関わっては、自己効力感の一般的認知傾向を測定する心理検査を体験し、教員自身が自分の自己効力感を測定し分析するとともに、自己効力感と自己肯定感との関連、自己効力感が低い生徒にはどのように支援するかを考えてもらった。その上で、自己肯定感が低い理由として特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小中学部）をもとに「成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていない」や「課題に取り組んでもできなかった経験などから、自己に肯定的な感情をもつことができない」など、生徒の背景を理解した上での支援を心がける必要性を確認した。研修の後半では、これまで各教員がどのような支援に取り組んできたかを振り返るとともに、生徒指導提要の「発達支持的生徒指導」にもふれながら、日頃からすべての生徒を対象とした支援である予防的な支援の重要性を確認した。そのためにも、担任だけで抱え込まず、組織的な取り組みの必要性（受容的・支持的・相互扶助的な同僚性）があり、情報の共有は必須であることを説明した。情報共有では中学校では学年会が設定されており、そうした場を活用することや放課後の隙間時間、校務支援システムのメッセージ機能も活かしたいところである。多様な生徒の実態に対応できるよう、すべての生徒を対象とした授業改善や生徒指導の指導方法や指導体制の工夫改善を進めることが、障害のある生徒の支援にもつながることを確認した。研修では、参加教員の意見を取りまとめる際にコメントスクリーンを活用した。コメントスクリーンは iPad を使ってチャットのように複数人がリアルタイムでメッセージを送受信できるものである。このソフトを活用して一人ひとりの教員の意見を全体に反映できるようにし、参加教員が多様な意見にふれられるようにした。

研修実施後に、参加教員にアンケート（４件法および自由記述）を実施したところ、25名より回答を得た（回答率78%）。「研修で学んだことは役に立ちそうだ」「研修の内容はよかった」「研修に主体的に参加できた」「支援をどのように改善すればよいかわかった」について、全員が肯定的な回答をし、研修の満足度の高さや内容が実践的であったことがうかがえた。また「研修では自分の考えを出すことができた」「研修で ICT 機器を活用することにより、他者の意見を知ることができた」についても全員が肯定的な回答をしており、ペア・グループワークや ICT の活用により主体的に参加し対話的な学びにつながったと考えられる。自由記述では「自分の支援指導がどうだったか振り返ることができた」「普段接している生徒の姿をイメージしながら受講できた」「全ての児童生徒を対象にした指導を行うことが必要であり、また、それが個に応じた効果的な支援につながると感じた。また、児童生徒の変化に教師が気付くことが、組織的に取り組むことに繋がると感じた」など肯定的な回答であった。

4. 今後に向けて

本事業では、中学校における特別支援教育についての教員研修を通じて、教員同士の対話やICTの活用を取り入れながら、教員自らがこれまでの実践を振り返り、主体的かつ組織的に支援の改善を進めることをめざした。研修の事後アンケートからも肯定的な評価が得られており、授業や支援の改善に向けた成果が得られたと考える。実際に役立ったかどうかは、今後の学校の取り組みはもちろん、その結果が生徒の変容に結び付いたかが重要である。生徒の変容について評価改善を重ねることが必要である。

(山川直孝)

1 共同研究事業

22) 中学校音楽科における箏の授業開発プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名：中学校音楽科における箏の授業開発プロジェクト

担当者：林 睦（学部教員）

連携先担当者：高月道代（附属中学校教諭）

研究協力者：麻植美弥子、麻植理恵子（箏演奏家）

参加学生：学部生 9 名

2. 事業の目的

事業の目的は、附属中学校と音楽科における箏の授業開発プロジェクトを実施し、その成果を今後の中学校の音楽の授業に活かすことである。

3. 事業の概要

令和 6 年 10 月 30 日と 11 月 1 日の 2 日間にわたって、附属中学校の 1 年生に 2 時間ずつの箏の授業（箏の基本奏法、「さくらさくら」の鑑賞と演奏）を実施し、音楽教育専修専攻の学生 9 名がサポートに入った。指導は附属中学校の高月道代教諭と箏演奏家の麻植美弥子氏、麻植理恵子氏の協力を得て実施された。この学びが、11 月 15 日の附属中学校の研究協議会の研究授業「構成を工夫して、読書タイムのチャイムをつくろう」にもつながるように設定された。

・授業の概要と振り返り

ねらい：ゲストティーチャーを活用し、演奏を鑑賞することにより、箏の「音色」や「奏法」、「奏法の違いによる音色の変化を聞き取る」ことと、実技指導により、創作で「自分のイメージした音を表現できる技能を身につけること」をめあてとして授業を設定した。

鑑賞：生徒は、鑑賞するだけでなく、講師の先生方との対話の中で、「どんなイメージの曲か」「どのように演奏しているか」について対話した。箏は「爪をはめて演奏する」という知識を持っていた生徒が、演奏を見て聴き、「爪をはめていない手を使うことで、曲が工夫されていることに気づいた。指の腹の部分を使って優しくはじくとやわらかい音がだせるけど、指の先ではじくとひょうがはじけたような音になることを発見した。」と授業を振り返っている。鑑賞の中で特に印象に残ったのは、「余韻」だったようで、講師の先生方の演奏の終わりに「余韻」に浸り終わっていく、終わった時の緊張感が解ける感覚を体験することで、自分たちが演奏するときにも、余韻を聞くだけでなく、「楽しむ」という感覚も持てた生徒が多かった。また、「先生の楽譜を見たら、漢数字だけでなく、記号のようなものもたくさんあった。」「箏は、片手で弾くものと思っていたが、両手で激しく弾いたり、ゆっくり弾いたりしていた。」「同じ箏でも雰囲気に合わせて演奏



方法を変えていた。」「爪と指両方で弾いて同じ音でも違う雰囲気を出したり広い音域の中で演奏したり、奏法をいくつか用いて弾いた。」「二人が合わせるときに「せーの」ではなく、息で合わせていた。」「左手は補助の役割だと思っていたが止まっているときはなかった。」「力強い音、少し優しい音など、指の力の入れ方によって変わると思った。」「同じ箏でも、竜角に近い音は強い感じの音で、少し離れるとやわらかい感じの音になるのを使い分けていた。」など、奏法の違いによる音色の変化をたくさん聴き取っていることがわかった。奏法を多用したデモ演奏を聴くことで、創作で自分の作品にその奏法を入れることができた。

実技指導：鑑賞した後、生徒たちに、自由に箏を触って音を出す時間を作った。そこで生徒たちは、講師の先生方の演奏を鑑賞した中で、印象的だった奏法をまねてやってみていた。特に、チリチリ（生徒は「チリチリ」と記憶していたが、実際は「ツルツル」、すなわち「すくい爪」のこと）は見たのと実際に演奏するのでは違うので、近くにいる講師の先生に「どうやって弾くの？」と聞いていた。続けて、「さくらリレー」を演奏し、基本的な奏法を身につけた。かき手、散らし爪、ゆり色、グリッサンド、ピッチカートの4つの奏法を、講師の先生と参加した学生に見てもらい習得した。最後に、自分たちも、1面の箏を二人で演奏し、1音でもよいので二人で演奏することにも挑戦した。「『さくらさくら』を完璧に弾いたことで、音と音との相性がわかりやすくなり、付け足しやすくなった。三味線のようにパァァンのような音が出ることが分かった」と、レポートしている。

創作の授業：実際に、自分たちのチャイムを作る時に、講師の先生の演奏を聴いて感じたことや、演奏の仕方を取り入れていることから、鑑賞映像からだけでは得られないものがあることがわかった。4つの奏法を習得したことで、創作時や振り返りの記述の中で「押し手」「ピッチカート」という用語を使用し対話的に創作を進めていた。ただ単に弾くだけでなく「五感を使って楽しんでいるよう」自分も音を楽しみたい。使用する奏法の種類を増やして演奏することで、同じ音を弾いていても違いが出る。全身を使いながら演奏する。力強くはじく。弦を押して音を波のようにゆったりとさせていた。自分たちの作品は「落ち着いた感じ」なので指の腹を使って優しく演奏したいとレポートしていた。和楽器の音色との出会わせ方については、演奏会形式で聞き取るだけでなく、実技指導も合わせてしていただいたことで、生徒たちは箏を身近に感じ、音色に浸ることができた。技能習得は、学部の学生がサポートに入ってくれたことで、生徒は自分の奏法を確認しながら曲を弾くことができた。ゲストティーチャーの活用は有効であると言えるが、実技指導に特化したものにならないよう、授業のめあてを明確にして、講師の先生との打ち合わせが重要だと考える。



4. 今後に向けて

今回、附属中学校の箏の授業に箏演奏家2名と学生のサポートが入ったことで、生徒たちは、講師らの生演奏からたくさんの繊細な音や余韻を感じ取っていることがわかった。また、いろいろな奏法で演奏することで、技術はもちろんのこと、音色にも浸ることができた。学生にとっても、箏演奏家の生演奏に触れることができ、生徒との交流もよい経験になった。創作にもつなげるという意欲的な試みであったが、今後も和楽器を使った新たな授業の開発に取り組んでいきたい。

（林 睦 高月道代）

1 共同研究事業

23) OJT 研修による人材育成 ～心をたがやすボトムアップ～

1. 事業名および担当者

【事業名】OJT 研修による人材育成 ～心をたがやすボトムアップ～

【担当者】教職大学院：田中 満

大津市立打出中学校：校長 福井 善行，教諭 白井 貴晃

2. 事業の目的

本校では経験年数が 10 年以下の教員が 25 名を超え、その割合は全体の半数近くになっており、若手教員の教師力向上が喫緊の課題となっている。日常業務の中での人材育成だけでは限界があり、意図的・計画的な OJT 研修を行うことが必要である。

本校では本年度も「よりよい集団をつくる」というテーマを設定し、若手教員が組織の中で、自分の仕事に自信と誇りをもって取り組めるよう、計画的に研修を行ってきた。具体的な方策として、昨年度と同様に中堅教員をメンターにおき、日常的な関わりの中で、教員としての資質能力の向上を図ってきた。これは、メンターである中堅教員にとっても若手教員に教えることで、自身の実践の振り返りを行うことができる。このようなサイクルを組織の中で回すことで、ベテラン教員にも刺激になり、結果的によりよい集団をつくることができると考えているためである。若手教員からさまざまな発信があり、それを中堅やベテラン教員の経験と照らし合わせ、学校としてよりよい実践を生み出すことができるように研究を進めた。

3. 事業の概要

(1) 日常の取組

①職員室の座席配置をメンター、メンティーのペアで近くに配置し、日常的な OJT 研修を行う。

(2) OJT 研修による指導

②授業づくり・集団づくりをベースにしたメンターチームによる OJT 研修を行う。

③OJT 推進委員会を随時実施する。④OJT 推進リーダーによる OJT 研修を実施する。

OJT 研修の実際

(1) メンターチームによる若手対象 OJT 研修

若手教員に OJT 推進リーダーを加えたメンターチームを組織し、職員会議後等に研修時間を設定し田中准教授（滋賀大教職大学院）に研修の内容について指導・助言いただきながら、以下の年間計画で取り組んだ。OJT 研修の内容によって、生徒指導担当や教育相談主任等を講師と位置づけ、タイムリーな研修となるよう工夫した。

	研修内容	研修形態	主たる研修者
4 月	オリエンテーション	講義	OJT 推進リーダー
5 月	学級経営について	講義・グループワーク	OJT 推進リーダー
6 月	教育相談・いじめ問題について	講義・ケーススタディ	教育相談主任・子ども支援 Co※
8 月	授業における「課題」とは何か	講義・グループワーク	校内研推進教員
8 月	コミュニケーションスキル	小中合同ワーク	小中の OJT 推進リーダー
9 月	行事での集団づくりについて	講義・グループワーク	OJT 推進リーダー
11 月	働き方・休み方について	グループワーク	OJT 推進リーダー
2 月	授業実践研究	グループワーク	OJT 推進リーダー

※Co：コーディネーター

(2) 毎週のOJT推進リーダーによるOJT研修

今年度は、田中准教授の助言を受け、OJT推進リーダーによる研修を毎週月曜日に2時間の枠をとって、採用3年目までに拡大し行った。1学期は、学級経営や教育相談の仕方、保護者対応について研修を行った。また、日々の業務で悩んでいることなどを共有する時間を設け、解決策を考えるグループワークを行った。

業務内容だけでなく、自身の働き方や休み方（リフレッシュの仕方）についてもグループワークを行った。持続可能な働き方について議論し、働き方を整えることが日頃のパフォーマンス向上につながることを確認した。



(3) 校区小中合同OJT研修

夏休み中には、校区の小学校と合同でOJT研修を実施した。大学院で学ばれた小学校の先生を講師に招き「コミュニケーションスキル」について学んだ。その後、グループワークを行い、校種をこえた交流を行うことができた。2学期に入ってから、他の教員の授業を参観し、自身の授業の組み立てについて振り返る活動を行った。参観後、授業の展開の仕方や言葉かけの工夫など、気づいた点を書き出し、共有する時間をもった。

打出中学校区

グループワークで「コミュニケーション力」と「聞く力」up!



校区研の前に、「心を動かすコミュニケーション」の演習を行いました。中学校と小学校の先生がペアになり、ロールプレイの時間をたくさん取って、トピックについて話しました。話す役と聞く役を交互に行い、実際にどのようにすれば相手がもっと話したいと思えるのか、「聞く力」の向上を目指しました。

ペアワーク中、どのペアも笑顔があふれ、聞き方を意識することで、とても気持ちよく話せている様子でした。

(大津市教育センターOJT だより参照)

4. 今後に向けて

これまで数年間の取り組みを終えて、成果や課題が見えてきた。成果としては、忙しい中でも時間を設け、さまざまなテーマで研修を行うことで、日々の実践を振り返り、その後の業務に生かせることである。課題としては研修時間の設定である。OJT研修の時間が負担にならないよう工夫が必要である。若手教員にとって、日々の業務の中で少しほっとできる時間になるよう、また、一人ひとりが働きやすい職場となるように年間計画や研修内容の見直しを行い、充実を図っていきたい。また、校内だけでなく、小学校の教員と校種の枠を超えて行った合同OJT研修も継続して行っていきたい。

(白井 貴晃・田中 満)

1 共同研究事業

24) 教職員の学びを再構築 ～PBL 型手法を用いた校内研究を窓口～」

1. 事業名および担当者

【事業名】教職員の学びを再構築 ～PBL 型手法を用いた校内研究を窓口～」

【担当者】教職大学院：田中 満 栗東市立大宝東小学校：校長 中川 章子，教諭 窪田 和也

2. 事業の目的

教科限定，単一研究テーマのもと研究を推進する従来型の校内研究は，校内研究主任や推進部会員，授業公開者にとっては大きな学びを得る機会となっていたが，果たして全ての教職員が当事者意識をもって取り組んでいるのか。この疑問から，本研究では，これまでの校内研究の再構築を図り，どの教職員も当事者意識をもち，主体的に取り組める研究のあり方について探ることを目的とした。具体的には，PBL（課題解決学習）型手法を用いて校内研究を推進し，その効用と課題について明らかにすることを主な内容とする。

3. 事業の概要

（1）大宝東小学校におけるこれまでの校内研究

本校では，過去5年間「目的意識をもって，学びに向かう子どもの育成」を主題に算数科を窓口研究を推進してきた。特に昨年度は，県教育研究会算数部会（以下，県算数部会とする）の近畿大会において算数科の全学年公開授業を実施し，この5年間の研究成果を確認することができた。昨年度の研究では，どの教員も年間1回以上の授業を公開し，その指導案検討には県算数部会の部会員がいつも助言をしてくれるなど，外部の伴走者を得たこともあり，授業研究会の回を重ねるごとに授業者の手応えは増し，授業の振り返りに見える児童の変容も顕著で，大きな成果を得ることができた。昨年度末の研究の総括では，算数科の授業改善が前進し，主題に迫ることができたと考える教職員が大半であったが，一方で，校内研究主任や公開授業を担う教員の負担が大きく，担任外教職員や特別支援学級担任には研究内容に乗りづらいといった感を抱く者もいた。第3学年以上の教科担任制を一層推進する本校において，もはや教科縛りのある研究は困難になることも予想されるため，校内研究のあり方を見直すことにした。見直しの視点は，「どの教職員も研究主題を自分事ととらえ，解決に向けた方策を見出せる校内研究にする」である。昨年度末に，児童アンケート等から課題をあぶり出し，研究主題を「豊かなコミュニケーションを通して，つながり合う学習集団の育成」とし，この主題に向かって，全教職員が自らの問いを立て，学校教育のあらゆる場面を研究のフィールドにする PBL（課題解決学習）型手法を用いた研究にすることとした。

（2）校内研究の内容と方法

今年度当初，校内研究会では，全教職員が研究主題をもとに自らの問いを立て，研究フィールドの近い者同士を五つの小さなチームとした（図1）。チームでの実践交流を行いながら，それぞれが授業公開や取組を展開し，児童の変容を見る。授業改善のPDCAを年間2サイクルできるよう年間計画を立て取り組んだ。今年度は，教職大学院の田中准教授に数回にわたる指導助言を受け，成果と課題を探りながら進めてきた。

（3）校内研究の年間計画

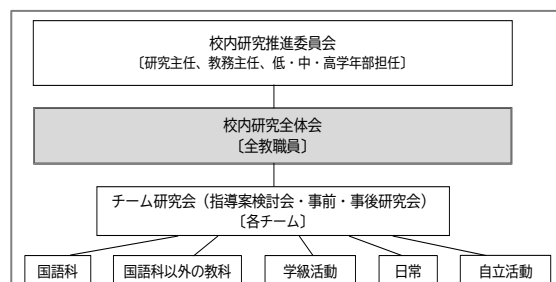


図1 校内研究体制

月1回校内研究の時間を設定し、各チームで実践交流や公開授業の準備や授業後の協議、児童の変容の検討を行う。全体会は5回設定した。そこでは、各チームで実践していることを報告し、研究推進上の課題を共有しながら進めることとした。

月	研究の内容	月	研究の内容
4	校内研究全体会（自らの問いを立て、チーム編成を行う）	10	校内研究全体会（中間発表）
5	校内研究チーム協議会（問いに基づき、課題解決方法を検討）、一人1授業公開実施	11	校内研究チーム協議会（一人1授業公開に向け協議）、一人1授業公開実施
6	校内研究チーム協議会・児童アンケート実施（実践交流・アンケート結果分析）	12	児童アンケート実施、分析
7・8	校内研究チーム協議会（実践交流・検証）、2学期の授業公開に向けて検討会	1	校内研究全体会（授業公開・協議会）※県教委訪問
9	校内研究全体会（特別支援学級公開授業）、校内研究チーム協議会（中間報告準備）	2	校内研究全体会（各チームからの成果と課題を発表、児童アンケートの分析、研究のまとめ）

（４）本事業の成果と課題

年間を通してそれぞれの教職員が研究主題を常に念頭に置きながら、各自が問いと仮説を立て、研究に取り組むことができた。以下は、教職員アンケートの結果である。

【今年度の校内研究に対する教職員の感想】※傍線部は、筆者による ○今年度の研究の方法は、新鮮で良かった。大人も「豊かなコミュニケーションを通して、主体的につながり合う教職員集団の育成」をテーマに研究できたと思う。 ○自分の課題意識に合わせて問いを立て、研究できるのでとても楽しかった。次年度もこのチームによる研究手法が良い。 ○これまでの校内研究は、時間をしっかり取り、その枠組みの中で頑張っていくという印象で、構えてしまっているところがあった。しかし今年は日々の時間の中でできる活動を見つけ、チーム内で校内研究の時間以外でも日常的に共有しながらやっていくものだったのでもやっていた楽しかった。うまくいかなくても次の方法を見つけ、チーム員それぞれがまた再度挑戦する！といった感じでやりがいもあった。 ○自分で問いを立て、チームの仲間と研究が進められていることが、ワクワク感をもって研究に取り組めるカギになっていると思う。 ○各チームで進めていることを他のチームにどれだけ生かしてもらえるかが難しい。校内研究なのでみんなで活かしていけると良いが…。 ○特別支援学級担任として、今年度の研究は自分事として研究を受け止められた。これまで特別支援学級においても校内研究で算数科の授業公開等に臨んできたが、全体会での研究協議は通常学級ベースとなりがちで疎外感を感じてきた。今年度はやりがいがあった。

教職員アンケート等から見える本事業の成果は、次の4点である。

- ①どの教職員も校内研究に主体的に取り組むことができた。
- ②小さなチームによる研究は、それぞれの問いは少しずつ違うものの研究に関する日常的なコミュニケーションの量を増やし、安心して学び合える風土の醸成や同僚性を高めることにつながった。今回の研究手法で、若手教員はPDCAサイクルを自主的に3回まわすなど若手教員の人材育成にも大いに貢献した。
- ③校内研究主任等、一部の教員の負担感は、チームそれぞれが研究を主体的に推進することにより多少軽減された。また、校務分掌と自らの問いをリンクさせることで、各自の負担感の軽減（校務分掌は特別活動、校内研究では算数科といった二足のわらじ状態の解消）にもなった。
- ④何よりも、研究によりコミュニケーションの意義を実感する児童の割合が増えた（図3）。

4. 今後に向けて

今年度の成果を踏まえ、次年度も同一の研究体制で研究を推進する予定である。課題は、全体協議会の運営方法の改善と、各自の研究成果をどう広げるかの2点である。今年度、当たり前に行ってきた当番活動を大胆に見直すことで児童のコミュニケーションに大きな変容を見た教員もあり、こういった研究の成果をどう共有していけばよいか、あともう一工夫することでさらに教職員のやる気に火をつけることができるのではないかと考える。

（窪田 和也・田中 満）

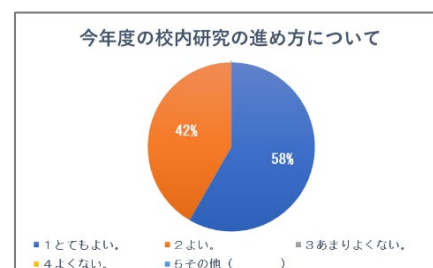


図2 教職員（n=26）アンケートより

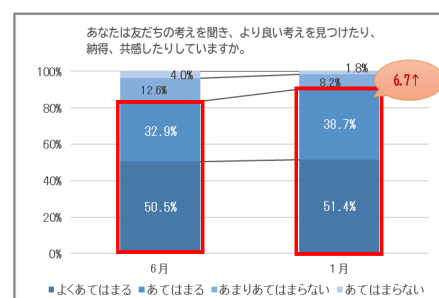


図3 全校児童（n=331）アンケートより

1 共同研究事業

25) 小学校における児童自ら主体的に探究する姿勢の育成について

1. 事業名および担当者

【事業名】 小学校における児童自ら主体的に探究する姿勢の育成について

【担当者】 教職大学院：田中 満

大津市立仰木の里東小学校：校長 山尾 健一，教諭 古川 祐子

2. 事業の目的

本校は、学区のほとんどが新興住宅であり、地域や保護者の価値観は多様である。保護者の学習への関心は高く、学びに真剣に向かう児童も多いが、反面、学習の意欲が低下している児童も少なくない。そのため、学ぶ楽しさ、わかる喜びを味わうことができるように、様々な学習活動に取り組んでいる。

令和3年度から第3期滋賀県教育振興基本計画で示されている「読み解く力」の育成を目指して校内研究を推進している。保護者から ICT 機器の活用への期待が大きかったことから、校内研究のテーマを「課題に必要な情報を正しく読み解く力」として、令和5年度までの3か年計画で実践してきた。実践を積み重ねることで、読み解く力を育成には、「課題の設定」や「資料の質」、「話し合いの方法」が重要であることが分かった。また、タブレット端末を積極的に活用しながら、児童が相互の交流で学び得た情報をどのように整理するかが、読み解く力の育成に重要であることがわかった。

今年度は、学校教育目標「自ら学び、心豊かでたくましい子どもの育成」の『自ら学び』に焦点を置き、児童自ら「主体的に探究する姿勢を育てるための授業改善」について校内研究で注力することとした。継続してきた「課題に必要な情報を正しく読み解く力」の育成を授業のベースにしながら、探究的な授業への改善を目的としたい。

3. 事業の概要

研究テーマを「主体的に探究する姿勢を育てる日々の実践」とし、取り組む教科は指定せず、学年部によって全教科の中から選択して実践することとした。但し、R6 年度全国学力学習状況調査の結果から算数科に課題があることが明確となったことから、2学期からは特に算数科に注力した。また、研究授業だけでなく、各教科における日々の実践も適宜、記録してワークシートなども残していくこととした。探究的な学習を充実させ、主体的に探究する姿勢を育てることを目指し、滋賀大学教職大学院の田中准教授に助言を受けながら、各学年で協議を重ねて日々実践を行ってきた。探究的な授業への改善策として、職員と共通理解した内容は以下である。

授業改善のための共通理解事項

- ① 低中高学年部ごとに研究授業・研究会を1回ずつ行う。
- ② 研究授業以外の公開授業（人事訪問や県市指導主事等訪問等）においても探究的な授業を意識した課題（めあて）を設定し授業公開する。
- ③ 研究授業では、グループ別に討議した内容についてタブレット端末を活用して共有を図る。
- ④ 授業の冒頭で示す課題（めあて）の文末は疑問文とする。例：「・・・だろうか？」
- ⑤ 授業の最後の振り返り（まとめ）は、課題（めあて）に呼応したものとする。
- ⑥ 児童に振り返り（まとめ）を書かせる際は、条件（キーワード、文字数など）を示す。



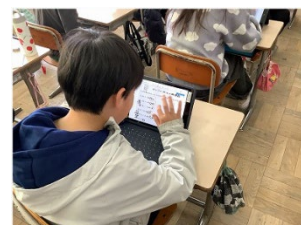
年間計画

月	校内研究
4	校内全体研究会 研究主題の決定 年間計画と全体構想の検討
5	研究授業内容の検討 具体的努力事項決定 全学級授業公開 5/10,5/20*市教委
6	研究授業(特別支援学級)6/27
7-8	教材開発・教材研究
9	研究授業(低学年)9/19 研究授業(中学年)9/25 全学級授業公開 9/27*市教委
10	教材開発・教材研究
11	研究授業(高学年)11/6*県教委 研究授業(外国語)11/27*県教委
12	教材開発・教材研究
1	全学級授業公開 1/17,1/23*市教委
2	学ぶ力向上訪問研究授業・全学級授業公開 2/13(木) 今年度の成果と課題
3	次年度の研究の構想

本校では、研究授業は年4回と少ないため、市教委・県教委の人事主事や指導主事等が訪問される機会を捉えて、全教員に授業公開する際、教科、単元名、めあて(探究的な課題)を提出させることで授業改善への意識付けを図った。また、探究的な授業への第一歩として、授業の始めに提示するめあては、疑問文(文末が?となるように)とすることを意識づけさせた。

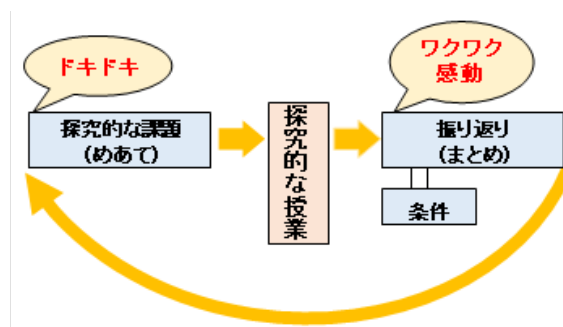
また、今年度の全国学力調査の結果から算数科に課題があったため、全学年を対象にした計算プリントを印刷してレターケースに整理し、朝学習や家庭学習等に活用した。また、全国学力学習状況調査で過去に出題された計算問題をまとめた計算プリントを作成し、児童がタブレット端末で回答できる教材を開発した。

更に、研究授業では、グループ別に分かれて協議する時間を十分に確保し、議論を深めることを重視した。また、協議内容をタブレット端末(メタモジ)を活用することで、各グループの協議を共有できるようにした。



4. 今後に向けて

日々の授業を探究的に改善するための実践をまとめると下図のようになる。探究的な授業の始まりとして最も大切なことは「探究的な課題」の提示であり、それは文末が疑問文(例・・・だろうか?)である方が児童の知的好奇心を高め、ドキドキ感をもたらす。その後、課題解決のために、協働的な学びやICT活用、観察・実験など教科や単元によって様々な手法を用いて探究的な授業を行う。そして授業の終わりに、探究の結果を踏まえて、教師から提示された条件に沿って振り返り(まとめ)を書くことで、ドキドキ感が落ち着いて感動をもたらす、次時の授業も楽しみに感じるワクワク感へとつながるだろうという仮説である。これは、あくまでも今年度の実践を通じた教員の感想による仮説であり定量的なものではない。今後も校内研究や日々の実践を重ねることで、探究的な授業のあり方について研究を深めていきたい。



(山尾 健一・田中 満)

1 共同研究事業

26) 子どもが夢中になって学ぶ授業を目指して ～授業について「見方・考え方」をもって語れる教師集団を礎として～

1. 事業名および担当者

本事業名は、「子どもが夢中になって学ぶ授業を目指して～授業について「見方・考え方」をもって語れる教師集団を礎として～」である。担当者は以下の通りである。

東近江市教育研究所：栗田 一路(所長)，榎並 洋貴(指導主事)，藤原 里菜(研究員)

教職大学院：北村 拓也

2. 事業の目的

東近江市は、「児童生徒が「学び方」を身に付け、主体的に問題発見・問題解決に取り組む力を高める授業づくり」の研究を継続して進めている。

令和6年度は、「子どもが夢中になって学ぶ授業を目指して～授業について「見方・考え方」をもって語れる教師集団を礎として～」を研究主題とし、「育成を目指す「資質・能力」(付けたい力)を明確にし、【授業について自分なりの見方・考え方をもって語れる教師集団】を育成することは、授業力の向上並びに今必要とされる学力観・授業観の転換につながり、ひいては、子どもたちの学びに対する主体的な力(能力面、態度面)を高めることになるであろう」を仮説として、研究に取り組まれた。

本事業は、このことに基づき、国語科において、授業づくりや公開授業・授業研究会を通して、教師の授業力の向上並びに今必要とされる学力観・授業観の転換を図り、「なぜだろう?」「わかった!」「またやりたい!」という子どもの姿を実現できる授業と、子どもたちの学びに対する主体的な力(能力面、態度面)の向上を目指した。

3. 事業の概要

東近江市では、授業改善推進委員会(国語科部会、算数・数学科部会)において指導案検討と授業研究会を行い、実証授業の成果や課題を分析し、本市で夏季休業中に行われる教育研究所研究発表大会での報告、指導案の公開等を通して、市内への発信、その後の支援等を通して普及を図っている。

本学教員は国語科部会のアドバイザーとして、指導案検討や授業研究会での指導助言・講義を行った。本学教員が関わった事業の日程は以下のとおりである。

- | | |
|-------------|-----------------------------|
| ・ 5月30日(木) | 第1回国語科部会(第1回実証授業に向けての指導案検討) |
| ・ 6月24日(月) | 第2回国語科部会(第1回実証授業・授業研究会) |
| ・ 9月24日(火) | 第4回国語科部会(第2回実証授業・授業研究会) |
| ・ 10月15日(火) | 第5回国語科部会(第3回実証授業に向けての指導案検討) |
| ・ 11月8日(金) | 第6回国語科部会(第3回実証授業・授業研究会) |

(1)第1回実証授業より

単元名：なぜ気持ちが大きく変わった？気持ちのビフォーアフターを考えよう。

教材名：「走れ」(「新編 新しい国語四上」東京書籍)

第4学年を対象として、「様子や行動、気持ちや性格を表す語句を理解し、文章の中で使うことができ

る」や「登場人物の気持ちの変化を、叙述をもとに場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる」を重点のねらいとして授業を実践した。

実証授業では、本時で取り組む学習課題の設定の工夫や、これまで積み重ねてきた学習を視覚化し生かすことができるようにする手立てを講じたことで、主体的に学びに向かう子どもの姿が多く見られた。授業研究会では、授業者が自分なりの見方・考え方をもって語ることができるようになるために、学習指導要領解説を手掛かりに、指導事項の趣旨を理解し、単元で目指す子どもの姿を具体的にイメージして授業を構想することが重要であることを確認した。

(2)第2回実証授業より

単元名：ここが魅力！宮沢賢治作品 ～「めくって納得！種明かしカード」を書こう～

教材名：「注文の多い料理店」(「新編 新しい国語五」東京書籍)

第5学年を対象として、「比喩や反復などの表現の工夫に気付くことができる」や「人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる」を重点のねらいとした授業を実践した。

実証授業では、「授業の導入を子どもの司会で進める」「使う学習プリントや交流する相手を子どもが決める」「個別・協働の学習形態を子どもが判断する」といった学習を子どもたちに委ねる手立てが講じられており、活用型の「子どもが主役の授業」であった。授業研究会では、さらなる「子どもが主役となる授業」に向け、課題を解決するために必要な学習活動や子どものつまずきなど、多様な子どもの姿を想定し授業を構想することが必要であることを確認した。

(3)第3回実証授業より

単元名：おもしろさの秘密はこれだ！表現を工夫して短編小説家になろう！

教材名：「注文の多い料理店」(新編 新しい国語五 東京書籍)

第2回実証授業と同様、第5学年を対象として、「比喩や反復などの工夫に気付くことができる」や「人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる」を重点のねらいとした授業を実践した。

実証授業では、子ども自身が、自分の学習の目的や進度に合わせて、学習活動や対話する相手、さらに個人でやるのか他者と学ぶのかを選択できるように様々な工夫がされており、子どもが夢中になって学ぶ探究型の「子どもが主体の授業」であった。「導入で個人の目標を設定する」「学習プリントで課題解決の見通しをもてるようにする」「自由に他者参照できるようにする」「育成する資質・能力を意識して学習のまとめをする」「授業者が子どもの学びを見取り一人一人の子どもに学習の達成に向けた助言をする」といった様々な手立てを講じたことが有効であったと考える。

4. 今後に向けて

本研究を通して、子どもたちが個別最適に学ぶことができる授業づくりに向け、それを実現させる手立てや授業者として必要な見方・考え方を見いだすことができた。また、教師の授業観の転換が求められる中、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めると同時に、学習指導要領に示されている学習内容の趣旨を理解することの重要性も実感した。これらのことを踏まえて、さらなる授業改善・指導改善につなげていきたい。

(北村 拓也)

1 共同研究事業

27) 話合いの深まりをめざして

～話してよかった 聴いてよかったと 感じられる伴谷っ子～

1. 事業名および担当者

本事業名は、「話合いの深まりをめざして～話してよかった 聴いてよかったと 感じられる伴谷っ子～」である。担当者は以下の通りである。

甲賀市立伴谷小学校：中嶋 政二(校長)，杉本 賢吾(校内研究主任)

教職大学院：北村 拓也

2. 事業の目的

甲賀市立伴谷小学校では、令和6年度において「話合いの深まりをめざして～話してよかった 聴いてよかったと 感じられる伴谷っ子～」を校内研究のテーマに設定された。国語科を窓口に、「学習課題に対して自分の考えをもつことができる」「自分の考えと比べながら相手の話を聴くことができる」「自分の考えの変容・広がりなどを発信できる」を目指す子どもの姿として、育成する資質・能力を明確にし、子どもたちの「聴きたい」「話したい」という思いを引き出したり、子ども同士の話合いを深め、それを自分の言葉で発信したりできる力を伸ばす授業づくりに取り組まれた。

本事業は、この研究内容に基づき、共同で研究を進めることを通して、授業での手立てや授業改善のポイントを見いだすことを目的とする。

3. 事業の概要

甲賀市立伴谷小学校では、年間7回の授業研究会に取り組まれている。本学教員は、公開授業に向けての指導案検討会や授業研究会において指導助言を行った。本学教員関わった事業の日程、詳細は以下のとおりである。

(1) 事業の日程

- | | |
|--------------------|--------------------------|
| ・ 5月15日(水) | 公開授業・授業研究会①に関わる指導助言 |
| ・ 5月21日(火) | 公開授業・授業研究会②に向けた指導案検討会 |
| ・ 6月5日(水) | 公開授業・授業研究会②に関わる指導助言 |
| ・ 6月26日(水) | 公開授業・授業研究会③に関わる指導助言 |
| ・ 9月26日(木) | 公開授業・授業研究会④に向けた指導案検討会 |
| ・ 10月23日(水) | 公開授業・授業研究会④に関わる指導助言 |
| ・ 11月26日(火)・27日(水) | 公開授業・授業研究会⑤(指導助言は動画にて実施) |
| ・ 1月22日(水) | 公開授業・授業研究会⑦に関わる指導助言 |

(2) 公開授業・授業研究会②より

単元名：登場人物になりきって、心に残ったことを手紙で伝えよう。

教材名：「一つの花」(4年上 光村図書)

第4学年を対象として、「登場人物の思いを会話や行動に着目して想像する姿」「物語の情景を、場面の移り変わりと結び付けて想像する姿」「考えを伝え合い、同じところや違うところを見つける姿」を目指

し、戦時中の様子を紹介し物語の設定をイメージできるようにしたり、情景描写を捉えるために、場面ごとにキーワードを見つけて整理できるようにしたりするといった手立てを講じて授業が実践された。

公開授業では、子どもたちが自由に思考することができるように学習プリントを工夫したことで、試行錯誤しながら学んでいる子どもの姿が多く見られ、有効な手立てだと感じた。助言では、深まる話合いに向けて、授業者が学習内容の趣旨を理解し、それを手掛かりに「話合いを通して学びが深まっている子どもの姿」を具体的にイメージすることが重要であることを確認した。

(3) 公開授業・授業研究会④より

単元名：「ちいちゃんのかげおくり」を読んで、心がジーンとした場面発表会をしよう。

教材名：「ちいちゃんのかげおくり」（3年下 光村図書）

第3学年を対象として、「言葉のもつよさに気付き、思いや考えを伝え合おうとする姿」「新出語句や新しい表現を用いることで、場面の変化が読み取りやすくなることに気付き、語彙を増やそうとする姿」「登場人物の気持ちの変化や心を揺さぶる場面を具体的に想像し、自分の考えをもとうとする姿」を目指し、登場人物の心情や場面の移り変わりの表現に注目したり、児童がそれぞれの場面で考えをもてる場を設定したりするといった手立てを講じて授業が実践された。

公開授業では、話を聴く姿勢が育っている子どもの姿が多く見られ、学校全体を通して継続的に校内研究に取り組む成果を実感することができた。また学習課題を「違いを考える」と焦点化したことで、自分と他者の意見とを比較し、似ている点や違う点について感想を伝え合うことができていた。助言では、話合いを通して子どもの考えを深めるために、「どのような考えをもっているのか」や「他者のどのような考えに注目する必要があるのか」を授業者が具体的にイメージすることが重要であることを確認した。

(4) 公開授業・授業研究会⑤より

単元名：たぬき劇を開こう！～好きなところとそのわけをつたえよう～

教材名：「たぬきの糸車」（光村図書 1年下）

第1学年を対象として、「文の中における主語と述語との関係に気付く姿」「場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像する姿」「文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもとうとする姿」を目指し、初読後にたぬきの行動に関わって疑問に思ったことを引き出して学習への興味をもたせたり、他者との交流の場面を多く設定し自分の考えを言語化できるようにしたりするといった手立てを講じて授業が実践された。

公開授業では、想像したことを動作化したり児童同士でインタビューしたりと、1年生が楽しく学習に取り組める環境づくりがなされていた。また、児童の言葉でめあてを設定したことで本時の学習課題が共通理解され、最後までがんばる児童の姿が多く見られた。助言では、低学年から他者と交流する機会を設定し、他者の課題解決の過程やものの見方や考え方を共有したり参照したりすることを通して、よりよい学びが生み出される経験を積み重ねることで、深まる話合いが実現することを確認した。

4. 今後に向けて

本事業を通して、子どもたちが協働的に学ぶために必要となる新たなポイントを見いだすことができた。このことを県内の授業改善にも生かしていきたい。また、3年間校内研究に関わらせていただいたことで、回を重ねる度に先生方の変容を実感することができ、継続することの効果を感じた。今後は、共同で研究を進めるあり方の充実に向けて検討を行っていきたい。

(北村 拓也)

1 共同研究事業

28) 言葉を大切にし、自分の考えを豊かに表現する子を育てる

1. 事業名および担当者

本事業名は、「言葉を大切にし、自分の考えを豊かに表現する子を育てる」である。担当者は以下の通りである。

栗東市立治田小学校：田中 覚(校長)

中村 百合(校内研究主任，本大学院教育実践力開発コース 2024 年度 2 回生)

教職大学院：北村 拓也

2. 事業の目的

栗東市立治田小学校では、令和 6 年度において「言葉を大切にし、自分の考えを豊かに表現する子を育てる～「伝えたい!」「書きたい!」という意欲をもって、自分の思いや考えを豊かな表現と適切な言葉で、相手に分かりやすく書き表す子どもの育成を目指して～」を校内研究のテーマに設定された。全国学力・学習状況調査の結果の分析などから課題として考えられる「書く力」の向上と、校内研究の活性化に向け、「書くことの領域における 6 年間の系統的な指導のあり方の更なる探究」「伝えたい! 書きたい! という意欲をもって、自分の思いや考えを、豊かな表現と適切な言葉で、相手に分かりやすく書き表す子どもを育てる学びのあり方の検証」「各教職員がより主体性をもって実践を重ね、協働的に仮説を検証する校内研究のあり方の構築」を研究の方向性とし、「読書活動の充実」「語彙力の向上」「教科横断的な学び」「話す力」の 4 つをアプローチの視点としてプロジェクトチームをつくり、各チームで問いに対する具体的な仮説を立て、実践および検証を行うという流れで研究に取り組まれた。

本事業は、この研究内容に基づき、共同で研究を進めることを通して、授業での手立てや授業改善の視点を見だし、さらに校内研究の活性化につなげることを目的とする。

3. 事業の概要

栗東市立治田小学校では、6 月から 11 月までを仮説プロジェクトチームでの検討・実践・検証を行う期間、1 月末までを学校全体で行う研究授業の期間とし、3 回の研究会を実施された。本学教員関わった事業の日程、詳細は以下のとおりである。公開授業に向けての指導案検討会や授業研究会に参加し、授業改善および指導改善や、校内研究の活性化に向けて指導助言を行った。

(1) 事業の日程

- | | |
|----------------|---------------------------|
| ・ 5 月 29 日(水) | 教科横断型授業(第 5 学年)の参観，指導助言 |
| ・ 11 月 13 日(水) | 校内研究会(仮説プロジェクトチームの研究発表会) |
| ・ 11 月 27 日(水) | 校内研究会(第 5 学年の公開授業・研究協議) |
| ・ 12 月 2 日(月) | 第 1 学年の公開授業に関わる指導案検討会 |
| ・ 12 月 18 日(水) | 校内研究会(第 1 学年の公開授業・研究協議) |
| ・ 1 月 7 日(火) | 第 4 学年の公開授業に関わる指導案検討会 |
| ・ 3 月 3 日(月) | 校内研究会(本年度の研究のまとめ，次年度に向けて) |

(2) 仮説プロジェクトチームの研究発表会より

4つのプロジェクトチームが、6月から11月までの期間に取り組んできた実践とその成果・課題について発表・協議が行われた。「読書活動の充実チーム」は、並行読書の実施や読書カードを活用して読書に対する意欲の向上を図る実践、「語彙力の向上チーム」は、マイワードブックの作成・活用を通して、子どもが主体的に語彙を獲得することができる実践、「教科横断的な学びチーム」は、計画的に単元を配列し学んだことを生かせるようにする実践、「話す力チーム」は、授業における協働的な学びを通して話す力を高める実践など、校内研究で目指す子どもの姿を踏まえながら、様々な工夫を凝らして実践されていた。どのチームの報告からも、子どもたちが主体的に学んでいる様子が伺え、実践の効果を感じることができた。

指導助言において、「子どもたちの読書活動のPDCAサイクルを確立することが重要であること」「語彙を調べる目的を子どもが実感すること」「教科を結び付ける際には、各教科の学習内容やその趣旨を大切にすること」「話合いの学習活動において、学習のねらいと関連付けて話合いの目的をもたせること」「各チームが実践されたことをこれからの授業や教育活動の中で積極的に取り入れ、改善していくことが重要であること」などを確認した。

(3) 第5学年の公開授業・研究協議(11月27日)より

単元名：これからの工業生産についてあなたはどうか考える？

教材名：「あなたは、どうか考える」(国語五 銀河 光村図書)

第5学年を対象として、「思考に関わる語句の量を増し、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすることができる」「事実と感想、意見とを区別して書き、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる」を単元の目標に設定された。「書く力」の向上に向け、新聞の投書を通じて自分の考えを社会に発信するという目的意識と相手意識をもたせたり、3人での協働的な学びを通して、よりよい意見文の構成や内容を考えることができるようにしたりするなどの手立てが講じられた。また、本授業は「教科横断的な学びチーム」の実践として、社会科の単元「これからの工業生産」で集めた情報や考えたことを基に意見文を書くという教科間のつながりを生み出し、子どもが学んだことを生かすことができるように授業が実践された。

公開授業では、導入において、課題の解決の中で出てきた実際の子どもの悩みを踏まえて学習課題を設定したことで、主体的に学ぶ姿につながっていた。また、社会科の学習と関連付けたことで、子どもたちが意見文に書くための材料をたくさんもつことができおり、自分の力で書き進めたり他者と交流したりすることができていた。

指導助言において、国語の授業づくりの視点として「日常生活の中から書く内容を決める」ということを意識すること、また「書く力」の向上に向けて、単元内での学びを、国語科での別の単元や国語を飛び出して別の教科等で生かすなど、繰り返し行うことが重要であることを確認した。

4. 今後に向けて

「書く力」の向上は、滋賀県全体でも求められていることである。本事業を通して見いだした子どもたちの「書く力」を向上させる手立てやポイントを滋賀県全体にも広げていきたい。また、本事業の校内研究は、前期と後期に分けて進めるという興味深い事例である。このような校内研究に取り組んでいる学校があることを伝え、県内学校の校内研究の活性化につなげていきたい。

(北村 拓也)

1 共同研究事業

29) 理科指導力向上研修の企画研究 ～専門家から学び、授業の質を高める～

1. 事業名および担当者

事業名は「理科指導力向上研修の企画研究プロジェクト」であり、担当者は次のとおりである。

教育学部教員：糸乗 前，大山 真満

CST（コア・サイエンス・ティーチャー）：渡辺 幸寛（甲賀市立水口中学校教頭 H24 年度認定・滋賀 CST 研究会会長），多和 完章（彦根市立河瀬小学校教諭 H24 年度認定），小林 大輔（東近江市立愛東南小学校教頭 H27 年度認定）協力者：東野 友科子（彦根市立河瀬小学校教頭），三宅 草（彦根市立彦根中学校教頭）

2. 事業の目的

小学校教員の多くは、理科の専門的な教育を受けた経験のない方が多く、高等学校でも地学を選択し学んだ教員は少ない。中学校の理科教員でも、高等学校で地学を選択した教員は少なく、大学でも地学を専攻している教員は少ない。小中学校で地学分野を教えるとき、教員の知識の少なさから、地域の教材や身近な現象の観察に基づく授業展開が行えていないことが多い。今回、教員が専門家から指導を受け、知識を増やすことが大切だと考え、「専門家から学ぶ」と題して、専門家の講義を受け、児童生徒が興味・関心を持って、積極的に観察する授業展開を考え実践する。

3. 事業の概要

夏休みの期間に、彦根気象台の職員を講師に、気象台をお借りし気象観測、気象予報の現場を体験する研修会を予定していたが、急遽、事情により研修会が中止となった。

そのため、当初の計画を変更し、以前の CST 全体研修会で行った地層に関する研修で得た知識や、ブロックで行われた研修による知識を CST 教員間で交流し、小学校 6 年の「大地のつくりと変化」の単元について授業展開を考え、研究授業を行うことにした。

滋賀 CST 研究会全体研修会 授業研究会

日時 令和 6 年 11 月 13 日(水) 13:25～16:50

会場 彦根市立河瀬小学校

参加者 滋賀 CST 研究会会員および河瀬小学校教員、彦根市立彦根中学校理科教員 14 名

内容 公開授業 「大地のつくりと変化」

授業展開

1. 本時の課題を知る。 めあて 地層はどのようにしてできるのだろうか。
2. 堆積のモデルに土を流し込み、堆積していく様子を観察する。
 - ・流し込んだ直後やその後の体積の様子に着目して観察をする。
 - ・タブレットの動画機能を利用して、実験の様子を記録する。
3. しばらく時間をおいた後、どのように堆積したかを観察する。
 - ・堆積した層の中の粒の大きさに着目して観察する。
4. 実験の考察を行う。
 - ・実験の結果を踏まえて、どのように土が堆積したのか、自分の考えをワークシートに書く。



・実験を振り返るため、録画した動画を見直したり水槽の状態を観察したりして考えをまとめる。

授業展開をつくるのにあたって

地層は、流れる水の働きと火山の噴火によって形成されることは、小中ともに学ぶ内容である。

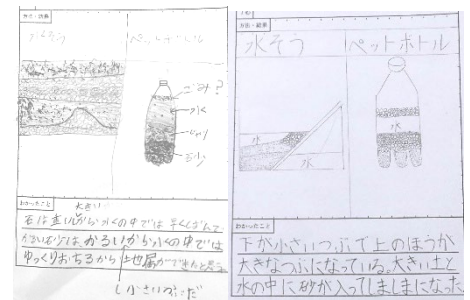
流れる水の働きによる地層の形成については、小学校では、ペットボトルに粒の大きさが違う土を入れてよく振り混ぜた後、静置し様子を観察する実験が多く行われる。今回のような堆積モデルを使う実験を行っている学校は少ない。これは、実験装置が容易に準備できないためではないかと予想される。

授業展開について CST 教員で話をする中で、中学校教員から、ペットボトルの実験では地層の重なり方だけになり地層の広がりについて視点がいかないことが指摘された。

小学校では、地層の広がりを各地点の地層のつくりを相互に関係付けて、その特徴が他の地点でも観察できることから推測させている。今回の授業計画では、ボーリング試料の観察の授業がそれに当たる。

中学校では、地層の重なり方や広がり方の規則性を見いだすことを目標としている。ただし、堆積モデルを使う実験は取り上げている教科書は少ない。小学校での実験の経験をもとに、結果を分析し解釈することで規則性を見出させるためには、小学校の経験の中に、ペットボトルの実験だけではなく、堆積モデルの実験があることが大切だとの考えに至り、今回の授業展開を組み立てた。

授業研究会では、堆積モデルの実験をすることで、児童が地層の重なり方をどのように見ていたかについて話し合われた。児童のプリントを見ると、地層の重なり方が、ペットボトルと同じように上下の重なりで表現されているものが多かった。一部の児童は、前後の広がりについて描いている者がいた。



今回の授業では、どちらの記述もめあてを達成しているが、今後の授業で、広がりについて、どのように取り上げるかまた、そのことが中学校の授業にどのようにつながるか、小中それぞれの立場から、意見が交わされた。

今回の授業研究会には、児童が卒業後通うことになる中学校の理科教員も多数参加し協議に加わった。

今後、自分たちが担当する児童が、小学校の時にどのような授業を受け、どこまでの知識を得ているのか知る機会になったことや、CST 教員が大切にすべき視点について、授業展開や生徒の成果物から評価し考えを伝える機会が持てたことは、本会の活動としても有意義であった。

4. 今後に向けて

当初の計画では、専門家を講師に招き研修会を行い、その知識をもって児童生徒に興味・関心を持たせ積極的に実験に取り組む授業展開の実践を目的にしていたが、研修ができないながらも、CST 教員による授業展開を考える機会や、地域の小中連携に関わって授業研究会を開き、単元で大切にすべき点等について、CST 教員の日ごろの研修・実践から得た知識や見解を、参加教員に伝えられたことは、今後の研修会の新たな形になると考えている。

今回の研究授業では、堆積モデルの実験装置の有無によって、中学校につながる授業ができない点が課題として残った。今後、備品として積極的に購入を勧めるだけでなく、求めている気づきを実現できる、安価で容易に準備できる代替の実験装置の開発にも努め、広めていく必要を感じた。

今後も、専門家から知識を得て、その知識を目の前の児童生徒の授業展開に落とし込み、理科の見方、考え方を働かせる教材や実験を準備し、思考力、判断力、表現力等を育成する理科の授業が誰にでもできるよう、ブロック別や、県全体での取り組みを進めていきたい。（渡辺 幸寛・糸乗 前）

1 共同研究事業

30) 教科横断的な学びを通した言語能力の育成

－小学校国語科「書くこと」で学んだ知識を使う授業実践－

1. 事業名および担当者

事業名は、「教科横断的な学びを通した言語能力の育成－小学校国語科『書くこと』で学んだ知識を使う授業実践－」である。担当者は以下の通りである。

学部教員：山本はるか 連携先担当者：中村百合（栗東市立治田小学校教諭）

2. 事業の目的

これからの時代に求められる資質・能力を育むために、教科等を横断する学びを成り立たせることの重要性が謳われている。『小学校学習指導要領（平成29年告示）』では、「学校教育全体や各教科等の目標やねらいを明確にし、それらを実現するために必要な教育の内容を、教科等横断的な視点をもちつつ、学年相互の関連を図りながら、授業時数との関連において総合的に組織していくこと」の必要性が示されている。『滋賀の教育大綱（第4期滋賀県教育振興基本計画）』においても、「各学校において子どもの姿や地域の現状等に基づき、教科を越えて必要な学習内容を組み合わせて教育課程を編成するカリキュラム・マネジメントを充実し、学習効果の最大化」を図ることが求められている。

教科等横断的な学びを実現するための方策は、多方面から提案されている。例えば成田（2023）は、教科等を横断するためには、話題・題材、言語活動、知識・技能のいずれかにおいて単元間で接点が見出されること、書くことの過程（題材→収集→構成→記述→推敲）が他教科においても確保されること、学習時期を同期させることの必要性を指摘している。「言語活動の充実」や「知識」の活用が必要視されて以降、子どもに書くことを求める教育内容は増え続けている。「知識」を活用し、言葉を使う活動が充実していくためには、国語科で学習する内容を知識として認識し、その知識を使うことの実像や有効性が学習者の腑に落ちていくことが不可欠であると考え。では、どのような単元で、どのように接点を見出し、どのように複数の単元を実施することで、めざす子ども像の育成につながる教科等横断的な学びを生み出すことができるのだろうか。本事業では、国語科と社会科を事例に、教科横断的な単元構成の提案を行うことを目的とする。

3. 事業の概要

教科等を横断する学習の機会を明らかにするために、すべての教科・領域における単元と学校行事を各月ごとに整理した単元配列表を作成し、横断できる単元を探した。本報告書では、今年度実施した教科等横断的な学びの事例のうち、小学校第5学年の国語科と社会科の事例を取り上げる。扱った単元は、国語科「あなたは、どう考える」（光村図書）および社会科「これからの工業生産」（日本文教出版）である。いずれも11月前後での実施が想定されており、学習時期を同期させることのできる単元である。

国語科では、事実・感想・意見を区別し、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することが目的とされている。ただし、「主張－根拠－予想される反論－反論に対する考え－まとめ」という文章の構成は示されているものの、自分の考えを書く対象は授業者の判断で設定することが可能な単元である。また、自分の考えを書くためには、題材の設定や情報収集の機会が必要であるが、国語科として設定さ

れている授業時数だけでは心許ない現状である。社会科では、製造の工程、工場相互の協力関係、優れた技術などに着目して、工業生産に関わる人々の工夫や努力を捉え、日本の工業生産が抱える現在の課題とこれからの在り方を考える学習課題が設定されている。ただし、教科書上では学習者同士の会話の例示にとどまり、これからの工業生産の在り方についての意見表明の姿が捉えにくい。そこでこの二つの単元を横断することにより、工業生産を事例として十分な情報収集の時間を設け、両単元で学習した知識をもとに工業生産に関わる自分の意見をまとめるなかで、単元間での題材の接点が見出され、両単元での知識の習得と活用のあり方が提案できるのではないかと考えた。

今回は、学習者にとって魅力ある学習課題となるために、新聞の投書欄を使用し、自分たちの考えをまとめることの意味を実感できる場を設定した。両単元で学習した知識を教室側面に掲示し、授業中、活用できる知識と単元のゴールを随時確認できるよう工夫した。さらに文章の執筆および推敲に対する抵抗を減らすために、作文用紙上部に枠組み（主張－根拠－予想される反論－反論に対する考え－まとめ）を設けることでどこに何を書くべきなのを示し、行間に余白を設けることで文章を消さずとも推敲することのできる空間のあるワークシートを使用した。子どもたちは、出典を明記しながら、推敲を重ね、自らの成果物を作成していった。ワークシートを「練る練る説得プリント」と名付け、少人数グループによる話し合いの場を設けたことも、推敲に対する抵抗感を低減し、子どもたち同士の共有のしやすさを生んでいたと考えられる。社会科での学習内容を題材として、書くことへの負担感を減らす単元設計をすることで、教科を横断する単元を実現できたと考える。

4. 今後に向けて

各学校でカリキュラム・マネジメントを実施することが求められるなか、授業者が単元配列表をもとに、授業内容等を結び付けることが必要であるとの認識は広がりを見せている。ただしここで注意が必要なのは、授業者が意図的に教科を横断させるだけでなく、学習者が自らの学習をつなげることの魅力を実感することである。その発想がなければ、子どもたちが主体的な学習者として成長していくことはできないと考えられるためである。学習者が知識を理解し、納得しながら活用する場をいかに設けるか、子どもたちの経験がつながるためにどのような工夫ができるのか、さらなる検討が必要であるだろう。

（山本 はるか）



図1 「知識」およびゴールの共有

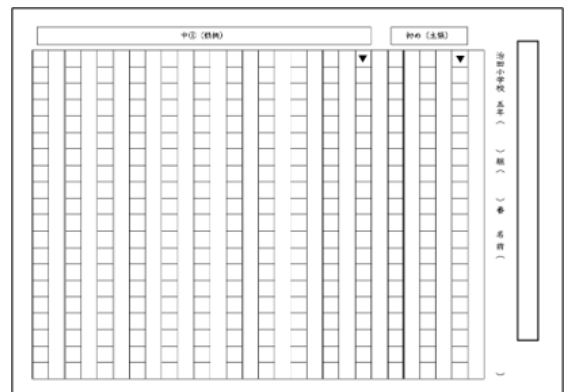


図2 「練る練る説得プリント」の書式



図3 教科書の出典を確認の様子

1 共同研究事業

31) 義務教育現場を対象とした【声を鍛えるトレーニング】の作成・実施 「フィジカルトレーニング編…耳を育てる」

1. 事業名および担当者

事業名は、義務教育現場を対象とした【声を鍛えるトレーニング】の作成・実施「フィジカルトレーニング編…耳を育てる」、担当者は、学部教員／渡邊史（音楽教育講座）、附属小学校／矢吹雄介（合唱部指導者）である。

2. 事業の目的

以下を目的として計画した

- 発達期にある児童生徒を対象として「表現ツール」としての「声」の構築、汎用の動機づけを行う。
- 児童生徒が「自身の声」と向き合うことで「自分自身」と客観的に対峙、「客観的視点」を獲得していくためのきっかけとなることを期待し、トレーニングを実施する。
- 「声表現」の具体的スキル構築に取り組むことで、「声」を構築するために必要な身体各部の働きを意識させることで心身の健やかさを保つための様々な「気づき」「自己確認」のきっかけを提供する。

人間同士の伝達手段として、「声」による音声発信は効果的かつ汎用性の高いものである。そして「声」を通じてコミュニケーションをとる過程で、お互いの感情、情動ほか、多くの「情報」が、言葉それ自体の「意味」以外に「印象」として交換されている。すなわちそれは「表現」である。しかし我が国においては、「声」を「表現手段」として認識すること、それ自体が一般化されていないのではないだろうか。そもそも、「声」を、「自分の目的や意志のもとにコントロールすることができるものだ」、という事実、それ自体に思い至っていないことが多いように思われるが、実際のところ、「声」は、身体各部分の用い方によって変化させることができる。文科省『学習指導要領』（2000）においても、子どもたちの「自己表現」能力の拡大、実現が重要視されているが、その具体的方法については詳らかでない。そこで、発達段階にある児童たちが、「自己表現手段」の一つとして「声」を意識的に用い、自発的に取り組み、試行錯誤しつつ「声」を精査工夫する「機会」を備えることが、本事業の目的である。

3. 事業の概要

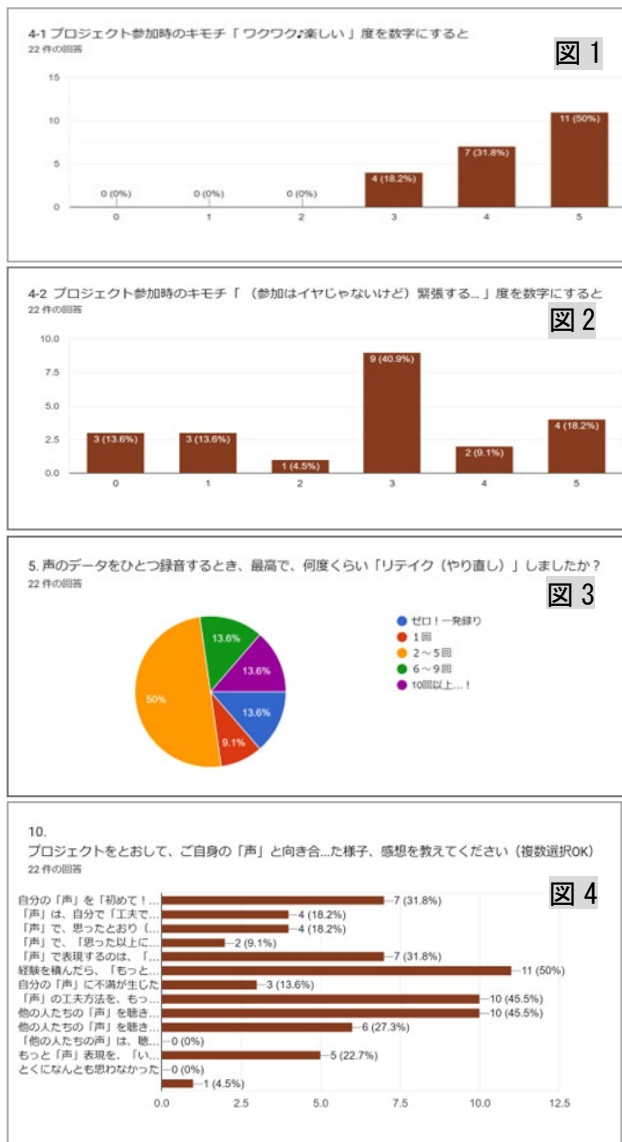
一昨年までに、数度にわたり同助成を得て取り組んだ「声」表現の気づき、および方法会得を目的とした研究の拡充企画として今年度も内容を想定しつつ、より段階を進め、「声」それ自体の「響き=音色（フォルマント）」の認識・知覚の能力を高めたいと計画した。本年度は、期間内に実地で指導にあたるのではなく、「滋賀大学 令和6年度リベラルアーツ・STEAM プロジェクト認定・助成事業」として採択された「オンライン合唱」を取り組み機会として設定し、参加を呼びかけた。この企画は教育学部だけでなく、広く社会一般にも参加者を募ったところ、4歳から高齢者まで幅広い年齢層の参入があった。小学生を主たる対象とした定めたものではなく、「声を提供する」という条件において誰もが等しく取り組んだ。

事業はスムーズに運営でき、かつ成果を上げられた。現在、参加者にフィードバックアンケートを取っている最中だが、いくつか現在の結果を紹介する。

… 以下、アンケート（収集中）より抜粋 …

■4-1 プロジェクト参加時のキモチ「ワクワク♪楽しい」度を数字にすると

このアンケート項目回答から、参加者たちが能動的に、かつ期待を持って参加していることがわかる。図1



注目すべきは、以下の3項目に対する回答である。

■4-2 プロジェクト参加時のキモチ「（参加はイヤじゃないけど）緊張する…」度を数字にすると

■5. 声のデータをひとつ録音するとき、最高で、何度くらい「リテイク（やり直し）」しましたか？

■10. プロジェクトをとおして、ご自身の「声」と向き合われた様子、感想を教えてください（複数選択OK）

これらの項目への回答 図2 図3 図4 から、参加者たちが「自分の声」に意識的に耳を傾け、さらに自身で「声」を精査工夫してプロジェクトに臨んだ様子がわかる。最終的に、参加者の多くが満足と達成感をもってプロジェクトを終了しており、さらに「次の機会への具体的工夫ヴィジョン」を明確に持っていることも読み取れた。このことについては、稿を改めて、論文にまとめる予定である。

4. 今後に向けて

今回、事業の参加者内訳は、結果として、附属小学校児童より附属中学校生徒の割合が高くなった。これは、事業の周知方法、および参加方法に拠るところが大きいと考える。「音声データ」の録音→提出という方法は、小学生が一人で取り組むにはいささか難しいのだろう。しかし筆者自身は、「声」への自意識的気づきや能動的工夫についての意思を、発達期の早い段階から持ったほうが良いと考えており、今後

も引き続き、「気づきの機会」を児童生徒たちに提供したいと切望している。次の機会には取り組み方法を見直し、より参加者の手間が簡便になるようにはかかっていきたい。また、ターゲットを附属中にも広げ、「小→中」と学びを継続できる内容展開も模索していく必要がある。

附属小合唱団は毎年「NHK 全国学校音楽コンクール」に取り組んでおり、その「課題曲」を教育学部の【合唱】講義でも取り上げて歌唱している。今年度も『かわただけだよ ヘンじゃない』を歌唱、録音し、附属小とデータを共有した。オンライン合唱参加も含め、「同じ曲に取り組む」ことで、【合唱】履修生たちは附属小生に対して親しみと連帯感を抱いている。【合唱】履修生は2回生が中心であり、次年度、教育実習で附属小にお世話になる者も多い。このような機会の積み重ねが学部全体の連携に繋がることを期待し、この親密な協働環境を大いに活用して、さらに効果的な「声を育てる」メソッドを開発したい。これまでの研究を踏まえ、より良い教材、トレーニングコンテンツを教育現場に確実に提供していきたいと考えている。

(渡邊 史)

滋賀大学 令和6年度リベラルアーツ・STEAM
プロジェクト認定・助成事業 資料



1 共同研究事業

32) 石山っ子わくわく親子で畑体験隊

1. 事業名および担当者

事業名は、「石山っ子わくわく親子で畑体験隊」であり、担当者は次の通りである。

学部教員：森 太郎，久保加織，石川俊之

地域ボランティア：石橋克也，奥田由紀，尾崎保子

大津市石山公民館専門委員：清水琴野

2. 事業の目的

農作物の栽培や観察など実体験を重視して農と食の大切さを理解し、食の安全・安心について考えるような「食・農・環境教育」が求められている。しかし学校現場において、このニーズに対応できるプログラムの確立，対応できる教員の確保は不十分である。そこで、地域の住民と連携して、小学生の親子を対象に畑体験活動を実施し、「食・農・環境教育」の地域連携プログラムを開発する。さらに、教育学部の学生がスタッフとして主体的に参加し、教育現場において「食・農・環境教育」に対応できる人材を育成する。

3. 事業の概要

1) 活動の概要

本プロジェクトは、石山公民館・地域ボランティアスタッフ・滋賀大学教育学部の3者の共同企画である。公民館は参加者の募集業務，地域ボランティアスタッフが畑体験の具体的指導，滋賀大学教育学部教員および教育学部の学生が体験活動内容の計画立案，指導を行っている。本活動は、平成14年4月から始まり，3月に石山公民館を通じて石山および南郷学区の幼稚園，小学校の児童と保護者を対象に，「石山っ子わくわく親子で畑体験隊」への参加申込書を配布している。4月上旬から滋賀大学自然環境教育施設の農場にて，毎週水曜日の15:30～17:00まで食農体験活動を実施し，3月まで約38回の活動を行っている。本年度は，11家族34名が参加し，滋賀大学自然環境教育施設の農場での活動に加え，日常の管理，農場の収穫物を使った食体験活動や蚕の飼育など自宅での活動の様子について，コミュニケーションアプリLINEを用いて交流を行った。

2) 本年度の活動内容

本年度の月ごとの実施内容を以下に示す。

実施月	主な活動内容
4月	開始式，自己紹介，野菜の播種（トウモロコシ，キュウリ，エダマメ，プリンスメロン，ズッキーニなど），野菜の観察・スケッチ，タケノコ掘り
5月	花の播種（マリーゴールド，コキアなど），夏野菜（4月に播種した作物，トマト，ナスなど）の定植・管理（支柱立て，誘引，わき芽取り），サツマイモ挿苗，稲のモミ播種
6月	タマネギ・ニンニク収穫，梅の収穫・梅ジュース・梅干し作り，花の寄せ植え，蚕の飼育開始，ジャガイモ収穫，夏野菜の管理，収穫，田植え
7月	七夕工作，田んぼの生き物（ミジンコ，カブトエビなど）観察，夏野菜の管理・収穫（トマト，エダマメ，プリンスメロンなど），ポテトチップス試食，梅ジュース試飲
8月	夏休みであるが，当番制で畑の管理，水やりを実施
9月	秋冬野菜（ハクサイ，ブロッコリー，キャベツ，コールラビ，ロメインレタス，ニンジン，ダイコン，ミズナ，ハウレンソウ，カブなど）の播種

10月	秋冬野菜苗の定植，秋冬野菜の間引き・草取り，稲刈り・稲架がけ・脱穀，大学祭の出店準備（蚕繭のストラップ，ドライフラワーの花束，稲わら細工など）
11月	サツマイモ掘り，焼き芋，干し柿作り，どんぐり拾い，タマネギ定植，秋冬野菜の間引き・草取り・収穫，リース作り，米・梅干しの試食
12月	干し柿試食，餅つき，しめ縄作り，秋冬野菜収穫
1月	秋冬野菜収穫，七草粥作り・試食，箸づくり，紙漉き・しおり作り，野菜の浅漬け作り
2月	秋冬野菜収穫，紙漉き，豆まき，蚕繭で雛人形作り
3月	秋冬野菜収穫，漉いた紙で修了証づくり，ジャガイモ埋め込み，閉校式

本年度も年間を通して食・農・環境教育に関する活動を行うことができた（図1）。本年度は新たなプログラムとして，自ら飼育・栽培して生産した蚕繭・花・稲わらを使って工芸品（蚕繭のストラップ，ドライフラワーの花束，稲わら箸・ストロースターなど）を制作し，大学祭で販売した（図2）。本活動を学生や地域の方々に知ってもらうために大学祭に出店して活動を通した成果物を販売することを目的・ゴールとして設定したことにより，工芸品の制作活動に親子で主体的に取り組む姿が見られた。また，実際に自身で制作した工芸品について，大学祭を通してお客さんから反応をいただいたり，実際に購入していただいたりすることにより，達成感や成就感を得ている様子も見られた。このように，体験活動において目的・ゴールを明確に設定すること，社会と繋がって活動に対する反応をいただく場を設定することは，子供たちの活動に対する主体性や成就感・達成感の獲得に重要であると考えられた。



図1. 本年度の活動の様子



図2. 大学祭への出店・活動のPR

4. 今後に向けて

本事業は2002年にスタートし，大学・地域・家庭が連携して，本年度まで23年間継続して実施することができている。本事業は貴重な「食・農・環境教育」を行う場であり，今後も地域・家庭と連携して実施していきたいと考えている。また，例年多くの学生が主体的に本活動に参加しており（本年度は20名），将来教育現場で「食・農・環境教育」の体験活動をリードできる人材育成の場としての役割も担っている。今後も，地域の子供への教育，学生への教育の両面から，新しい活動プログラムの開発と実践を行っていききたい。

（森 太郎）

1 共同研究事業

1. 事業名および担当者

事業名は、「エージェンシーの発達を保障する小学校社会科教育の創造」である。甲賀市立水口小学校（早川和彦校長）の中川翔太教諭と学部教員は岸本実の共同研究である。

2. 事業の目的

学習者が学習の主体として、エージェンシー（責任のある主体性）を発揮するためには、自己の学習を自らアセスメントし、調整していくことが求められる。このように学習者を学習および学習アセスメントの主体として位置づける小学校社会科の授業を開発するにはどうすればよいか。この問いを解明することが本研究の目的である。

そこで、小学校 5 年生の社会科において、子どもたちが「見通し(Anticipation)－行動(Action)－振り返り(Reflection)」という AAR の自己調整学習サイクルを年間を通して自律的に進められる学習モデルを学年の初めに提示したうえで、農業および情報産業を取り扱う単元の教材・授業を開発し、子どもたちの自己調整学習を分析する。その分析により、子どもたちが学習アセスメントの主体となる単元振り返りシートを活用して、教師によるフィードバックや仲間同士の相互評価を手掛かりに、自らの学習の自己評価と自己調整をおこなう姿を明らかにする。また、教師自身もその授業を振り返り、さらなる授業改善へと向かうとともに、自己の教師としての成長を省察する。

3. 事業の概要

(1) 自己調整学習モデルのガイダンス

図1は、中川が学年を通して大切にする学び方のガイダンスで児童に示した AAR サイクル（いいねサイクル）の図である。社会科以外のすべての学習活動においても、このサイクルは重視されている。図2は、中川が児童に示した自己調整学習モデルである。

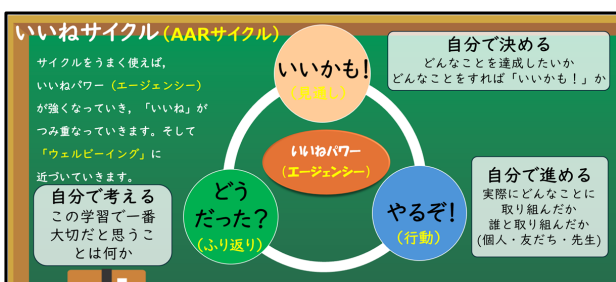


図1 ガイダンスで示したAARサイクル

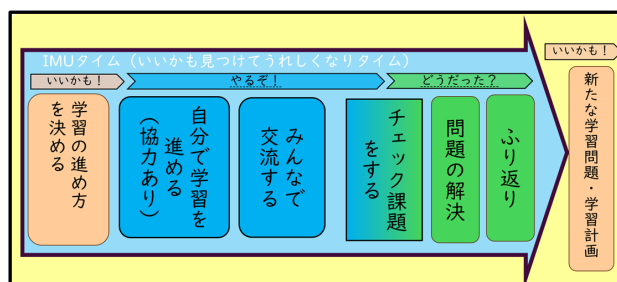


図2 児童に示した自己調整学習モデル

(2) 単元「米作りのさかんな地域 米作りを救え！水小サミット」の実践

2024年6月23日～7月17日に「米作りのさかんな地域」の小単元の授業実践を行った(図3)上記のモデルによるガイダンスを受けながら、子ども達は、一人ひとりの疑問や知りたいことをもとに学習問題を立て、学習問題の答えを予想し、どのような資料を使ってどのように調べていくのかの学習計画について話し合った。資料については、自分たちで見つけた資料に加え、教科書、資料集、地図帳、教

師から示された QR コード先の資料，教師作成プリントを用いて調べるようにした。また，ゲストティーチャーなどの人材を確保し，子ども達の自己調整を可能にする学習環境を準備した。第7時では，日本の農業が抱える問題を提示し，日本社会のウェルビーイングに向けて頑張っている人々の努力が分かる資料と，それなのに問題が解決していないことが分かる資料を提示することで，子ども達は新たな疑問や問題意識をもち，問題解決の学習を進めた

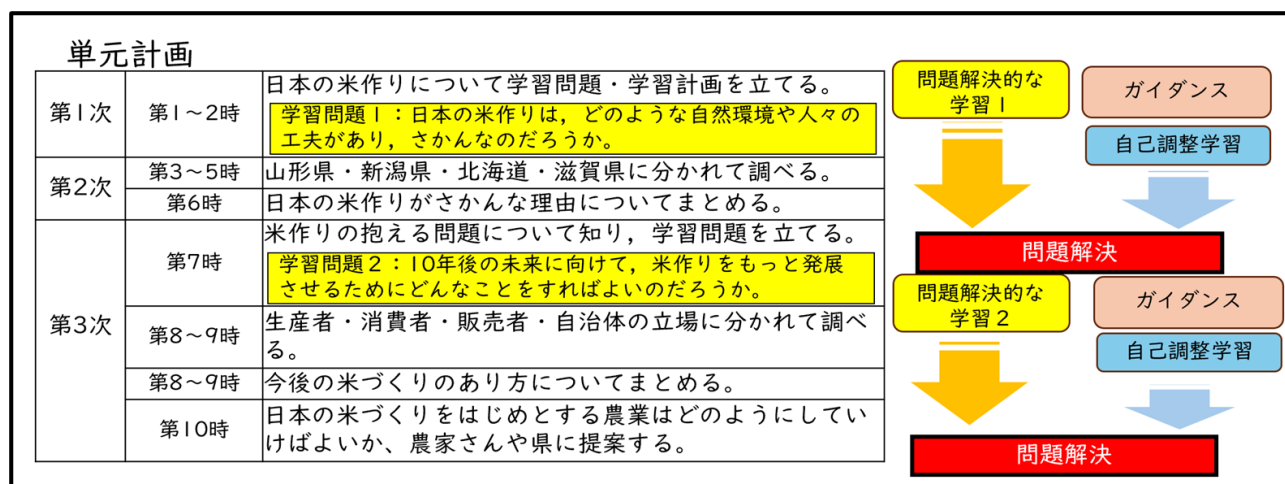


図3 単元「米作りのさかんな地域 米作りを救え！水小サミット」の指導計画と自己調整学習

(3) 1枚ポートフォリオによる振り返りと教師からと学習者相互のフィードバック

子どもが自ら振り返り，原因帰属をして次の学習へ適用することができるよう振り返りシートを作成した。「見通し」「行動」「振り返り」の各フェーズにおいて記録し，学習をメタ認知することができるよう意図したものである。OPPA（One Page Portfolio Assessment）の要素を取り入れ，単元の学びを1枚のシートで確認できるようにした。振り返りを毎時間行い，振り返りシートに記録を残し，子どもの振り返りにおいてカギとなる記述に教師が線を引いたりコメントをしたりしてフィードバックを行い，原因帰属と適用を促し，子どもが自己調整学習を進められるよう配慮した。また，一人一台端末を活用して協働的に振り返り，ピア・フィードバックを促した。学習アプリ「オクリンク」の機能を使って，作品の提出と学習カードの送受信をさせ，友達のふり返りを見て，学習カードに自分の考えを書き，送信し合う活動を行った。

(4) 情報単元と自己調整学習モデルの効果の検証

10月22日～11月20日に単元「情報社会に生きるわたしたち」の実践を行い，自己学習モデルが学習方略やエージェンシー尺度のどの因子に効果があるかを質問紙調査で検証するとともに，学級の子どもたちや抽出児童のパフォーマンス課題に対する作品の質の向上を分析することにより，このモデルの効果を検証した。ここでは省略するが，この成果を，東海大学で開催された教育目標・評価学会第35回大会（12月7・8日）の自由研究発表，中川・岸本「自己評価から学習を見通せる自己調整学習プロセスモデルの開発：小学校社会科の問題解決的な学習をもとに」と題して発表した。

4. 今後に向けて

教師による振り返りシートへのフィードバックを受けて多くの児童は自己調整学習に関わる学習方略を身につけたが，子ども相互のピア・フィードバックをさらに充実させる必要がある。

(岸本 実)

1 共同研究事業

34) 創発学級をつくる教師の指導力を向上する OJT 研修

1. 事業名および担当者

事業名は「創発学級をつくる教師の指導力を向上する OJT 研修」である。近江八幡市岡山小学校（野瀬準子校長）の尾賀紀子教諭と学部教員の岸本実の共同研究である。

2. 事業の目的

子どもが主体となって学級をつくるような学級（創発学級）を経営していくための教師の指導力を、学校運営、学年経営と連携した OJT により、キャリアステージに応じて、向上する方法と組織体制を明らかにすることが、本研究の目的である。教務主任および OJT 推進リーダーとして、学年主任会と G-OJT を組織し、リサーチとリフレクションを加えた PDCA サイクルを確実に展開し、各学年の集団作りの発達をふまえた学年目標、学級目標と関連付けた、学校行事や各学年の特別活動の実践とその振り返りを行う。特に、そのなかでの学級集団の発達と教師の指導力の向上についてのアセスメントを行う。

3. 事業の概要

（1）創発学級と学級力向上プロジェクト

蘭千壽（2016）「創発学級を導く学級経営の方法の開発」（千葉大学研究紀要 64 巻）によれば、「創発学級」は、「生徒主導で、活動的な学級集団である。生徒たちは、主体的で自律的、行動的であり、いろいろな活動に対して積極的に取り組む学級」である。そして創発学級は、「生徒が中心となってイベントに向けて取組み、生徒同士が協力して自主的に活動していく」という特徴がある。また、「安心学級（教師リーダーシップ型学級）」は、「教師がアイデアをぶつける、イベントなどを仕組むことが多く、教師がリーダーシップをとりながら生徒を引っ張っていく。生徒たちの活動は、教師のもとで活発であり、協力的である」という学級である。従来の学級経営は教師リーダーシップ型を理想としてきたが、現代社会ではより創造的で自律した人間が求められ、現代の教育においても、生徒による自主的な集団活動が求められているため、創発学級が求められていると蘭は主張する。

本研究では、学校においては学級経営の経験の浅い若手教員も多いことから、まず教師リーダーシップ型を目指しつつ、さらなる発展として創発学級をめざすこととした。教師のリーダーシップのもと、子どもたち自身が学級づくりの主体となり学級の質を高めることを目的とした教育プログラムを、田中博之編著（2013）『学級力向上プロジェクト：「こんなクラスにしたい!」を子どもが実現する方法』（金子書房）は、「学級力」は目標達成力、対話創造力、協調維持力、安心実現力、規律遵守力の5つの力から構成される「学級力向上プロジェクト」を提唱している。本研究では、子どもの主体性や協働性を育む学級づくりにおける課題解決に役立つと考え、学級力アンケートを活用することとした。

（2）リサーチとリフレクションを加えた PDCA サイクル

学校の教育実践、学校組織やカリキュラムの改善を図るために PDCA サイクルが位置づけられている。本研究では、この4つのプロセスに、次のようにリサーチとリフレクションのプロセスを加える7つのサイクルとした①状況把握のためのリサーチ（RS）：状況と実態把握のために質問紙調査や観察などの質的な調査を行う。②計画（P）を行う。③計画について学校全体や学年等で協働的に振り返るリ

フレクション (RF) 。④実践 (D) 。⑤実践後の学級の状況把握のためのリサーチ (RS) と実践のリフレクション (RS/RF) 。⑥点検・評価 (C) 。⑦改善 (A) 。PDCA サイクルに①のリサーチを加えたものを R-PDCA と呼ばれている。本研究ではさらに、③と⑤のリサーチとリフレクションを加えて7つのプロセスとしたので、R-PDCA プラスと呼ぶ。⑥の check は広い意味で振り返りであるが、実践をふまえて②の計画自体を振り返り評価するプロセスであり、④の実践そのものの状況をリサーチし、それをふまえて状況の中でリフレクションするプロセスとして⑤を区別した。このように従来の PDCA サイクルをメインサイクルとして進めるのに際して、状況の中できめ細かにリサーチとリフレクションをサブプロセスとして加えるところにこの R-PDCA プラスの特徴がある。

(3) 学年主任会と G-OJT

R-PDCA プラスのサイクルを意識して尾賀は教務主任として学年主任会を組織した。これにより職員会議の議題整理に終始しがちな学年主任会を学校・学年・学級の子どもたちの状況のリサーチとリフレクションをふまえた学校や学年経営を推進する組織へと改善させた。今年度の学校経営管理計画に盛り込まれた「集団づくり」の充実に関して、①昨年度までの子どもたちの状況をリサーチし、②学級経営案を作成した。特に、その様式を、集団づくりの年間見通しや定期的な振り返りの記録、改善策を記入できるものにバージョンアップを行った。さらに、③各学級で作成された学年経営案を学校単位、学年で協働的に振り返り、方向性を共有し、不足を補い合ったうえで、④学級経営の実践を進めた。⑤実践を進める中で、質問紙調査や観察による状況把握と振り返りを行った。⑥夏休みにこれまでのプロセスを点検し、⑦2学期の学級経営案へと改善を行った。以上のプロセスを通じて、若手教員や中堅教員の学級経営力を向上させる手立てとしてメンター教員とメンティー教員との4ペアからなる G-OJT を組織した。メンター教員とメンティー教員は、互いの授業を見学し、学級経営にかかわる困りごとを気軽に相談し合えるようにし、互いに切磋琢磨できるようにした。

(4) 協働的な支援による学級の発展と教師の学級経営力の向上

G-OJT のひとつのペアである4年の若手のA教員が中堅のB教員の協働的な支援を受けながら、学級を発展させ、学級経営力を向上させた経験について簡潔にまとめる。A教員は昨年度の経験を生かし、まず教師リーダーシップ型の学級を目指した。話を聞くことが難しいといった基本的な学習規律の確立が未熟な子どもたちの様子を把握し(①)、友だちの意見を最後まで聞き、意見を受け止めた上で自分の意見を言うミニディベートを朝学習で行うことを計画した(②)。司会の子どもや議題を実践前に振り返り(③)、継続して実践(④)、実践後に子どもたちの様子を観察し(⑤)、ミニディベートの計画を振り返り(⑥)、その後の学級経営の改善に向けた取組を検討する(⑦)というように R-PDCA プラスを展開した。夏休みに実施した学級経営の研修では、「2学期は課題をどう改善するかを子どもたち主体で考え、よりよく過ごすにはどうしたらいいか進めていきたいと思う。2学期は子ども主体でたくさんチャレンジしようと思う」と振り返っている。運動会に向けての実践では、B教員から子どもたちの実行委員会のことを聞き、B教員に相談に乗ってもらいながら、自分のクラスでも実践した。その結果「先生と話をするとやる気になる」「先生はクラスの子どもたちのことが大好きだと、わたしは感じる」という質問に、86%の子が肯定的に答え、学級力アンケートでも向上が見られた。

4. 今後に向けて

R-PDCA プラスにより G-OJT の質が改善し、それを支える学年主任会の組織の改善が見られた。しかしながらこれは学校の教育実践の改善の1歩にすぎない。どの学年や教師においてもこのような状況把握とリフレクションを組み込めるように発展させることが今後の課題である。

(岸本 実)

1 共同研究事業

35) 話し合いを進める資質能力の系統表を軸とした校内研修とカリキュラム・マネジメント

1. 事業名および担当者

事業名は、「話し合いを進める資質能力の系統表を軸とした校内研修とカリキュラム・マネジメント」で、甲賀市立希望が丘小学校（村地昭彦校長）の瀬戸山茜教諭と学部教員の岸本実の共同研究である。

2. 事業の目的

話し合いを進める資質能力の系統表を軸とした校内研究の成果を日常化し、カリキュラム・マネジメントに活用する組織と方法について明らかにすることが本研究の目的である。そこで、話し合いを進める資質能力の系統表に沿った授業を各学年で開発していく校内研究を日常化し、カリキュラム・マネジメントに活用するため、次の4点に取り組んだ。①話し合いの資質能力系統表に沿った授業の振り返りシートを活用する授業開発、②そこで開発・実践された授業から学び合う校内研究の組織、③校内研究の学びを振り返り、教師が日常の教育実践に生かす AAR サイクルの確立、④これらの校内研究を軸としたカリキュラム・マネジメントの実施。

3. 事業の概要

(1) 「話し合い系統表」を組み込んだ校内研究シートと学習指導案によるリフレクション

瀬戸山は、校内研究授業に対する自身の記録を残し、振り返りを行う資料を蓄積できるよう校内研究シートを作成し全学年の授業研究で活用した。教員一人一人が AAR サイクルの思考を用いて省察を繰り返し、組織の PDCA サイクルを回すための原動力となるような参加を図った。このシートに「話し合い系統表」における目標と評価基準、そして、話し合いにおける児童の姿も追加した。これにより参観者がより熱心に児童を観察し、またループリックにより授業を省察することができた。

また、「話し合い系統表」を学習指導案に組み込み、研究の視点を授業者と参観者が明確に持てるようにした。学習指導案には教科のめあてとそれを実現するため校内研究での「話し合い系統表」からのめあてを組み込む。そしてめざす話し合い活動の具体的な姿を4段階で明記する。こうすることにより、参観教師も各グループの話し合いを同じ視点で評価することが可能となった。例えば4年算数の学習指導案では、次の4段階のループリックが示された。①話し合いに参加している、②共通点、相違点を整理している、③解答の導き方について話し合っている、④よりよい求め方について話し合っている。

さらに、関連する部会で学習中の話し合い活動を見取るためのリストが作成された。これを校内研究シートの裏面に印刷し、研究授業で活用した。リフレクションによって個々の教員の成長から部会等組織の成長へとつながるという気付きがあった。さらに校内研究通信を活用し、非常勤講師を含めコミュニティースクール等外部へも発信したことで、ICT 支援員や通訳担当者なども校内研究授業を参観し、共通認識を図り、一体的な組織づくりとなった。

(2) 「話し合い系統表」を軸に校内研究の視点を加味したカリキュラム・マネジメント

本校ではカリキュラム・マネジメントを学年会の中で年間3回行っている。しかし指導時期の確認、行事のチェック作業の機能しか果たさないような形骸化が進行している傾向もあった。そこで、このカ

リキュラム表に、校内研究の柱となっている「話し合い系統表」を組み込んだ。そして学年主任が中心となり、今学期の重点単元を設定した。系統表からどの能力をどの教材で強化するのかを学年会で相談して決定する。学年団での取り組みが多い中、主任会を活用して、重点単元の相談の話し合い、情報交換を含めた学び合いの場を設けた。このように系統表を組み込み、重点単位という「めあて」を設定することで、校内研究を通してカリキュラムのリフレクションに結び付けることができた。

（３）学習評価とカリキュラム・アセスメントをつなぐカリキュラム・マネジメント

以上の取組の特筆すべき特徴は、「話し合い系統表」を軸に、子どもたちの学習評価を行い、それをもとに授業改善する指導と評価の一体化を、こうした授業レベル・単元レベルの改善を、単元や教科等を横断するカリキュラム評価につなぐことで、カリキュラム・マネジメントを学習評価のエビデンスに基づくものへと発展させた点にある。そして、その連結の基軸となったのが「話し合い系統表」である。

現行の学習指導要領が資質能力ベースとなった際に、言語活動の重視から言語能力の重視への転換を受けて、「話し合い系統表」は、話し合い「能力」の目標と評価基準の系統表として開発されたものである。しかし、現在は、話し合い「活動」の系統表が強調される傾向に戻り、評価基準もこうした「活動」が見られるかどうかという基準となっている。もちろん、「能力」の発達は、「活動」なしには達成されることはないが、「活動」があれば必ず「能力」が発達するものでもない。授業改善の起点は学習活動の結果として目標とする「能力」が獲得されたかどうかのアセスメントでなければ、カリキュラム・アセスメントへと連結され、カリキュラム・マネジメントの起点として十分に機能しないのではないかと考えられる。

４．今後に向けて

「話し合い系統表」は、言語能力をすべての学習の基盤として教科横断的に身につけさせることを視野に入れつつ、「話し合い」を教育活動として重視していた経験を踏まえ、「話し合い」に焦点化して開発されたものである。他方で、今年度の「学ぶ力向上滋賀プラン」では「読み解く力」において「書く力」に重点をおく方向が示されている。「読み解く力」に加えて「書く力」という考え方もあると思われるが、ここでは「読み解く」における「解く」活動においては、書くことによって問題を解き、問題が解けなければ、可視化された書いた文章や式のどこが間違っているのかを再考して、解決に達することが重要であると考え。この提起を受けるならば、「話し合い系統表」を「話し合い、書き合う系統表」にして、「話す・聞く・読む・書く」という言語能力全体の系統表に発展させることも期待される。話している相手の意見を傾聴し、その要点をメモとして書き取りながら、話し合いを深める活動や、書いた文章や式を読み合い、その良さや不十分な点を話し合う活動を重視し、その活動を通して「話し合う能力」と「書き合う能力」をともに高める系統表を開発していくことが期待される。

また、この系統表に示された目標と評価基準に基づく学習評価を起点とした授業改善を校内研究で展開し、それらに基づいてカリキュラム・アセスメントを行い、カリキュラム・マネジメントを展開することを、さらに、学校評価と学校の教育活動の改善につなげていけるように構想を広げていくことも大切である。このためには、AAR サイクルにおいて学習評価をどのように位置付けるのか、また、AAR サイクルのような状況に応じた実践ごとのきめ細かなリフレクションと PDCA サイクルのような年間に数回というひとまとまりのリフレクションを組み合わせたリフレクションサイクルを、カリキュラム・マネジメントを軸に展開するという構想も重要となると考えられる。

（岸本 実）

2 石山プロジェクト

1. 事業名および担当者

事業名は、石山プロジェクトであり、担当者は次のとおりである。

教職大学院：青木 善治 大橋 宏星 田中 満

大津市立石山小学校：内藤 康司（校長） 大津市立石山幼稚園：赤井 加代子（園長）

2. 事業の目的

子どもたちの多様化した課題を抱える今日の学校状況から、新規採用教員といえども、即戦力として実践的指導力や教員としての専門性が強く求められるようになってきている。本学部では、平成 17 年度に「石山プロジェクト」を立ち上げ、以後大学近隣の公立小学校と公立幼稚園の協力を得て、学生を毎年、学校の教育活動に参加させる活動（スクールサポーター活動）に取り組んでいる。参加の学生は全て本人の自主参加である。この活動の目的は、学生が子どもや学校の実情を体験的に知るだけでなく、具体の場面における子どもの心情の理解や教師として求められる対応の仕方など、実践的な指導力を身に付けることや、子どもたちとふれあう経験を積む中で、定期的に熟練の教職経験者に相談し共に語り合うことで、教師としての対応力を高めることをねらいとしている。

3. 事業の概要

本事業に対して、当該校園のみならず省察会講師をお願いしている退職校園長からの評価は高い。その理由は、サポーターとして本事業に参加している学生の意識の高さと教師を目指している純粋な姿に、これからの教育を担う若者への期待を強く感じていただいているからである。昨年度は春学期 幼 9 名、小 24 名（内、R5 年度より継続 3 名含む）、秋学期 幼 8 名（内、春より継続 3 名含む）、小 31 名（内、春以前より継続 13 名含む）が参加、今年度は春学期 幼 5 名、小 21 名、秋学期 幼 5 名（内、春より継続 2 名含む）、小 29 名（内、春より継続 9 名含む）が参加となった。

①春秋の学期に合わせて参加希望を募る。年間に春秋で 30 時間の活動を目指す。

②学生個々の予定を勘案して学校園と相談のうえ各自の活動日時を決める。ほぼ週 1～2 日。

③春秋、各 2 回省察会 午後 4 時 30 分～約 1 時間 場所/大学、参加は自主参加

幼：9 月・2 月に報告会、場所/石山幼稚園 小：2 月に年間報告会、場所/石山小学校

④アドバイザー：幼稚園 1 名、元公立幼稚園長 小学校/退職女性校長会から毎回 2 名程度

4. 活動内容

○各教科等で基礎的な内容の習熟を図る指導補助 ○個別の指導補助 ○日常生活の指導補助

○各教科や総合的な学習の時間、遠足等の校外学習での引率補助

○生活単元学習（特別支援学級）における指導補助 ○発表会の練習や自由遊びにおける指導補助

○石山小学校創立 150 周年記念「石山祭」ブース出展

5. 定例省察会の開催

春秋各 2 回、幼稚園と小学校の校種別に、省察会を大学で開催。

省察会では、学生が当該月の学校園でのスクールサポート活動を振り返り、やり甲斐や感じたこと、

自信がついたこと、自らの成長を自覚できたこと、課題に思っていること、悩んだり、戸惑ったりしていること、子どもの言動等をどう理解すればいいか分からなかったこと、指導や教育に当たっておられる先生の意図など、悩みや疑問点を出し合い互いに意見を交流した。この省察会には、退職園長、女性校長会の協力を得て、学校園での経験豊かな熟練の元校舎長の先生方を外部講師として迎えた。先生方からは学生の提示した課題について明快な返答や励ましなどの指導助言を受けることで、学生自身が課題を明確にし、子どもたちへの対応改善に意欲を高める機会となった。

また幼稚園では、春学期の報告会において秋学期参加者を交えて行ったことで、秋学期参加者の活動の見通しが持て、活動の意欲付けにもつながった。

一方、小学校では省察会・報告会への参加が少数になっているという課題がある。今後、学生の自覚を促しながら、根本的な参加者増への対応が課題である。

6. 省察会、報告会で意見交流から

【小学校／学生】

- ・石山小の先生方の授業を見てたいへん勉強になりました。休み時間に遊ぶことを通して子どもとの関係を持てるということが分かりました。
- ・子どもたちに手を貸すということも大事ですが、子どもたちに任せる・待つということも大事であることに気づきました。その支援が本当に必要なのか、よく考えながら取り組むことの大切さを学びました。

【小学校／講師】

- ・皆さんの活動ぶりを実際に見せてもらいました。子どもと目線を合わせて一生懸命取り組んでいる姿が印象に残っています。自分のことをしっかりと見てくれる先生がいるということが子どもたちのモチベーションにつながります。子どもをそばで見えてきた経験は今後につながるはずです。

【幼稚園／学生】

- ・子どもの発達段階に合わせて準備物を工夫することや、子ども一人ひとりの様子を観察して個別の支援をすることなど、実際に保育補助に入ったことで先生方の配慮に気付くことができました。
- ・省察会において、講師の安倍先生から認めてあげることや褒めることなど関わり方をアドバイスしていただき、園児にどのような声掛けをすれば園児にとって有意義に遊ぶことができるのかが分かりました。

【幼稚園／講師】

- ・学生の皆さんの気付きや子どもを見る視点にいつも感心しています。実践を通して見えた課題を省察会で振り返り、次の実践に生かす石山PJの在り方は素晴らしいです。この経験をもとに、子どもたち一人一人の心に寄り添う教育を大切にする素敵な先生になってほしいと思います。



石山小学校省察会 (2025. 2. 7)



石山幼稚園省察会 (2024. 12. 18)

(文責 青木善治 大橋宏星 田中 満)

3 出前講義

この出前講義は、滋賀県内の学校等における研修や講演会に教育学部教員を講師として派遣する制度である。既に、教育学部教員は個別に県や市町教育委員会や各学校の依頼を受け、研修講師等の役割を遂行している。しかし、これらのネットワークが成立していない場合や新任教員の派遣の場合に限っては、本出前講義は有効なものであろう。

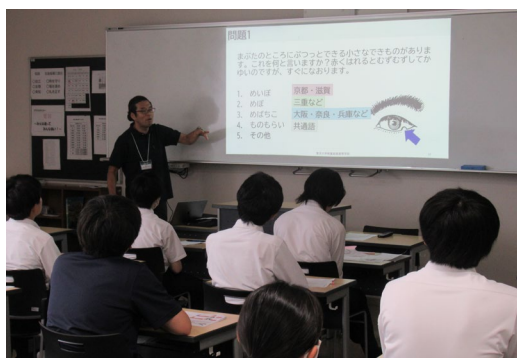
令和6年度の出前講義については、こども園および保育所7園(延べ14園)、小学校9校(延べ9校)、中学高等学校1校(延べ1校)、高等学校1校(延べ1校)、特別支援学校2校(延べ2校)、教育委員会3件(延べ3件)、市役所、図書館、の計25件(延べ32件)の実績があった。他に県内外からいくつかの依頼があったが、日程等の関係で成立しなかったケースがある。下記が今年度実施した出前講義である。

◆ 出前講義一覧

講 師	実施日	依頼機関	対 象	題 名
青木 善治 先生	4月 24日	米原市立米原小学校	教員(小学校)	作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア
青木 善治 先生	5月 9日	彦根市立亀山小学校	児童・教員(小学校)	作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア
青木 善治 先生	5月 9日	彦根市立高宮小学校	教員(小学校)	作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア
青木 善治 先生	5月 17日	彦根市立平田小学校	教員(小学校)	作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア
山田 淳子 先生	5月 20日	草津市立矢倉こども園	児童・教員(幼稚園)	運動遊び指導(サーキット遊び)
青木 善治 先生	6月 5日	豊郷町立愛里保育園	保育士	作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア
青木 善治 先生	6月 5日	豊郷町立豊郷幼稚園	教員(幼稚園)	作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア
山田 淳子 先生	6月 17日	草津市立老上こども園	児童・教員(幼稚園)	運動好きの子どもを育てる体育の授業づくり
大平 雅子 先生	6月 18日	光泉カトリック中学・高等学校	児童・生徒・教員 (中学校・高等学校)	睡眠とストレスの向き合い方
大平 雅子 先生	7月 4日	亀岡市教育委員会社会教育課	教員・保護者・一般市民	ストレスと上手に付き合う方法
松丸 真大 先生	7月 13日	東洋大学附属姫路高等学校	生徒(高等学校)	多様性から考える日本語学
大平 雅子 先生	7月 22日	近江八幡市立金田小学校	教員(小学校)・保護者	①ストレスと上手に付き合う方法 ②良質な睡眠とは
青木 善治 先生	7月 24日	大阪府泉南市立東小学校	教員(小学校)	作品をみる・語る、楽しく鑑賞する指導のアイデア
青木 善治 先生	7月 25日	草津市立山田こども園	教員(幼稚園)	作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア
岩井 憲一 先生	7月 30日	豊郷町教育委員会	教員(幼稚園、小学校、中学校)	教育のデジタル化がもたらすもの
青木 善治 先生	8月 1日	新潟県南魚沼市立藪神小学校	教員(小学校・中学校)	作品をみる・語る、楽しく鑑賞する指導のアイデア
山田 淳子 先生	8月 5日	草津市立山田こども園	児童・教員(幼稚園)	・子ども達と一緒に運動遊びをたのしもう ・運動遊びを進める上でのポイントを学ぼう
松島 明日香 先生	8月 21日	滋賀県立野洲養護学校	教員(特別支援学校)	・子どものケースから、発達・障害・生活など多面的な視点で捉え、子ども理解を深めるには。 ・子どものケースに対しての手立てやアプローチの方法について。
山田 淳子 先生	9月 9日	草津市立老上こども園	児童・教員(幼稚園)	運動好きの子どもを育てる体育の授業づくり
山田 淳子 先生	9月 18日	草津市立矢倉こども園	児童・教員(幼稚園)	運動遊び始動
山田 淳子 先生	10月 21日	草津市立常盤こども園	児童・教員(幼稚園)	運動あそび(縄跳び、ボールなどを使った遊び)

長岡 由記 先生	11月 12日	甲賀市教育委員会	教員(小学校・中学校)	・甲賀市の調査研究主題「子どもが主体となり、学びが深まる・広がる授業づくり～単元を貫く協働探究型課題を視点にして～」に関わった、協働的・探究的な授業づくりについて ・国語科の全般的なことに関して
白石 恵理子 先生	11月 22日	滋賀県立聾話学校	教員(幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校)	子どもたちの発達理解のために ～乳幼児期から青年期を通して～
山田 淳子 先生	12月 16日	草津市立老上こども園	児童・教員(幼稚園)	運動好きの子どもを育てる体育の授業づくり
山田 淳子 先生	12月 25日	草津市立山田こども園	児童・教員(幼稚園)	・子ども達と一緒に運動遊びをたのしもう ・運動遊びを進める上でのポイントを学ぼう
藤岡 達也 先生	1月 14日	大津市立堅田小学校	児童(小学校)	防災教育と安全教育
白石 恵理子 先生	1月15日 ～1月31日 オンデマンド配信	東大阪市子どもすこやか部	認可外保育施設 保育従事者	乳児期につけておきたい力、保育者としての関わり方
山田 淳子 先生	1月 20日	草津市立矢倉こども園	児童・教員(幼稚園)	3歳児：体幹を意識した動きの指導 4歳児：縄遊びの指導 5歳児：縄遊びの指導
井ノ口 史 先生	2月 1日	守山市立図書館	生徒・教員 (中学校・高等学校)、 保護者、市民一般	和歌で旅する近江国(第2回文学・歴史講座)
神 直人 先生	2月 14日	甲賀市立水口小学校	教員(小学校)	水口小学校自主研究発表会の指導助言
山田 淳子 先生	2月 19日	草津市立常盤こども園	児童(幼稚園)	運動あそび(縄跳び、ボールなどを使った遊び)
山田 淳子 先生	2月 21日	野洲市立さくらばさまこども園	児童・教員(幼稚園)	4歳児対象 運動遊び実技指導 保育教諭対象 運動遊びについての講義

◆ 出前講義の様子，利用された学校園からの感想（一部抜粋）



- ・“活動するために何かを教える”というのではなく、様々な遊びから体の動かし方や目的とした活動に繋がる遊びを指導していただけた。すぐに保育の中に取り入れ、継続して行っていきたい。
- ・写真がとても興味深いものだったので、とても分かりやすかったと感じた。受講後も子どもたちの印象に残っていたようだった。途中の休憩時間に、先生に直接質問に行く子どもがいて、関心の高さを感じた。
- ・生徒の状態に合わせて内容を作成していただいたので、反応が良く問いかけにも応じながら講演を聞かせていただけた。
- ・先生の柔軟で豊富なアイディア、子どもを惹きつける言葉がけから、多くのことを学ばせていただいた。
- ・講座中、講座終了後には参加者から質問があり、皆さんとても熱心に講義を受けておられた印象です。参加者のアンケートでは、「非常にわかりやすく充実した講義だった」「和歌についての本をまた読んでみたい」「和歌は遠い存在だったが、先生の解説で少し近づけた」などのお声をいただきました。

なお、多くの教育関係者の方々に本出前講義を利用していただくため、出前講義一覧を本学部ホームページにアップロードしている。次が令和6年度の出前講義一覧である。

【国語教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
近江国和歌	井ノ口 史 (いのぐち ふみ)	日本古代文学	生徒(中・高) 教員(中・高) 保護者・市民一般	古代から近世まで、それぞれの時代背景を踏まえつつ近江国に関連する和歌を紹介します。近江国(現在の滋賀県内)には、和歌に詠まれた地名が少なくありません。いかなる風景が描写されているのか、和歌を通じて近江国の魅力を再発見することをめざします。
書とその周辺	中村 史朗 (なかむら しろう)	書道	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	人はどのようにして「書之美」を自覚するようになったのでしょうか。王羲之や空海の筆跡はどこがそんなに上手いのでしょうか。生活の場において“手書き”の機会が減って、書という表現の領域は失われてしまうのでしょうか。書と周辺のさまざまな問題を取り上げます。講義と実習をあわせて実施することも可能です。
国語教育における学びの探究	長岡 由記 (ながおか ゆき)	国語教育学	教員(幼・小・中)	近年、さまざまな言語活動を取り入れた国語学習が行われています。国語の学習における学びの手応えは必ずしも得やすいものではなく、言語活動を取り入れた学習の成果と課題も明らかになりつつあります。そこで、演習を交えた講義を行い、国語教育における学びについて具体的な学習材や学習指導法を取り上げながら探究していきたいと思います。
唐詩を読もう	二宮 美那子 (にのみや みなこ)	中国古典文学	生徒(中・高) 教員(小・中・高) 市民一般	中国古典詩を代表するのが唐詩(唐代に作られた詩)です。唐詩には、古くから日本人に愛されてきた多くの素晴らしい作品があります。この講義では、作品の背景を丁寧に解説しながら、漢字一文字一文字にこめられた意味を大切に唐詩を読み解き、その豊かな世界をご紹介します。
方言を考える	松丸 真大 (まつまる まちお)	日本語学/方言学	児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	ひとくちに日本語といっても、その内実は人によって、または場面によって異なります。その中でも地域による言葉の違い(＝方言)は多くの人が興味を持つテーマです。この講義では日本語の方言をとりあげ、なぜどのように方言があるのかを考えていきます。この授業を通して、言葉について考えることの楽しさに気づいていただければ幸いです。

【社会教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
地理から考える物語の舞台	安藤 哲郎 (あんどう てつろう)	地理学	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・特) 市民一般	説話などの古典を読むと、いくつか地名が出てきます。こういった地名と物語の内容を手がかりとして地図を作りながら考えると、物語が作られた時代の人々が物語の舞台となった場所についてどのような認識を持っていたのか分かります。地図やパネルを使いながら、地理から物語の舞台について一緒に考えてみましょう。
史料を基礎とした日本史(前近代史)	宇佐見 隆之 (うさみ たかゆき)	日本史学／ 日本中世史	児童・生徒(小6以上) 教員(小・中・高)	歴史の記述は、すべて史料に基づいて行われています。このため、記述の背景にある史料の理解なしに理解できません。史料と教科書の記述を照らし合わせながら日本前近代史への理解を深めましょう。
古代ローマ史にみる曖昧な「史実」	大清水 裕 (おおしみず ゆたか)	(西洋史／ 古代ローマ史	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	歴史学は、様々な史資料を用いて過去の社会を再構成しようとする学問です。しかし、そこで用いる史資料が互いに矛盾していたり、あるいは荒唐無稽だったりすることは少なくありません。本講義では、古代ローマ史の中から有名な事件を取り上げ、人口に膾炙している「史実」の曖昧さと、「史実」を確定しようとする歴史学の営みをご紹介します。
論理学初歩	齋藤 浩文 (さいとう ひろふみ)	哲学	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	論理学への入門として、以下の2つのいずれか、または、両方について講義します。 (1) 形式論理学の初歩について紹介しながら、論理とは何か、そして、論理的であるとはどういうことかを考えます。 (2) 非形式論理学を背景として成立したクリティカル・リーズニングについて、その基本の紹介と実践を目指した演習を行います。

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
滋賀の近代史	馬場 義弘 (ばんば よしひろ)	政治学／歴史学	市民一般	明治前期に滋賀県の県令(のちの県知事)を務めた松田道之(初代、明治4年11月～明治8年3月)、籠手田安定(二代、明治8年5月～明治17年7月)を中心に、近代国家の形成と滋賀県政について考えます。
社会調査に触れる	宮本 結佳 (みやもと ゆか)	社会学	市民一般	近年、パソコンを利用する機会が増え、表計算ソフトが身近になったこともあって様々な場面でアンケート(質問紙調査)を実施する機会が増えています。本講義ではアンケートをつくるとき、一体どのようなことを気をつけていけばいいのかについてご紹介します。
身近な事件や話題をもとに法・裁判の役割を考える	渡邊 暁彦 (わたなべ あきひこ)	法律学／ 日本国憲法	児童・生徒(小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	私たちも「裁判員」として裁判に関わる時代となりました。法や憲法、そして裁判に対する関心も高まっています。本講義では、最近の身近な事件や話題を取り上げ、実際の判決文なども活用しながら、日本国憲法や裁判についての理解を深めていきたいと考えています。

【数学教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
正多面体とその数理	篠原 雅史 (しのはら まさし)	離散幾何学	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・高・特) 保護者・市民一般	正多面体はプラトンの多面体として古くから知られていて、正四面体、正六面体(立方体)、正八面体、正十二面体、正二十面体の5種類があります。実際に正多面体を作ったり、展開したり、計算したりすることを通して、正多面体の対称性やその美しさを体感してもらうことを目標とします。
無限の考え方	神 直人 (じん なおんど)	解析学	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	私たちは小学校の頃から無限の考え方を利用しています。無限の考え方を利用すると多くのことが明らかになる一方で、無限のパラドックスというものも存在します。この無限の持つ二面を紹介することで算数・数学の面白さ、考えることの楽しさに気づいてもらえればいいと思います。
非線形現象の解析	鈴木 宏昌 (すずき ひろまさ)	解析学	生徒(高) 教員(中・高)	私たちの身の回りで見られる様々な非線形現象は、しばしば数理モデル方程式で表されます。本講義では、数理生物学における生物個体群のモデルや、化学反応のモデル方程式の解析を通じて、数学と自然科学との関わりの一面を紹介します。モデル方程式にもとづいた計算機シミュレーションも紹介する予定です。
算数・数学教育の理論と実際	高澤 茂樹 (たかさわ しげき)	数学教育学	教員(小・中)	算数・数学科の教授・学習過程について、理論的研究を教育実践にどのようにいかすかを検討する。特に、教師として子どもたちの数学的認識をどのように捉え、それを基にしてどのように指導するべきかについて考えたい。
江戸時代の数遊びから見る現代数学	長谷川 武博 (はせがわ たけひろ)	代数学	生徒(高) 教員(中・高)	江戸時代の和算家 吉田光由(みつよし)によって書かれた和算書「塵劫記(じんこうき)」に収録されている文字遊び・数遊びに「目付字(めつけじ)」、「継子立(ままだて)」などがあります。これらの遊びを紹介し、その背後に隠れている数学を考えます。具体的にはn進法や数列などが隠れています。
数学的ジレンマを使った対話による算数・数学科授業	渡邊 慶子 (わたなべ けいこ)	数学教育学	教員(小・中・高)	「算数・数学科の授業で先生と児童・生徒たちが如何にして対話をし、新たな知識を作り上げていくのか」について、具体的な教材(学習・指導の内容、具体的な問題)をもとに議論します。対話型授業の構造と展開を探究した上で、「話し合い」を取り入れた授業における教師の役割についても議論したいと思います。

【理科教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
細胞をつくっている物質・脂質	糸 乗 前 (いとのり さき)	生化学	生徒(中・高)	生物を形作っている細胞は脂質でおおわれた袋で、その外側には特有の成分が含まれています。その成分を調べることは、細胞にとってあるいは生物にとって重要な情報を与えてくれます。本講義では「セラミド」などの、どこかで聞いたことのある脂質を含め、色々な生き物の脂質の話とどのように調べるかなどのお話をします。
太陽の科学	大山 真満 (おおやま まさみつ)	太陽物理学	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特)	太陽は、宇宙に浮かぶ平凡な星の一つに過ぎない。しかし、地球に直接的に影響を与え、その姿を詳細に観測できる唯一の恒星である。この太陽に焦点をあて、最新の画像や動画も用いながら、太陽の素顔を紹介する。
コミュニケーショントレーニング	加納 圭 (かのう けい)	科学コミュニケーション	生徒(中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	滋賀大学に通う大学生が授業に求めていること第1位(滋賀大キャリア通信:サンクス2013年1月7日号より)であった「コミュニケーション能力」の向上を目指したトレーニングプログラムです。科学の内容について「伝える・伝わる・分かち合う」ができるようになります。
物性物理学入門	恒川 雅典 (つねかわ まさのり)	物理学／ 物性物理学	生徒(高) 教員(高)	「物性」といってもなじみが薄いかもしれませんが、実は「物性物理学」は素粒子・原子核・宇宙物理学と並ぶ分野の1つです。最新の科学技術を根拠から支えている物質科学の中でも物質の成り立ちや現象などを、量子力学や統計力学などの物理的な考え方・手法の立場から研究するのが「物性物理学」です。本講義では、身近な例をあげながら「物性物理学」についてお話します。
私たちの科学	徳田 陽明 (とくだ ようめい)	無機化学／ 物理化学	教員(小・中・高)	科学現象は私たちの身の回りにたくさんあります。この講座では、皆さんが不思議だなと感じる現象を題材にして、科学がそれをどのように説明するのかについてお話します(例えば、なぜ虹が見えるのか、スマホで電話ができる仕組み等)。この講座を通じて、科学が生活をいかに豊かにしてきたかについて学びます。
遺伝情報とは何か?	古橋 潔 (ふるはし きよし)	生物学	生徒(高)	生命科学は近年目覚ましい進歩を遂げていますが、DNAと遺伝子の違いはおわかりでしょうか?この講座では遺伝情報がどのようなもので、どのように使われているのかについて、身近な例を挙げて、しかし最先端の技術によって得られた知見も盛り込みながら説明します。

【音楽教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
オーボエ演奏法／ 木管アンサンブル	中根 庸介 (なかね ようすけ)	オーボエ／ 木管合奏	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	オーボエの経験者を対象に、基本的奏法を学び、練習曲集などを用いて音楽的な表現を学びます。木管を中心としたアンサンブル(木管四重奏、五重奏、ピアノと管楽の五重奏、六重奏、など)を通して、より高度な音楽作りを学びます。
楽しい音楽づくり	林 睦 (はやし むつみ)	音楽教育	教員(幼・小・中・高・特)	音楽づくり、創作のワークショップをします。教師向けのワークショップや講習会、児童・生徒向けの授業のデモンストレーションもします。楽器がなくても、ピアノが弾けなくても、おもしろい音楽を作る方法があります。楽しく音楽をつくり、子どもたちが自らの表現に目覚める瞬間と一緒に体験できたらと思います。
音による表現を めぐって	若林 千春 (わかばやし ちはる)	作曲／音楽理論	教員(中・高・特) 保護者・市民一般	お芝居の台詞に、その場に適した演技があるように、音楽にもそれぞれ適切な表現の方向付けがあります。「ここで音楽はどんな台詞を演じているの?」という問題を、一緒に考えてみましょう。楽譜に書かれていない「とても大切なこと」を見つけたり、簡単な音楽文法のおさらいや、創作の実践などを通して、音による表現を共に深めてゆく場を体験してみましょう。
本当の「声」と出会う ～ヴォイス トレーニング～	渡邊 史 (わたなべ あや)	声楽	児童・生徒(小4年～中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般 その他(企業社内研修、 マナー講座等)	人間の表現ツール、コミュニケーション手段として「声」は重要な役割を担っています。みなさんの「声」の可能性を見つめなおしてみませんか?発声ストレッチ、呼吸トレーニングを経て、身体を芯から使いながら「声」と向き合う時間です。歌に、そして朗読にも、ちょっとしたコツで生まれる大きな変化を楽しみにご参加ください。その「声」を用いた歌唱表現まで踏み込むことも可能です。歌唱、合唱等のブラッシュアップにも、機会をご活用ください。

【美術教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
入門アート ～ラクガキから アール・ブリュット まで～	藤田 昌宏 (ふじた まさひろ)	彫刻／現代美術	児童・生徒(小4年～・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) その他(福祉関連作業所など)	ラクガキを描くことから始めます。ラクガキを見せあいっこし、ラクガキの名作を鑑賞？し、そこから見えてくる表現の楽しさ・不思議さを感じてみてください。 そこからの展開は、「アールブリュット」「速写クロッキー」「エガオ絵」「目隠し彫刻」などなど、受講してくださる顔ぶれやリクエストでアレンジします。
探究心が芽生える 教科横断型 ハイブリッド鑑賞	馬淵 哲 (まぶち さとし)	絵画／美術科教育	児童・生徒(小・中・高) 教員(小・中・高) 保護者・市民一般	伝統的美術から現代の製品デザインまで、身近な美術品を比較したり、対話したりしながら鑑賞します。子どもの探究心の芽を育てる鑑賞学習のヒントになればと思います。総合的な学習やSTEAM教育等、教科横断的な探究的学習の導入例としても提案したいと思っています。
学びが深まる 「造形遊び」 (子供の主体的な 探究活動としての 図画工作)	村田 透 (むらた とおる)	美術科教育	児童(4～5歳児・小) 教員(幼・小)	「造形遊び」は、準備や後片付けが大変で、抵抗があると思いませんか？ 「造形遊び」で、子供は楽しく意欲的だけど、「遊びの中に学びはあるの？」と思いませんか？「個性的だよな」「いろいろあっていいよね」で、子供の「造形遊び」への評価を思考停止にしていますか？「造形遊び」には、表現の多様性(現象)と学びの深まり(探究)があります。 現場で明日から実践できる題材体験を通して、「造形遊び」の学び・楽しさ、題材開発、指導や支援の在り方について学びます。
グラフィックデザイン の世界	世ノ一 善生 (よのいち よしお)	グラフィックデザイン	生徒(中・高) 教員(小・中・高) 保護者・市民一般	グラフィックデザインでは、ポスターや新聞広告などの広告物、パッケージ、雑誌、書籍装丁など様々なものを対象としますが、これらの多くは大量生産されて消費されてゆきます。 しかしそのようなものだから、漫然と作られた価値の低いものという訳ではありません。ここでは図版資料を提示しながらその素晴らしさについてお話ししたいと思います。

【保健体育教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
①ストレスと上手に 付き合う方法 ②良質な睡眠とは	大平 雅子 (おおひら まさこ)	衛生学/健康科学	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	①誰もが聞いたことがあるストレスという言葉。その言葉の本来の意味を解説しながら、ストレスと「上手に付き合う」方法について様々な視点から考えていきます。 ②エビデンスに基づいて、良質な睡眠とは一体何かを考えていきます。
生理学の基礎に 基づいた効果的な 運動・トレーニング	松田 繁樹 (まつだ しげき)	体力科学/生理学	生徒(中・高) 教員(中・高) 市民一般	運動・トレーニングを行う際には、ヒトの生理的特徴や科学的知見に基づいた合理的なトレーニングをするべきです。本講義では、運動生理学の基礎を踏まえたうえで、効果的な運動・トレーニングについて考えていきます。
運動好きの 子どもを育てる 体育の授業づくり	山田 淳子 (やまだ じゅんこ)	体育科教育	児童(幼・小) 教員(幼・小)	教師も子どもも運動が大好きになれる体育科の授業づくりを、実技や講義を通して学んでいただければと思います。 体育科の授業づくりのヒントとなる事柄を紹介していきます。 子ども向けにも模擬授業を行い、子どもも教師もともに学ぶ場を提供したいと思っています。

【情報・技術教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
教育工学的手法を 用いた教育環境の 改善	岩井 憲一 (いらい けんいち)	認知科学／ 教育工学	生徒(中・高) 保護者	教育環境は、慢性的な人材・予算不足等の問題から、これまで以上に質の高い教員の採用や情報ネットワークの導入による資源の共有、および、新しい教育手法の検討が求められています。 本講座では、これまで行ってきた学習指導案の電子化や情報ネットワーク環境等のICT 導入事例を通じて教育環境の電子化について提案します。
一本の木から 椅子をつくる	岳野 公人 (たけの きみひと)	技術教育／ 環境教育	教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	森林環境の有効利用の観点から、伐採から製材、椅子作りのプロセスをすべて人間の手でおこなう方法を紹介します。 米国では、グリーンウッドワーキングといい、日本の木地師が山にこもって、器づくりをしていたころの技術と同様の伝統的な手法である。作業できる場所が確保できれば、実際の作業を体験するワークショップを開催することもできる。

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
宇宙の誕生と進化	穂積 俊輔 (ほづみ しゅんすけ)	天体物理学	市民一般	宇宙はビッグバンという大爆発から始まったとされています。では、なぜそのような大爆発があったことがわかったのでしょうか。さらに、「大爆発」とはガス爆発のようなものなのでしょうか。このような宇宙の誕生から始めて現在の私たちが見ている宇宙の姿を、人類の宇宙観の変遷とともに解説していきます。
動物の行動を真似るロボット	右田 正夫 (みぎた まさお)	認知科学／ ロボット工学	生徒(高)	外界からの情報に応じて、自ら適切な行動を選択できるロボットを総称して「自律ロボット」といいます。 自律ロボットが動作する環境はとても複雑ですが、さまざまな動物の行動様式を真似てロボットの行動をデザインすることでうまく対処できる場合があります。本講義では、そのような自律ロボットの研究事例を紹介します。
複雑系入門 ーフラクタルとは何だろうー	水上 善博 (みづかみ よしひろ)	コンピュータ シミュレーション	生徒(高)	海岸線や川の流れ、雲の形や木の枝ぶりなど、自然の造形には複雑な形をしているものが多く見られます。複雑な形をした図形の特徴を表す方法にフラクタルがあります。 本講義では、フラクタルという考え方を分かりやすく解説し、形の複雑さを知るための指標としてのフラクタル次元の求め方を学びます。

【家庭科教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
何をどう食べる？ ー自分のための食べ物、食べ方ー	久保 加織 (くぼ かおり)	食物学	教員(小・中・高・特) 市民一般	誰もがいつでも食べたいものを食べられる現在であるからこそ、どの年代の人も自分の健康のためには何をどれだけどのように食べるのがいいか、きちんと理解しておくことが大切です。 様々な情報と食品表示が氾濫する中で、自分のための食材選びと食べ方について考えます。(具体的にどのような点に重点をおくかは、対象者に応じて相談させていただきます。)
くつろぎの住まい	田中 宏子 (たなか ひろこ)	住居学	児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	住まいは、雨や風、暑さ・寒さや様々な過酷な自然現象から人々を守る役割があります。また、そこで暮らす人々がゆっくりと休養し、エネルギーを蓄えるなど、住まいは人々の心身の健康を維持する役割ももっています。これらの役割を果たすためにはどのような工夫が必要でしょうか、ともに考えてみたいと思います。
家族の機能	平松 紀代子 (ひらまつ きよこ)	家庭経営学	児童・生徒(幼・小・中・高) 教員(幼・小・中・高) 保護者・市民一般	家族の存在はどのような機能を果たしているだろうか。 社会で一番小さい組織(システム)である家族について、客観的に振り返り、時代、国、あるいは同じ時代に同じ地域に暮らしていても異なる家庭の文化にも目配りしつつ、それぞれの価値観の違いをふまえ、それぞれの価値観を尊重することの大切さについてお話しします。

【英語教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
イマージョン教育と英語学習	田中 佑美 (たなか ゆみ)	英語教育学	教員(小・中)	本講義では、イマージョン教育と英語学習、特に英語学習に対する動機づけについてお話しします。 イマージョン教育はカナダで始まった第二言語を使って理科や社会などの教科を指導するバイリンガル教育の一つです。 日本における英語によるイマージョン教育にも触れながら、英語を通して教科を学ぶことによる英語学習と英語学習に対する動機づけについてご紹介いたします。
英語の効果的な学習方法・英語の指導法	新本 庄悟 (にいもと しょうご)	英語教育学・ 英語科教育	生徒(中・高)・ 教員(中・高)	英語学習における効果的な学習法を実際に体験しながら、今後の英語学習の方向性を探ります。 また、中高の英語教員の方を対象に実践的な英語教授法を紹介します。
アメリカ小説を読む	林 直生 (はやし なお)	アメリカ文学／ アメリカ文化	市民一般	詩や小説などの文学作品は、それ自体が独立して存在するのではなく、作家が作品を執筆した当時またはそれ以前の時代の社会や文化と密接な関わりを持っています。 この講義では、主に 20 世紀前半のアメリカで書かれた小説を取り上げて、作品とその背景について見ていきます。

【学校教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
子どもたちの心の支援とマインドフルネス	芦谷 道子 (あしたに みちこ)	臨床心理学	教員(幼・小・中・高) 保護者・市民一般	マインドフルネスとは、「今この瞬間の経験に、価値判断を加えずに意図的に注意を向けること(Jon Kabat-Zinn)」と定義され、さまざまな感覚や感情を優しくあるがままに受け入れ、ゆるす態度を涵養します。プラクティスを続けると、集中力やパフォーマンス、幸福度の向上、抑うつなどの否定的感情の低下や脳機能の改善といった効果があることが、科学的に示唆されています。本講演では、マインドフルネスについてやさしく解説し、教育におけるマインドフルネスの導入についてご紹介します。簡単なプラクティスも体験していただきます。
教師－生徒関係の変容とこれから	太田 拓紀 (おおた ひろき)	教育社会学	教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	現在、教師と児童・生徒との関係性における危機が広く叫ばれています。では、過去の教師と生徒の関係は良好だったのでしょうか。そもそも、問題視されはじめるのは、いつ頃からでしょうか。この講義では、わが国における教師－生徒関係の歴史的变化を概観し、その上で、今後の望ましい関係性のあり方について考えてみたいと思います。
他者理解のコミュニケーション心理学	蔵永 瞳 (くらながひとみ)	社会心理学	教員(幼・小・特) 保護者・市民一般	人間は、他者とたくさんのコミュニケーションをとりながら生活する生物です。本講座では、対人コミュニケーションのメカニズムとつまずきのポイント、人間が持つコミュニケーション能力の基盤である「他者の気持ちを理解する」力について、心理学の観点からお話します。
比較教育学で教育を考える	児玉 奈々 (こだま なな)	比較教育学	教員(幼・小・中・高・特) 保護者・市民一般	比較教育学は、諸外国の教育事象を対象に教育と社会のつながりを考察する学問領域です。この講義では、現代の日本の学校で課題となっていることの諸外国における状況や各国の解決策を見ていきます。諸外国の教育事象の考察を通して、日本の学校の当たり前が海外の学校では当たり前ではないことに気づき、教育と社会のつながりを知り、さらには、人間にとって教育や学校はどんな意味を持つものなのか、教育や学校の本質について考えることを目指します。
『エミール』を読む～生きるための教育と大人の役割について	三輪 貴美枝 (みわ きみえ)	教育学・教育哲学	保護者	ルソーによって書かれた『エミール』は、人が教育をまさに「生きるために」必要とした時代のものであり、その思想は時代や文化の違いを越えて現代の私たちにも「生きること」の意味を考える材料を提供してくれます。それが書かれた時代状況等にも触れながら、“生きるための教育と大人の役割”について考えます。
キャリア教育の理解と推進	若松 養亮 (わかまつ ようすけ)	キャリア心理学	教員(幼・小・中・高・特)	進路指導や就職指導と混同されがちなキャリア教育について、その出自や必要性、中教審答申に示された内容について解説し、具体的な推進方法や運営上の課題について、これまでの実践例にふれながらお話しします。
子どもが「こころ」に気づく時	渡部 雅之 (わたなべ まさゆき)	発達心理学	教員(幼・小・特) 保護者・市民一般	幼い子どもたちは、自分自身の中にある「こころ」という存在を、十分に意識することができません。他の人間にも「こころ」があり、それが自分の「こころ」と同じ働きをしていることに気づくことで、他者への共感や理解が深まります。こうした「こころ」への気づきの発達過程についてお話しします。
育みたい学力に応じた評価課題づくり	山本 はるか (やまもと はるか)	教育方法学	教員(小・中・高)	子どもたちに育みたい学力をどのように考えるのか、その学力を見取る評価課題をどのように作るのかについて、ワークショップ形式で進めていきます。

【幼児教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
幼児期の遊びを豊かにする環境構成	山本 一成 (やまもと いっせい)	幼児教育学	生徒(高) 教員(幼・小)	幼児は遊びを通して様々なことを学んでいきます。そして、幼児が夢中になって遊ぶためには、子どもたちの遊びを可能にする環境が整えられている必要があります。この講座では、子どもの遊びの大切さや、遊びにかかわる環境の在り方について、理論と実践の両面から学んでいきます。

【障害児教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
ちよっと気になる子どもたちの発達と教育	窪田 知子 (くぼた ともこ)	特別支援教育	教員(幼・小) 保護者	私たちの身のまわりにいる“ちよっと気になる子どもたち(主に、発達障害の子どもたち)”のことをどう理解すればよいのか？家庭や学校でどのような関わりをすれば、彼らの健やかな育ちを支え励ますことができるのか？保護者とうまく連携するには…？などのテーマについて、一緒に考えてみたいと思います。

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
障害のある子の発達と教育	白石 恵理子 (しらいし えりこ)	障害心理／ 障害児教育	教員(幼・小・中・高・特) 保護者	主として知的障害や発達障害をもつ子どもたちの発達と教育について考えます。 (発達の時期等については、ご相談に応じます。)
支援の必要な子どもと教育	羽山 裕子 (はやま ゆうこ)	障害児教育	教員(小・中)	通常学校に在籍する支援の必要な子どもたちは、学校生活のどこにつまずきを抱えがちなのか、どのような支援が可能なのか、一緒に考えていきたいと思います。
「気になる」児童・生徒の発達の理解と支援	松島 明日香 (まつしま あすか)	障害児心理	教員(幼・小・中・特) 保護者	友達とトラブルになる、じっとしていられないなど、対人面や行動面において「気になる」児童・生徒の存在が注目されています。 その支援と対応には彼らの困難さを発達の的に理解していくことが重要です。本講義では、この時期の発達を通して「気になる」児童・生徒の困難さをどのように理解し、対応していけば良いのかについて考えます。

【環境教育関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
湖沼の生態系	石川 俊之 (いしかわ としゆき)	湖沼生態学	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	湖沼の水の中には一見すると何もないように見えます。 しかし、そこには目に見えない小さな生き物が活躍する実に豊かな世界があります。 琵琶湖を例に生物と生息環境の関係について考え、自然環境を大切にするためにできることを考えます。
食料生産と環境	森 太郎 (もり たろう)	園芸学/植物病理学	児童・生徒(幼・小・中・高・特) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	私たちの生活に欠かせない食料生産と環境との関係について、食料生産は環境にどのような影響を与えているのか？ 一方、食料生産は環境からどのような影響を受けているのか？ の観点から講義し、持続可能な食料生産について考えます。

【教職大学院担当教員関係分野】

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
教師の変容と省察を促す研修会の創造	青木 善治 (あおき よしはる)	教育方法学	教員(小・中)	「主体的・対話的で深い学び」の実現の上で不可欠な要因があります。それは、そもそも教師が一人ひとりの子どもの学びの姿をしっかりとらえることができればはじまりません。しかしながら、教師自身の見方や感じ方を一人でとらえ直すことはなかなか難しいことです。そこで、令和2年度まで新潟県内の小学校校長として研修による学校経営を行ってきた経験もいかし、私たち教師が生涯に渡って学び続け、変容し省察しやすい研修会を授業研究時の事後協議会を活用して行います。
コーチングを意識するだけで子どもが変わる〇〇の方法 ～子どもを伸ばす先生、ダメにする先生、その違いはここにあった！	青木 善治 (あおき よしはる)	教師教育	若手～中堅教員(小・中)	子どもを伸ばす先生、ダメにする先生、その違いはどこにあるのでしょうか。実は、コーチングを意識するだけで子どもが変わる様々な方法について、具体的に楽しみながら紹介します。令和2年度まで新潟県内の小学校校長として学校経営を行ってきた経験もいかして行います。
作品をみる・つくる、楽しく鑑賞する指導のアイデア	青木 善治 (あおき よしはる)	美術科教育	教員(幼・小・中)	新潟県立近代美術館勤務の経験もある講師が、「対話型鑑賞(朝鑑賞)」や「アートカード」や「造形遊び」に関する活動など、楽しく表したり、鑑賞したりする指導のアイデア満載な研修会を行います。
算数・数学科の授業づくり	大橋 宏星 (おおはし こうせい)	算数・数学教育	教員(小・中)	主体的・対話的で深い学びを目指した授業展開について、実際の授業や指導案を通して検討します。
幼児の健康と生活	奥田 援史 (おくた えんじ)	健康教育	教員(幼) 保護者	幼児の健康と生活の関連について概説します。 また、「幼児期運動指針」(文部科学省)を解説します。

講義題目	講 師	専 門	対 象	内 容
暮らしと消費と環境	岸田 蘭子 (きしだ らんこ)	家庭科教育	教員(小・中・高)	新学習指導要領でも重視されている「消費と環境」についての教材開発や授業実践についての解説を行います。受講者主体のワークショップ型の講座で、小・中・高対象ですが、学校種別でも合同型でも対応できます。
社会科の学力とパフォーマンス評価	岸本 実 (きしもとみのる)	社会科教育	教員(小・中・高)	社会科の思考・判断・表現の学力を身につけさせるために、パフォーマンス評価の指導と実践が求められています。授業の中の15～20分の中心活動、1時間そして1単元の授業など、生徒の思考・判断・表現のパフォーマンスをどのように指導し、評価すればよいのか、ワークショップ形式で考察します。
新しい時代が求める資質・能力を伸ばす教育課程・指導・評価	岸本 実 (きしもとみのる)	教育方法学	教員(小・中・高)	新しい学習指導要領により整理された、新しい時代が求める資質・能力を伸ばすためには、学校を基礎に教育課程を編成し、カリキュラムマネジメントを適切に実施していくことが求められています。また単元や授業において確実にその資質・能力を身につけさせる学習指導と評価の在り方が問われています。本講座では、学校、学年、教科など学習者の状況に合わせて、これらの問題を考察します。
国語科の授業づくり	北村 拓也 (きたむら たくや)	国語科教育	教員(小・中)	主体的・対話的で深い学びの実現を目指した国語科の授業づくりについて、実際の授業や指導案を通して検討します。
算数・数学科における統計の授業	詫摩 京未 (たくま きょうみ)	算数・数学教育／データサイエンス	児童・生徒(小・中) 教員(小・中)	算数・数学の教科書には、すでに収集されたきれいなデータが掲載されており、それらに基づいて整理・分析し、考察しながら、学習をすすめます。ここで学んだことを実際に活用するためには、子どもたちが自分でデータを収集するところから体験させる場面に授業に取り入れることは大切であると考えます。そこで、本講義では、与えられたデータではなく、実際に自分たちでデータを集めてみることから始める授業作りについて考えていきたいと思います。
体育授業における指導と評価の一体化	辻 延浩 (つじ のぶひろ)	体育科教育	教員(小・中・高)	子どもたちが学び合い育ち合う体育授業はどのように実現できるのか。いま教師に求められる考え方や指導性はどのようなものか、協同的な学びをどのようにデザインし、評価していけばよいのか等、学習集団づくりの理論と方法について考えていきましょう。
自然景観と自然災害／防災教育と学校安全	藤岡 達也 (ふじおか たつや)	科学教育／防災教育	児童・生徒(小・中・高) 教員(幼・小・中・高・特) 市民一般	本講義では、次の3つのテーマを取り扱っています。テーマの選択等は可能です。 ① 自然と人間との関わり(持続可能な社会とこれからの環境教育) ② 自然景観の形成・活用と自然災害(国立公園・ジオパークと近年発生した自然災害など自然の二面性について) ③ 防災教育と学校安全・学校危機管理(子供を事件・事故災害から守るために)
学校における人材育成	前田 利幸 (まえだ としゆき)	教師教育／学校経営	若手～中堅教員(小・中) 管理職(小・中)	今日、学校現場では教職員の多忙化が深刻な課題であり、働き方改革の推進が求められています。さらに滋賀県の教職員の年齢構成からも学校現場での人材育成は喫緊の課題となっています。このような状況下、多忙な学校現場においていかに効率よく計画的に人材育成を進めるのか、また教育課題解決に向けていかに学校組織力を向上させていくのか、校長のリーダーシップとマネジメント力が求められます。教員の各ステージに合わせて、明るく元気に学び続ける教職員を応援できるよう自身の経験を活かして研修を行います。
科学教育における話し合い活動 -「滝をのぼる水滴」を事例として-	山岡 武邦 (やまおか たけくに)	データサイエンス	児童・生徒(小・中・高) 教員・市民一般	本講義では、科学教育における話し合い活動に焦点化し、深い学びの実現を目指す授業づくりについて検討します。具体的には、錯視に関する実験を行い、話し合い活動を取り入れながら自然現象を理解し、そこで得たデータを解釈していくプロセスを体験します。
障害のある子どもの支援	山川 直孝 (やまかわ なおたか)	特別支援教育	教員(幼・小・中・高・特)	勉強が苦手だったり、集団生活になじめなかったりする子どもが少なくありません。障害の状態やそれに伴う学びにくさは多様かつ個人差が大きく、個別最適化した学びが求められます。心理アセスメントの紹介や気になる行動をする理由、子どもの長所を生かした対応などについて、自立と社会参加を見据えながら考えていきます。

4 教職探究講座

教職探究講座は、滋賀県内の高校生を対象として、教員の仕事や子どもの発達特徴を理解し、教職への理解を深めてもらうことを通じて、教員を目指す優秀な生徒を多く輩出することを目的としている。こうした観点に立って、今年度は文部科学省の補助事業「地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部機能強化事業」の1つとして対象校を2つの高等学校から10校に拡大し教職を志す1，2年生の生徒，105名を迎えて12月に2日間にわたって開催した。5つの講義はセンター教員の教育社会学，臨床心理学，情報教育学の専門家及び現場を経験している実務家教員によって行われた。高校では学ばない多方面からの教師論が展開され，本学に在籍しているOB・OGも25名が参加して学生目線での情報提供を行った。受講後のアンケート調査では，回答した高校生の多くが「自分の進路を考えるうえで，参考になった」「教職について興味が深まった」と答えている。

【参加した生徒の感想より】

（2年生）2日間の講座に参加することができ，非常に進路選択等の参考になり，勉強になりました。教育学部では，どのようなことを学ぶことができるのか，ということも体験でき，とても貴重な時間でした。「教職をよく知っているがゆえに，誤解が生じやすい」というお話を聞き，自分が先生方の授業の背景をあまり具体的に想像したことがない，と気づきました。今回の教職探究講座で，大学に入ってさらに学びを深めてみたいと思うものが見つかりました。教職探究講座をひらいてくださり，ありがとうございました。

（2年生）今回の「教職探究講座」では教員を志す者として求められることや，これからの教育のあり方についてを詳しく，多角的な視点から解説してくださいました。特に私にとって印象に残っているのは教師にとって「学び続ける力」が求められているということ。また，教育とICTの結びつきについての講義です。私たち学生の前に立って何気ない顔で授業をしている先生方が，実は並々ならぬ努力や苦勞をしていると知り，普段の授業からその背後にあるものについて考えてみるのも面白そうだと思います。二日目の5講目にあった，先輩たちとの交流会では実際の学生から聞くということもあって，具体的な入学後の生活をイメージすることができました。二日間，ありがとうございました。

（1年生）教師の実際についてのお話を聞き，沢山の準備をしている先生方のおかげでしっかりと理解し，関心を持てるのだと学びました。また，担任の先生などに，どのような意図で授業をしているのか，どのような準備をしているのかを質問してみたいと思いました。心理学についてのお話は，初めて学ぶことばかりでとても面白く，子供がより良い環境で成長していくためにWell-beingが大切であると学べたので，まず自分がWell-beingであるように前向きな思考で過ごしていきたいと思いました。貴重なお話を聞いたり，大学生の方に直接質問ができたりしたことによって，教職に対する興味がより深めることができました。

【令和6年度教育実践総合センター連携講座「教職探究講座」（高大連携）】

- 1 目的 教職を志望する滋賀県内の高校生を対象に、教職に対する理解を深めると共に進路（教職）に対する視野を広げ、モチベーションを高めることを目的とする。併せて、地域が求める「令和の『滋賀型』学校教育」人材を養成するスタートアップ講座とする。
- 2 対象 滋賀県内高等学校の1・2年生
- 3 主催 滋賀大学教育学部（附属教育実践総合センター）
- 4 期日 令和6年12月18日（水）・19日（木）
- 5 会場 滋賀大学大津キャンパス 中講義室
（プログラム）

（1）1日目：12月18日（水）

- ◆ 開講式（14:00～14:05）
挨拶：学部長 久保 加織 教授
- ◆ 第1講（14:10～14:55）
講義名：これからの教師に求められる資質と能力
講師：太田 拓紀 教授
 - 教師の資質・能力
 - ・教師の仕事の実際
 - ・教師に求められる資質・能力
 - 教師の資質能力を高めるために
 - ・教師の力量形成と大学での学び
 - ・「学び続ける教師」とは
- ◆ 第2講（15:00～15:45）
講義名：子どもたちのWell-beingを育む教師の役割
講師：芦谷 道子 教授
 - 現代の子どもたちが抱える心の問題
 - Well-beingに満ちた学校環境を育む
- ◆ 第3講（15:50～16:35）
講義名：教職の魅力
講師：田中 満 准教授
 - 「教職の魅力を考える」
 - ・学校を取り巻く状況
 - ・今の学校
 - ・学校に求められるもの
 - ・教員に求められるもの
 - ・教職を志す上で大切なこと

（2）2日目：12月19日（木）

- ◆ 第4講（14:00～14:45）
講義名：授業とICT
講師：岩井 憲一 准教授
 - 教育におけるICT活用とは
 - ・ICT活用の重要性和効果
 - ・教育の情報化にむけて
 - ・ICT活用の取り組み
- ◆ 第5講（14:50～15:35）
講義名：教育学部で学ぶとは
講師：大橋 宏星 准教授
 - 教育学部とは
 - ・各学校種の免許取得方法
 - ・他学部との違い（教育学部の独自性）
 - ・教育学部の可能性（就職）
 - 先輩に学ぶ：在学生との懇談交流会
 - ・「私が滋賀大で学んでいること、感じていること」（先輩からの話）
 - ・「先輩への質問と応答」（高校生からの質問）
- ◆ 教育学部における入試改革と地域教員養成プログラムについて
講師：久保 加織 教授
- ◆ 閉講式（15:40～15:50）
司会：センター長 神 直人 教授
 - 修了証書授与（生徒代表）
 - 挨拶 学部長 久保 加織 教授
- ◆ 在学生との懇談交流会（16:00～16:30）



開講式 久保加織学部長の挨拶



在学生との懇談交流会①



在学生との懇談交流会②

（神 直人）

5 教育臨床研究

1. 教育相談領域

2007年から継続して実施している非公開での教育相談業務を継続した。相談場所としては主に大学内にあるカウンセリング室と研究室（芦谷研究室）を用いた。今年度は、教員からの相談やコンサルテーションの依頼が3件、スーパービジョンの依頼が8件（1件につき、必要に応じて複数回実施）、本人や保護者からの教育相談依頼が3件、学生からの相談が3件あり、相談延べ件数（2月末までの予定を含む）は82件であった。スーパービジョンとしては、教員になった卒業生を対象としたもの、自治体や病院、大学心理相談室の心理師を対象としたものを実施している。グループを対象とした自治体への支援として、「野洲市発達支援センター」での指導員を対象としたスーパービジョン研修も行った。

今年度も新型コロナウイルス感染拡大後に急増している自死や不登校、登校渋り、登校不安、抑うつといった問題が子どもたちに多く見られ、その対策に伴う相談が多かった。直接会うことのできない対象には、オンラインによる面談も実施した。学生からの相談においては、多重関係を避けるため、継続面接が必要な事例は保健管理センターや学外の相談機関などに繋ぎ、連携して支援している。学生の間にも、抑うつや生活リズムの乱れ、将来や進路への不安、発達的問題からくる学習や対人関係の困難さ、心身症的問題などが見られている。保健管理センターは敷居が高いと感じる学生も多く、教員が支援への入り口として機能することの意義を感じている。

（文責：芦谷道子）

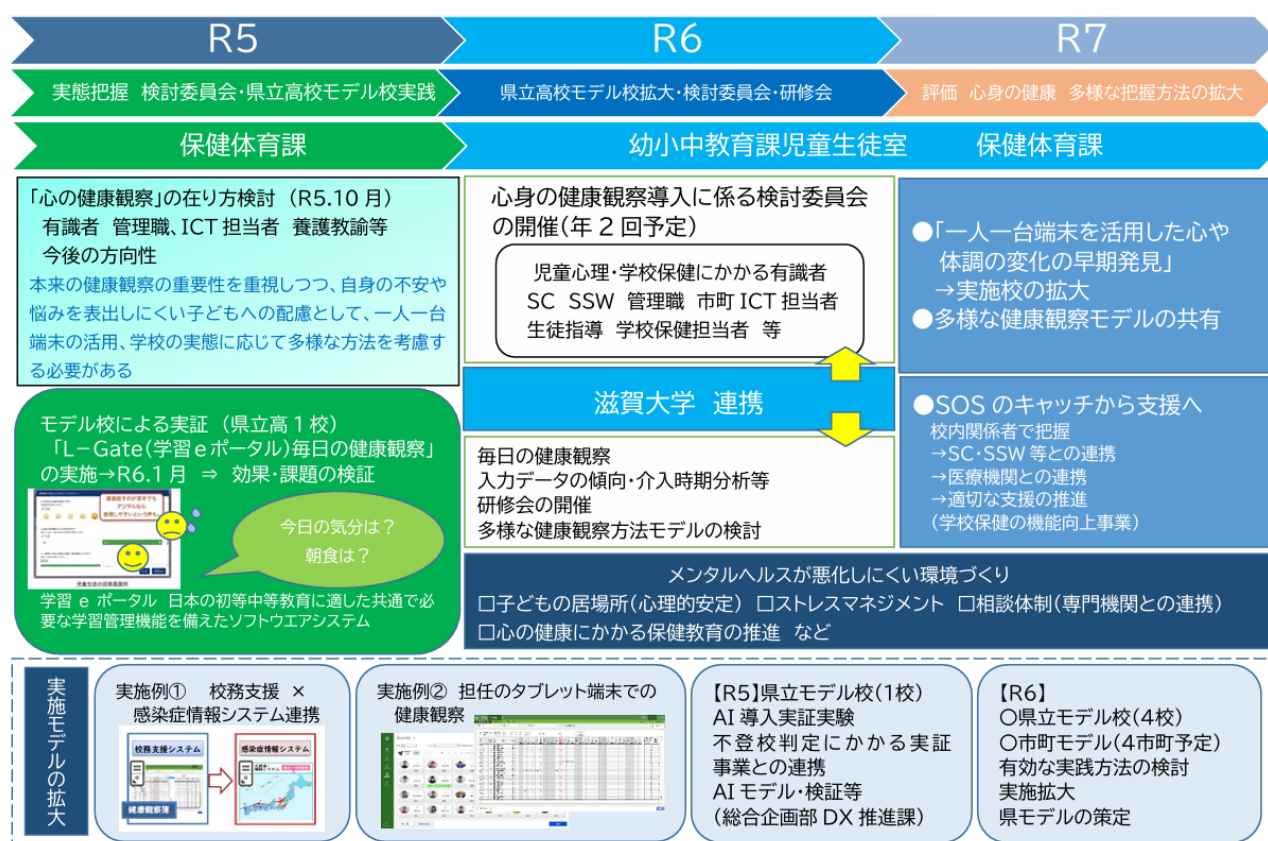
2. 滋賀県教育委員会との連携事業

滋賀県教育委員会生徒児童課と連携し、二つの事業に取り組んだ。一つ目は、県内の不登校児童生徒に対してメタバースによる学びや交流の機会を試験的に確保し、社会的自立に向けた支援となるか効果検証することを目的とした「メタバースによる不登校支援効果検証事業」である。メタバースでは、学びの場（自主学習用オンライン教材で子どもの学習習熟度に応じて、学習ができる場）、つながる場（参加者同士や参加者とスタッフが交流するレクリエーションなどに参加できる場）、情報の場（相談



窓口や医療機関・福祉機関，新たな学びの場や進路等の情報を提供する場），交流の場（参加者同士がコミュニケーションを取れる場）が準備され，不登校児童生徒との交流が図られた。さらにメタバース参加者に対して，ストレスの理解と対処について解説し，自己理解を深めることを目的とした，計4回の心理授業プログラムや保護者の会を実施した。参加者からは概ね好評であったが，参加者が少なく，メタバース利用へのハードルの高さや利用者の開拓が課題として浮かび上がった。

二つ目は，「1人1台端末等を利用した『心の健康観察』の導入に向けた調査研究事業（令和6年～8年）」であり，事業運営協議会委員として参画した。本事業は，児童生徒の心身の状態を確認しうるICTツールを導入し，児童生徒のメンタルヘルスの悪化や援助要請，学級の変容などを学校および教職員が把握し，問題の早期発見と予防に寄与するモデルの構築を行うことを目的としている。さらに，その成果の普及展開を通じて，滋賀県内の全ての小中高等学校等における「ICTを活用した悩みや不安を抱えた児童生徒の早期把握・早期支援（心の健康観察）」の導入を目指しているものである。今年度は4市町の教育委員会，4つの県立学校をモデル対象として試行的に実践を行い，その検証を実施した。様々な意義と課題が見出され，次年度のモデル拡大に向けて具体的に検討を進めている。



「一人1台端末等を利用した『心の健康観察』の導入に向けた調査研究事業」概要

（文責：芦谷道子）

3. 心理教育開発実践事業

2016年度より，心理教育開発事業に取り組み，教職大学院生や修了生と共に滋賀県内の学校において実践を重ねている。さらに，2019年より，英国オックスフォード大学，MiSP（Mindfulness in Scholls Project），関西医科大学心療内科学講座，MBSR 研究会と連携協力して，英国で開発された子どもを対象としたマインドフルネスプログラム「b プログラム」の指導者養成，実践事業に取り組んでいる。日

本の子どもたちを対象とした複数フィールドでのプログラム効果検証を行う4か年計画の「.b プロジェクト」を終え、2021年より、英国とオンラインで繋ぎ、子どもマインドフルネス指導者 .b Teacher 養成研修 Teach .b を年に一度継続実施する体制を整えている。4回目となる今年度の研修は8月に4日間にわたって行われ、日本各地から心理士、教師、医師、その他の教育関係者より申し込みがあり、18名（累計108名）の新たな指導者を育成した。参加者からは、「受講して自身のマインドフルネスに関しても深まったように感じる。一番恩恵を受けたのは自分自身」、「教育関係の友人にすすめたい」などの肯定的なフィードバックがあった。

効果評価のプレ試験においては、.b プログラムを受講した高校生の幸福感が上昇し、抑うつが低下し、毛髪における抗ストレスホルモンが上昇するといった肯定的な結果が得られた（芦谷，2024，<https://doi.org/10.5926/jjep.72.121>）。現在は、複数フィールドにおけるプロジェクトの効果検証の分析を進めているところであり、英国試験と共通の心理尺度を用いて国際比較を行い、今後の日本における普及について検討を進める。

さらに今年度は、より年少者（10歳～）も対象に含む4回短縮版のプログラム「.breathe：ドットブリーズ」の指導者育成プロジェクトも開始し、10月に Teach .breathe というオンライン指導者養成講座を行った。こちらも日本全国から33名の参加者があり、参加者からは概ね肯定的なフィードバックを得た。しかし Teach .b に比べて養成講座の時間やプログラム回数も短く、マインドフルネスの本質を指導者が理解して子どもたちに伝えることができるかどうか不安だとの声もあった。この点について改善策を検討しながら、今後も年に一度程度の指導者養成講座を継続する予定である。また今後は、心身症や発達障害などのケアを必要とする子どもたち、保護者や教師に対象の幅を広げ、まずは研究として効果評価を行い、より幅広くプログラムを提供できるかどうか検証していくことを計画している。

MfCP：Mindfulness for Children's Project という子どもマインドフルネスの団体を運営し、ホームページ（<https://mfcp.info/>）において情報交換、情報共有、各種コンテンツの提供を行っている。さらにオンライン上で指導者のプラットフォームを作り、指導者同士の交流と自主プラクティスの機会を設けている。今後もこの活動を継続、発展させ、子どもマインドフルネスに関する活動を広げていく予定である。

（文責：芦谷道子）

4. SKC キッズカレッジ（滋賀大キッズカレッジ）2024 年度連携活動報告

NPO 法人 SKC キッズカレッジは、滋賀大学との連携協力協定に基づいて、地域貢献事業と大学との連携協力の活動を行っています。来年度（2025 年 12 月）には、NPO 法人設立 20 周年を迎えます。SKC キッズカレッジは、発達障害、不登校など子どもたちをめぐる様々な発達と教育問題に取り組む専門機関として活動していますが、学校と子どもを取り巻く状況はますます厳しいものになっており、なお一層の活動の継続と普及が必要であると痛感しています。また、SKC キッズカレッジは単なるボランティア組織ではなく、研究機関でもあります。2024 年度は、学会活動も積極的に行いました。

1 滋賀大学との連携

・昨年度に引き継ぎ、10 月 23 日に教職大学院ダイバーシティ教育力開発コースフィールドワーク実習の受け入れを行いました。発達障害、とりわけ学習困難な子どもの特徴、アセスメントと学習指導についてのレクチャー、粘土を使った指導の実習の後、学習室の子どもへの参与観察、その後ミーティングを行いました。学生の感想文からも充実した実習となったことがうかがえました。

2 地域支援，啓発事業

- ・講演とトーク 大津サテライトにて保護者の経験報告に 22 人の参加がありました。
- ・地域生活情報誌「びわこと」2024 年 9 月（142 号）に SKC キッズカレッジの記事「もしかして学習障害？」が掲載されました。
- ・窪島務 新潟市教育委員会主催特別支援学級担任研修講座（全 3 回）2024 年 9 月 11 日，11 月 13 日，1 月 15 日

3 保護者向けの不登校，学習困難のサロンの相談会を大津駅前のサテライトを使用して毎月第 3 水曜日午前に実施しました。予約無用の相談会なので，数家族の参加の時もあれば参加者ゼロの時もありますが，継続していく予定です。

4 研究活動として以下の活動を行いました。

久保田璨子他 病院看護労働における筋骨格系障害の姿勢要因の検討 日本健康医学会雑誌第 33 巻第 4 号 2024 年

横江真理子他 知的支援学級から高校に進学した男の子の変容の特徴とその要因 SNE 学会第 30 回大会（日本大学）発表 2024 年 10 月 19 日（土）～20 日（日）

深川美也子 音韻意識のアセスメントに基づくひらがな読み書き指導—SKC キッズカレッジの教育理念と具体的方法の検討 発達障害学会『発達障害研究』論文掲載 46-3，2024

（文責 窪島務）

6 情報教育研究

1. 事業名および担当者

近年、教育分野において世界的に注目されている Learning Analytics (学習分析) [1] は、我が国でも教育の質保証を目指して、様々な研究がなされています[2, 3]。筆者は、今年度秋学期に大学共通教養科目として「情報学への招待」を3年ぶりにオンデマンド授業の形式で開講しました。その際に188名の履修者が受講することとなりましたので、これは手作業では対応が困難と考え、教育支援の取り組みの一環として、簡易型の Learning Analytics システムを試作し、授業支援を行いました[4]。本稿では、この取り組みの概要についてご報告いたします。事業名は「簡易型 Learning Analytics システムを用いた授業支援」で、担当者は岩井憲一です。

2. 事業の目的

Learning Analytics では、授業中とそれ以外の活動について ICT 機器を用いることで抽出・デジタル化し、そこから必要な情報に直して担当教師に示すことで、教育支援を行うことを目的としています。その授業前後の活動を**授業前**、**授業中**、**授業後**の3つの場面と捉えることもあります。Learning Analytics において支援システムを導入するメリットの一つが特に授業中における学習状況の把握です。デジタル教科書などを併用すれば、例えば授業中にどのページを眺めていたのかの把握に加え、どの問題のどの箇所にどれだけ時間が掛かっているのかなども例えばヒートマップのようなグラフの形で可視化でき、受講生のつまづきを時系列上に表すことができます。ただ、現場への導入には運用スキルの習得や費用負担が不可欠です。本事業ではそれらの課題解決に向けた具体的な方策を検討してきました。

3. 事業の概要

3.1 本事業の取り組みについて

文献[5]では、Learning Analytics を「学習とその環境の理解と最適化のための、学習者とそのコンテキストについてのデータの測定、収集、分析、レポート」と定義しています。データの測定については後述する Google Forms 入力での性質上、あまり重視する必要がないことから、次のような**(1)データ収集**、**(2)データ分析**、**(3)可視化**、の3ステップで行われるものとしています。

本事業はつぎのような取り組みとなっています。この取り組みの目標は Learning Analytics を行う簡易型教育支援システムの構築です。コストの関係上、Google Forms で**(1)データの収集**を行っています。毎回の授業時に入力されたデータは Google Sheets に収集しています。

この収集された**(2)データの分析**と**(3)可視化**につきましては、筆者が構築した簡易型 Learning Analytics システム SiLA (Simplified Learning Analytics)にて実現しています。本システムは自作によってコストを低く抑え、サーバレスで実現していることからサーバの管理業務から解放されています。また、将来的な普及を視野にいれ、有料かつ専門的なライブラリはあまり使わずに必要に応じて自身で開発しています。以下、本システムの主要な機能についてお話しします。

以下、本システムの主要な機能の概要について説明します。

3.2 入力情報

入力情報は、毎回の授業終了時に主にその日の授業についての(a)課題(1) (主に受講内容のまとめ)、(b)課題(2) ((まとめたこと)についてのコメント)、(c)理解度について(4件法)、(d)満足度について(4件法)、(e)印象に残った箇所、のような内容について入力してもらうこととなっています。収集したデータは

本システムによって「授業日毎」や「学籍番号毎」に自動的に振り分けて整理します。

3.3 システムの主要な機能

ここでは本システムで実現した主要な機能の一部について示します。データの分析は最初に収集したシートで行います。分析対象は主に理解度と満足度となります。コメント分析については現段階では収集にとどめ、基本的に教員が眺めて判断しています。

(1) 高群率について

理解度と満足度について行った4件法のアンケートを肯定的な選択肢群と肯定的でない選択肢群の2グループに分け、それぞれを高群、低群と名づけます。その高群の比率

	A	B	C	D	E	F
24						
25	2024.12.23					
26	理解できた	どちらかといえば理解できた	どちらかといえば理解できなかった	理解できなかった	理解度割合	理解数合計
27	71	48	8	1	0.9296875	128
28	満足した	どちらかといえば満足した	どちらかといえば物足りなかった	物足りなかった	満足度割合	満足数合計
29	85	41	2	0	0.984375	128
30						

図 1 高群率の集計例

について、授業日毎および受講生毎で集計を行います。図1に高群率の集計例について示します。

(2) 個別比較機能

クラス全体での理解度率と満足度率の平均値と各受講生の値を比較する機能を構築しました。

図2に個別比較機能の例を示します。各自の値が全体の平均値より低い場合は赤字で表示されます。

	A	B	C	D	E	F	G
1	学籍番号	氏名	理解度	満足度		理解度平均	満足度平均
2			0.81818182	0.9090909091		0.9078967748	0.9673337218
3			0.9230769231	1			
4			1	1			
5			0.666666667	0.888888889			

図 2 個別比較機能の例

(3) 出欠集計機能

筆者の担当授業では、授業日毎のGoogle Forms経由でのコメント入力を以て出席のエビデンスとして扱っています。図3に出欠集計機能の例を示します。本機能によって出席状況の取り扱いが格段に改善されました。

	A	B	C	D	E
1	学籍番号	お名前	2024.10.07	2024.10.14	2024.10.21
2			1	1	1
3			1	1	1
4			1	1	1
5			1	1	
6			1		
7			1	1	
8			1		
9			1	1	1
10			1		

図 3 出欠集計機能の例

4. 今後に向けて

本稿では、本事業の取り組みである「簡易型 Learning Analytics システムを用いた授業支援」についてその概要を述べました。この取り組みが、本学部での教育改善のきっかけの一つになりましたら幸いです。

謝辞

本事業は、本学の「令和6年度リベラルアーツ・STEAMプロジェクト助成制度」の助成を受けたものです。ここに衷心より謝意を表します。

参考文献

[1] Siemens, G., & Long, P., "Penetrating the fog: Analytics in learning and education." EDUCAUSE Review, Vol.46, No.5, pp.30-32, 2011, <https://er.educause.edu/-/media/files/article-downloadserm1151.pdf>. (2025年2月6日アクセス).

[2] 緒方広明：“大学教育におけるラーニング・アナリティクスの導入と研究”，日本教育工学会論文誌，Vol.41, No.3, pp.221-31, 2018. (2025年2月6日アクセス).

[3] 緒方広明：“ラーニングアナリティクスセンターの取り組みについて”，https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/127/shiryo/_icsFiles/afldfile/2017/03/06/1382912_4_2.pdf. (2025年2月6日アクセス).

[4] 岩井憲一：“簡易型サーバレス Learning Analytics システム SiLA の試作と検証”，2024年度(第75回)電気・情報関連学会中国支部連合大会，R24-27-17，2024.

[5] Society for Learning Analytics Research: <http://solaresearch.org/>. (2025年2月6日アクセス).

(文責 岩井 憲一)

7 教育実習支援

教育参加カリキュラムは、平成 17 年度に始まり、今年で 20 年目を迎える。それは、1 年次の「教育参加プランニング」「観察実習」、2 年次の「実習基礎」「交流実習」、3 年次の「基本実習（教育実習）」「教育実習中間指導」「教育実習終了後の発展実習（3 年次の秋学期と 4 年次）」「自主参加体験」という滋賀大学のすべての教育実習科目と教育体験科目を、原則として 4 年間で積み上げ式に体験するプログラムである。特に、地域実習（平成 17 年度から始まった栗東実習、平成 25 年度から始まった守山実習、平成 30 年度から始まった大津実習、令和 2 年度から始まった草津実習）は、「地域の公立学校における教育支援活動を通して実践的力量を高める」という目的に則り、実習校、教育委員会、大学とが連携して行っている。

1. 教育参加プランニング

1 年生の教育参加プランニングは、グループ学習を通して将来の目標を設定し、これからの 4 年間の学びを計画させるものである。プランニング作業は、個々の学生の立場から、教育参加カリキュラムにおけるそれぞれの実習の位置づけを明確にし、目的意識と見通しをもって、充実した学生生活を送るための一助となるものである。

2. 観察実習

観察実習は、交流・基本実習の事前指導として、附属学校園での授業参観等を行う 1 年生の活動である。交流・基本実習を行う前に附属学校園の日常に触れ、教員としての心構えや学校園の現状を体感する機会になっている。

3. 交流実習

交流実習は、主に学校行事等における準備や運営に、指導者の立場から体験的に関わる実習である。2 年生は、交流実習の中で、小学校では校外学習や運動会、中学校では体育祭や合唱コンクール（文化祭）等の指導補佐を行っている。先生方や児童生徒とのふれあいを通して、先生方が学校行事等を、どのように準備し、どのような配慮をしながら実施しているのかを実践的に学んでいる。また、令和 5 年度からは、3 年生の基本実習での授業を参観することも可能とし、基本実習への心の準備を行っている。

4. 基本実習

3 年生になると、交流実習を行った学校で 4 週間（前期 2 週間、後期 2 週間）の基本実習を行う。具体的には、児童生徒の生活指導、授業観察、授業、一日担任等である。基本実習では、個別の児童生徒の対応にとどまらず、クラス全体を視野に入れて、児童生徒との関係を作っていくことや授業を進めていくことが求められる。また、多様な児童生徒や、様々な課題を抱えた児童生徒と向き合うことでより具体的な対応を学ぶことができる。さらには、現場教員の児童生徒との関りの姿を見て、教員への憧れの気持ちを養うこともできる。



地域実習校での教育実習

5. サポーター活動（自主参加体験・発展実習）

地域実習では、基本実習の事前・事後指導の一環として、基本実習の配属校で 3 年次の 3 月まで原則として週 1 回のサポーター活動を行う（栗東実習 3 年生は全員必修、他も積極的に参加）。基本実習前の

サポーター活動は、児童生徒や先生方との関係をつくることに重点を置いている。それを活かして、6月から10月までの実習期間中での、児童生徒との信頼関係の形成、担当教員との授業の打ち合わせ、授業構想・指導案の確認等を行っているので、基本実習のために欠かすことのできない活動となっている。基本実習修了後の活動は、基本実習で学んだ成果を活かして児童生徒や先生方とより深く関わり、学校の教育活動に積極的に参加することを目的としている。なお、基本実習前と実習期間中のサポーター活動は、自主参加体験として、実習後のサポーター活動は、発展実習として単位申請することができる。また、学生が希望すれば、基本実習の配属校で4年次になってもサポーター活動を続けられる。

6. 大学の支援体制

学生への支援体制は多岐にわたっているが、代表的な支援は、以下の3点である。

一つ目は、実習中の支援である。地域実習では、栗東・守山・大津・草津実習担当の学部教員が、学生の授業を参観したり、学生から実習の様子を聞いたりして、技術面・精神面への支援を行っている。また、基本実習を行う3年生には、第1ステージ（6月）と第2および3ステージ（9・10月）の間に、教育実習中間指導を実施している。そこでは、それぞれの実習校での経験を語り、共有することで、前ステージの課題を見つけ、次ステージに向けての目標を明確にすることをめざしている。

二つ目は、実習後の支援である。3年生の基本実習と1年生の教育参加プランニングが終了する頃に、専修専攻毎に教育実習報告会を開催している。3年生が基本実習の成果を発表し、それぞれの経験を振り返る機会を提供している。また、1年生と2年生は、上学年生の発表や彼らとの意見交流を通して、次に行う実習の情報を得ることもできる。



スクールサポーター活動

三つ目は、サポーター活動への支援である。スクールサポーターでは、運動会や音楽会といった学校行事の準備や手伝い等、日頃は経験をしない、裏方的な仕事を行うことになる。そのことにより、授業という児童生徒の前で行うことだけでなく、陰で支える仕事の存在を知り、互いの「思いやり・感謝・協力」の心を学び、チーム学校の大切さを体感するのである。地域実習の学生だけでなく、附属実習の学生にもその機会を知らせ、紹介する支援も行っている。

7. 今後に向けて

今後、重点的に取り組むべき課題は、次の3点である。

- ① 教師という仕事の素晴らしさや、やりがいを実感させ、教師という職業への憧れや意欲を高めさせることにある。そのために、身近な先輩である卒業生からの声を聴く機会を増やしていくことも必要である。
- ② 教師になるまでの4年間の大学生活の間に、どのように学習をして、どのような力をつけなければならないのか、また、そのために何に取り組めばよいのかといった具体的な内容を考え、実践させることにある。そのために、1年生で4年間の学習計画（プランニング）を立てさせる。その学習計画を、2年生は交流実習オリエンテーション、3年生は事後指導の時間において、毎年修正をさせて、実践を行うための支援を行うことである。
- ③ 学生の現場での経験を深めるために、地域実習校と大学とが連携し、スクールサポーター活動が継続的に、また、発展実習が更に実践しやすいように環境を整えることにある。そのために、自宅や下宿の近く、大学への通学経路近辺等、通いやすい実習校に配置を行うことである。（高田 聡）

8 教師力向上支援

教育実習支援担当の主たる役割は、前項「7 教育実習支援」で示した教育参加カリキュラムを学生たちが円滑に進めていけるよう支援すること。もう一つは、教師力向上をめざす学生たちの自主的な行動を支援し、その活動を支える「教師力向上支援」である。以下は、その取り組みである。

1. 教師力養成サークル「教師のたまご」の設立

このサークルは、令和5年度に新しく立ち上げたものである。それ以前は、基本実習を終えた3回生から授業づくり研修や教員採用試験対策を望む声上がり、それに応える形で支援活動を行っていた。

ところが、年々参加希望者が増える反面、全国的には教員不足が深刻化し、教員をめざして入学して来た教員養成系の学部生でさえ卒業後の進路に教員を選択しない傾向が強まっている。そこで、附属教育実践総合センターでは、教員志望を抱いて入学してきた学生に対し、その夢の実現に向けて主体的かつ気軽に学べる機会と場を提供したいと考え、本サークルを設立することにした。

2. サークルの主な活動内容

本サークルでは、教師力養成の内容を図1のように「授業力」・「受かる力」・「遊び心と即戦力」の3つに分けて参加者を募集し、グループ別に活動を行っている。

教師力養成サークル 教師のたまご

参加者募集について

2024.11.07 滋賀大学教育学部 附属教育実践総合センター

附属教育実践総合センターでは、教師力の向上をめざす学生の主体性を支援したいと考え、昨年度より教師力養成サークル『教師のたまご』と称する活動をはじめています。

同じ志を持つ学生が集まり、地域実習担当教員とともに協働的な学びを展開し、新たな学びの蓄積や新たな友人関係を築いていってくれることを願っています。

参加希望者は、登録専用 Form に必要事項を記入し、申し込んでください。

サークル活動への参加と退会はあくまで自由。費用は一切かかりません。

グループ A: 授業力 UP
対象: 1回生・2回生(通年)

教師としての専門性が求められるのは、やはり授業力。このグループでは、「やってみよう」を合言葉に指導案の作成や模擬授業「ごっこ」を通して、基本実習に向けた授業力 UP をめざします。

また、授業における ICT 機器の有効活用についても共に学び、操作方法を含めた実践的指導力を向上させていきます。

グループ B: 受かる力 UP
対象: 3回生 (11月～翌年8月)
(翌年教授受験予定の2回生も参加可)

教師への道を拓くためには、是非とも採用試験に合格したいもの。

このグループでは、志を共にする仲間が集まり、情報共有はもとより小論文や面接の練習を通して「受かる力」の向上に迫っていきます。

グループ C: 遊び心と即戦力 UP
対象: 4回生(11月～翌年3月)

正規採用、講師採用の区別なく、卒業後4月から即学校現場で働く4回生に対し、学級経営や学習指導、教員としての心得等も含め教員としての即戦力 UP につながる講話や不安を払拭するための相談などを行っていきます。

(1)「授業力UP」グループの活動

月1回程度、1・2回生の希望者を対象に、教師の専門性として欠かせない授業力の向上をめざした活動を行っている。「やってみよう」を合言葉に、まずは指導案を作成し、それをもとに模擬授業を行い、実践的指導力を高めている。

また、学校における ICT 機器の有効活用について考え、授業での具体的な活用場面を想定し操作技能等の研修を行っている。

(2)「受かる力UP」グループの活動

教員をめざすという共通の志をもつ仲間が集まり、情報共有はもとより小論文や面接、討論の練習を通して「受かる力」を向上させている。

全国的に採用試験日が早まり、3年次受験を実施する自治体が急増している中、令和6年度は2回生の参加も可とした。そして、できる限り早くスタートを切ることにより、学生の自信とゆとりを捻出したいと考え、11月からこの活動を始めている。

【図1：募集案内】

(3)「遊び心と即戦力UP」グループの活動

卒業後学校現場で働く4回生に対し、今年度は特に教師の遊び心と学級づくりに視点をあて、「レクリエーション技法を取り入れた人間関係づくり」をテーマにその道に長けた現職小学校長を講師に招き、実体験を通じた学びの場の提供を行った。(写真1)

また、教職大学院と連携し、座談会形式で気軽に現職教員から学校現場の実情や教壇に立つまでの準備等について話が聞ける場を設け、就職に向けての不安払拭の一助とした。



【写真1：レクリエーション研修】

3. 各グループの活動における成果と課題

(1)「授業力UP」グループ

今年度は、対象を全学年から1・2回生に限定した。理由は、入学後できる限り早い段階で「授業づくり」を体験し、教員志望へのモチベーションをさらに向上させてほしいと願ったからである。ところが、1・2回生は履修の関係で余暇時間がほとんどなく、残念ながら当初の目的を達することができなかった。そのため、次年度以降の活動については、活動日や対象学年の設定に課題が残った。

(2)「受かる力UP」グループ

11月から活動を始めたことで、現状、教育課題や答申等に対する基本的な知識や理解を深め、個々の考えや思いをゆっくり共有することができている。2月25日現在の参加者は約50名で、採用試験対策への学生のニーズの高さが伺える。3年次受験に臨む学生が増えていることを踏まえ、本サークルだけではなく大学として改めてその支援の在り方を検討する必要がある。

特別企画として実施した現職教員（教職大学院生）を招いてのICT活用研修は、教育実習における積極的な活用をめざす上でも有意義な時間となった。ただ、授業支援ソフトが市町によって異なることや、ソフトのライセンス契約の予算面での課題が大きい。そのため、昨年度に引き続き期間限定の無料体験版を企業様より提供いただき活用したが、期間限定のため研修を深めるには限界があった。

(3)「遊び心と即戦力UP」グループ

「緊張して教室に入ったが、最後は緊張がすべてほぐれていた。大人でもこれだけ、レクリエーションの効果があるのだと改めて実感できた。来年度からの実践にぜひ生かしていきたい。」この学生の感想にあるように、講師を招き、実体験を通してその技法の魅力と学校現場での具体的な活用法について学べた価値は大きい。

また、今年度初めて教職大学院と連携させていただき、現職教員から指導を受けたり話を聞かせてもらったりする機会(写真2)が持てたことは、教員同士の「つながり形成」という面でも意義深かった。



【写真2：現職教員との座談会】

4. まとめ

教員離れが社会問題化している今、学生同士がつながりを広げ、深めていく中で教職の魅力を感じてほしいと願いこの活動を進めている。その際改めて感じることは、勉学にはとても真面目に取り組んでいる学生が多いが、幅広い視野から社会や教育を見つめ、自身の意思で何かに関わろうとしている学生が少ないことである。そのため、今年度は「遊び心」を活動の柱に加え、実体験から学ぶ楽しさを味わう機会を設けたが、この流れはぜひ次年度以降も継続していきたい。

(齊城 勝美)

9 キャリア支援の取り組み

1. 事業名および担当者

事業名：キャリア支援事業

担当者：学部教員 西坊 晴美

2. 事業の目的

大学での学びを支援し、就職相談を中心とした進路支援（キャリア支援）を行う。原則対面指導により、教員採用試験をはじめその他の就職対策について指導助言をする。

3. 事業の概要

1) 取り組み

① 新入生対象 キャリア支援の案内とキャリア支援アンケートの実施

1年生全員の個人あてに、オンライン success のシステムにより「キャリア支援の案内」と「キャリア支援アンケート」を送付し、各個人から調査回収を行った。新入生の本学入学理由や大学生生活の満足度、進路（教職）希望の実態把握をし、学内で情報共有をした。

また、学生には、進路相談や就職相談などにおいて、キャリア支援室を気軽に活用してほしい旨を案内した。

② 教職採用試験対策の指導

a 就職委員会主催の事業に協力参加する。

- ・就職・教採ガイダンス（学部3回生、院1回生、学部2回生〈希望者〉対象）（説明講義）
- ・教員養成研修（学部3回生、院1回生対象）（説明講義）・分科会（高校の部の進行）
- ・直前模擬面接（教採受験者対象）面接（説明講義）・模擬面接実施
- ・春季スタートアップ面接・討論（学部2・3回生対象）（説明講義）
- ・スタートアップ面接練習会の実施（学部2回生～4回生対象）

b 個別指導

- ・教職採用試験用小論文指導（小論文予想課題問題を提示、ワード文書で受けとり、添削してメール返送する。指導助言はメールおよび対面で行う）
- ・面接カード等の記入指導（手書きおよびメールによる文章提出を受け、添削を行う）
- ・個人面接・集団面接、集団討論練習指導

③ 進路相談・就職相談

a 教職採用試験の受験についての迷いや他の就職採用試験・大学院入試等についての相談

公務員試験対策、企業採用試験の受験対策の助言、エントリーシート記入助言を対面指導により行う。

b 本学経済学部就職係へ協力依頼し、連携を図る。（就職相談・企業説明会の実施など）

c 教員採用試験や他の就職試験関係の情報収集と掲示・求人票整理（キャリア支援室設置）

④ 入学時から就職決定までの「教員志望変遷の状況」レポートを作成（学内情報共有）＊後掲

2) 実績

a 進路・就職相談および面接練習・対策指導（R6 3月～R7 2月末）のべ109件

b 小論文・エントリーシートの文章添削指導（R6 3月～R7 2月末）のべ63件

3) その他 就職対策問題集および小論文対策図書の選定と貸出管理を行う（キャリア支援室設置）

4) 新入生対象アンケート調査結果

問1 あなたが本学へ入学した理由は何ですか。(1つ選択)

- 1 教職を目指しているから 2 入試難易度や受験科目などが自分にあったから
3 国立大学法人だから 4 親や高校の教師などが勧めたから 5 理由はない 6 他

回答 \ 年度	令和元入学	令和2年入学	令和3年入学	令和4年入学	令和5年入学	令和6年入学
1	55.2%	68.6%	65.3%	74.6%	63.2%	64.3%
2	19.9%	15.9%	15.9%	12.1%	14.9%	16.6%
3	16.6%	8.8%	11.7%	10.3%	18.2%	14.5%
4	5.4%	4.4%	1.3%	1.7%	2.9%	3.4%
5	1.2%	0.9%	2.1%	1.3%	0.8%	1.3%
6	1.7%	1.3%	4.2%	0	0	0

問2 あなたは本学での大学生活に満足していますか。(1つ選択)

- 1 大変満足している 2 ほぼ満足している 3 やや不満である 4 大いに不満である

回答 \ 年度	令和元入学	令和2年入学	令和3年入学	令和4年入学	令和5年入学	令和6年入学
1	29.9%	4.4%	11.3%	28.9%	27.3%	23.4%
2	63.9%	49.1%	64.4%	64.2%	64.5%	66.4%
3	5.4%	40.7%	23.9%	6.5%	7.4%	9.4%
4	0.8%	5.8%	0.4%	0.4%	0.8%	0.9%

* コロナ禍の急激な影響を受けた令和2年から満足度が回復し、ほぼコロナ禍前の状況となっている。

①②の理由については、複数選択可

- ① 満足+ほぼ満足の理由：1 講義に関する事(78人) 2 進路に関する事(112人)
3 部活や人間関係(108人) 4 施設・設備(16人) 5 バイトなど(50人)
② やや不満+不満の理由：1 講義に関する事(19人) 2 進路に関する事(7人)
3 部活や人間関係(5人) 4 施設・設備(9人) 5 バイトなど(5人)

問3 現時点であなたの教職を目指す気持ちはどの程度ですか。(1つ選択)

- 1 教員になりたい 2 できれば教員になりたい(迷っている・悩んでいる)
3 教員以外を考えている 4 未定

回答 \ 年度	令和元入学	令和2年入学	令和3年入学	令和4年入学	令和5年入学	令和6年入学
1	54.8%	62.4%	56.9%	63.4%	62.8%	60.9%
2	32.8%	24.8%	31.4%	28.9%	26.0%	28.9%
3	4.1%	4.9%	7.5%	5.2%	9.5%	6.0%
4	8.3%	7.9%	4.2%	2.6%	1.7%	4.3%

4. 今後に向けて

視野が広く意欲ある教員を育成すること、また、学生の希望就職実現に向けて指導助言を行う。
(西坊 晴美)

10 教員志望について「志望の変遷」を追う

滋賀大学は、教育学部と経済学部、データサイエンス学部の3学部からなる総合大学である。キャンパスが、大津と彦根にあり、教育学部のみ大津キャンパスである。つまり、滋賀大学教育学部生は、単一の学部のキャンパスで学んでいる。

教育学部の学びは、変化の激しい時代に対応できる多様で個性豊かな教育者の育成を目指し構築されている。本学部での学びを経て、一人でも多くの本学出身者が、意欲をもって教育現場で活躍してくれることを願い、日々教育活動が進められている。本学部入学の志望動機は、「教員として就職すること」を基本にしているが、就職結果をみると「教員以外」の仕事に就く学生も一定数いる。教員養成を理念としている教育学部の学生の教員志望の目標がどの時点でどのような理由によって変遷し、どう就職につながったのかをまとめてみた。

学生には、在学中に何回かアンケート調査が行われている。今回、資料として使用するのは、

- ① 大学入学直後、前期中にキャリア支援アンケートとして実施しているもの。(キャリア支援室で実施)
- ② 1回生の11月に学生が所属するコースと専攻が決定したときに実施しているもの。(教育実践総合センターと教務係で実施)
- ③ 3回生の教育実習終了後、実施しているもの。(教育実践総合センターで実施)

この3種類の個人別調査データを用いて教員志望の変遷を追跡した。

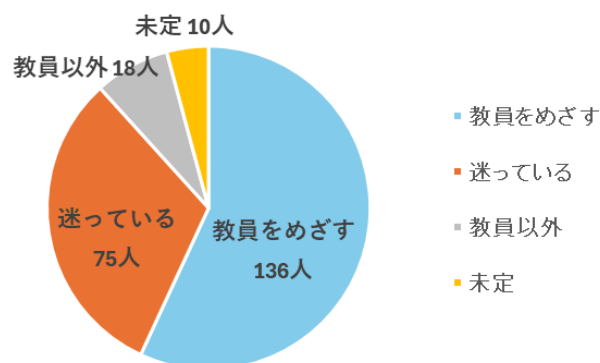
アンケート調査の項目は、

「1 教員になりたい。2 教員になるか迷っている。3 教員以外をめざす。4 未定またはその他」である。以下の資料は、直近の過去4年、2018年～2021年4月入学生⇔2021年～2024年度卒業生のデータをまとめたものである。

1 2021年度入学生の進路希望調査の推移

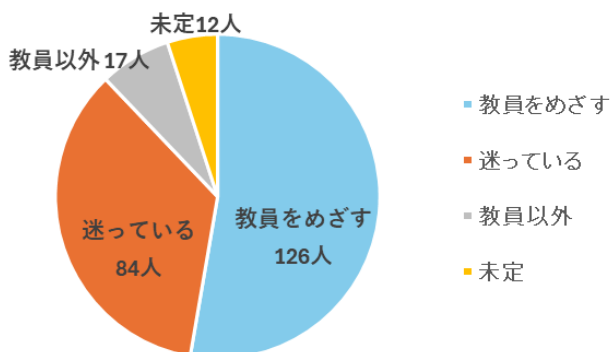
- ① 1回生入学時志望調査(4月～7月) (回答数 239人)

1. 教員をめざす	136人	56.9%
2. 迷っている	75人	31.4%
3. 教員以外	18人	7.5%
4. 未定	10人	4.2%



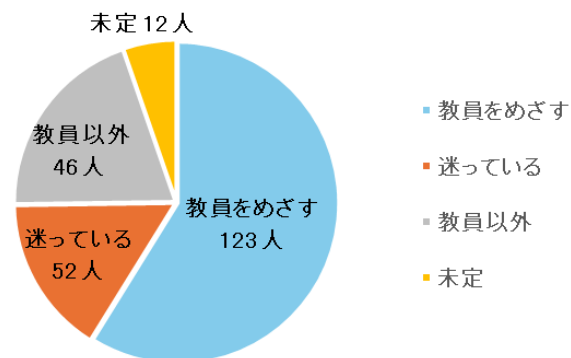
- ② 1回生コース決定時志望調査(11月) (回答数 239人)

1. 教員をめざす	126人	52.7%
2. 迷っている	84人	35.1%
3. 教員以外	17人	7.1%
4. 未定	12人	5.0%



③ 3回生教育実習後志望調査（11月）（回答数 233人）

1. 教員をめざす	123人	52.8%
2. 迷っている	52人	22.3%
3. 教員以外	46人	19.7%
4. 未定	12人	5.2%

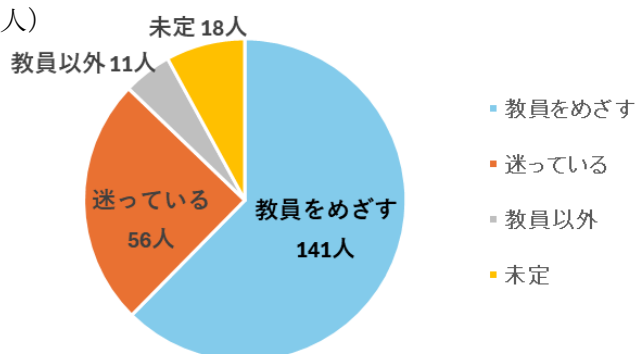


入学時および1回生コース決定時（11月）は、「教員になるか迷っている」「教員以外」が例年より多かった。3回生の教育実習後において、教員以外を目指す学生は例年並みだが、まだ教員への迷いを感じている学生が一定数おり、教育実習後の丁寧なサポートが必要であると考えます。

1 2020年度入学生の進路希望調査の推移

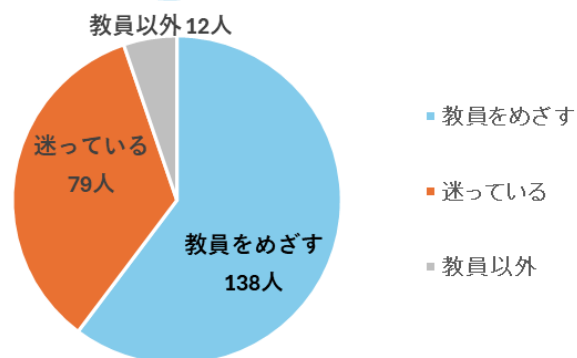
① 1回生入学時志望調査（4月～7月）（回答数 226人）

1. 教員をめざす	141人	62.4%
2. 迷っている	56人	24.8%
3. 教員以外	11人	4.9%
4. 未定	18人	8.0%



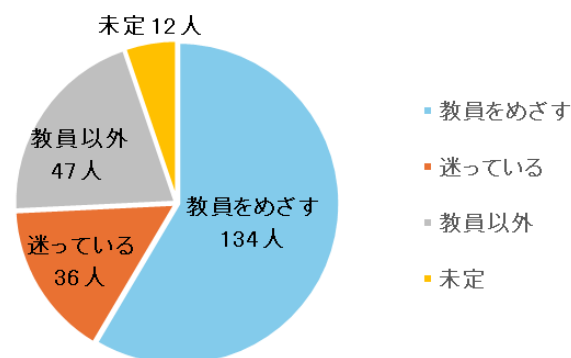
② 1回生コース決定時志望調査（11月）（回答数 229人）

1. 教員をめざす	138人	60.3%
2. 迷っている	79人	34.5%
3. 教員以外	12人	5.2%
4. 未定	0人	0.0%



③ 3回生教育実習後志望調査（11月）（回答数 229人）

1. 教員をめざす	134人	58.5%
2. 迷っている	36人	15.7%
3. 教員以外	47人	20.5%
4. 未定	12人	5.2%



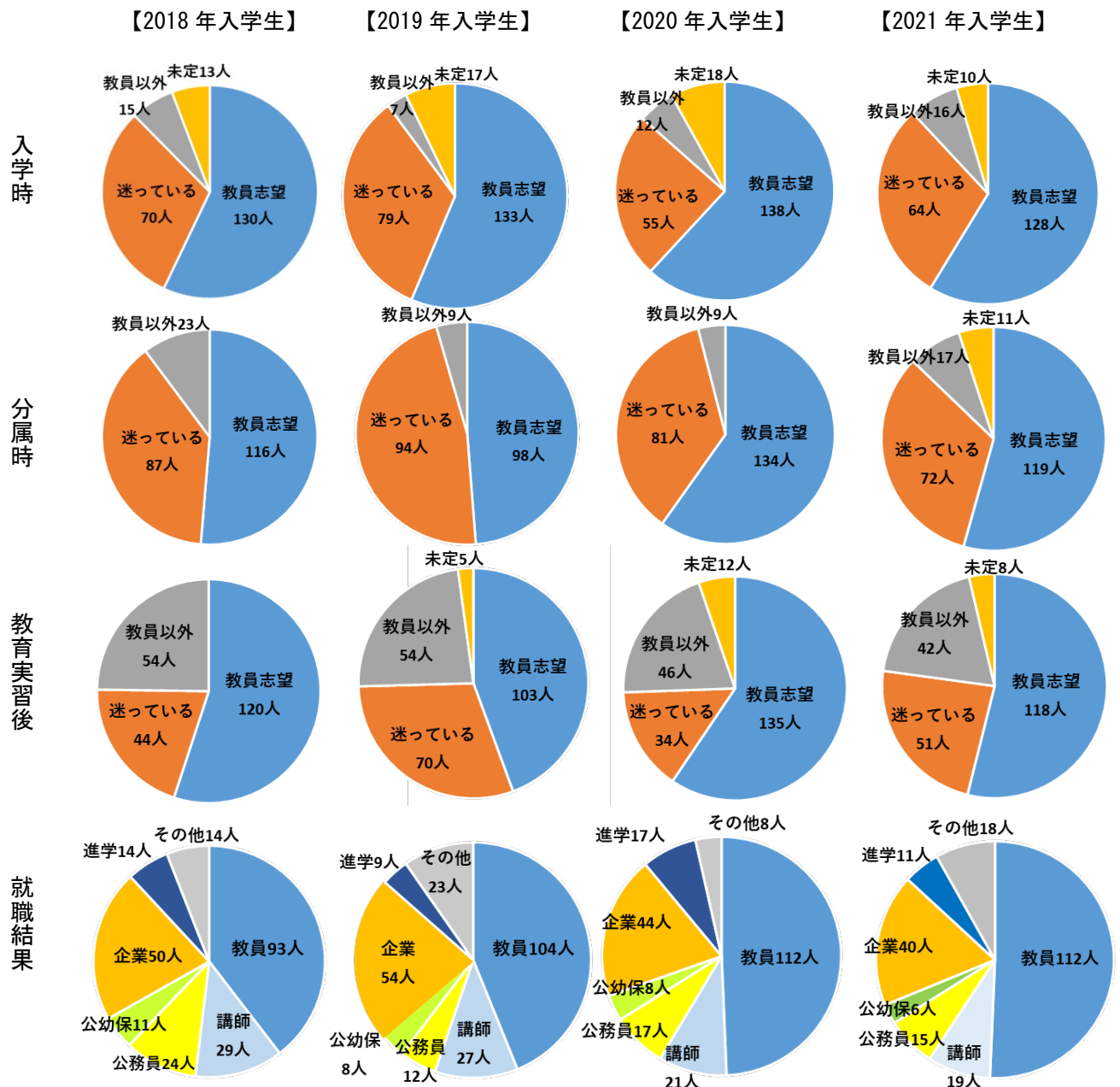
入学時から2回生まではコロナ禍の影響を大きく受けたが、教育実習はほぼ例年どおり実施できた。教員志望者数は、3回生の教育実習後まで大きく変化しなかった。3回生の教育実習後に、迷っていた学生の中で、はっきり教員以外の方向を考える学生が増えた。

上段：該当者／回答者の実人数

下段：該当者／回答者の割合

入学年 卒業年度	2018年 (H30) 2021年度	2019年 (R1) 2022年度	2020年 (R2) 2023年度	2021年 (R3) 2024年度	2022年 (R4) 2025年度	2023年 (R5) 2026年度	2024年 (R6) 2027年度
入学時教員 志望(1年6月)	130人/228人 57.0%	133人/236人 56.4%	138人/223人 61.9%	128人/218人 58.7%	147人/232人 63.4%	152人/242人 62.8%	143人/235人 60.9%
分属時教員 志望(1年11月)	116人/226人 51.3%	98人/201人 48.8%	134人/224人 59.8%	119人/219人 54.3%	151人/222人 68.0%	182人/241人 75.5%	161人/232人 69.4%
教育実習後 教員志望(3年)	120人/218人 55.0%	103人/232人 44.4%	135人/227人 59.5%	118人/219人 53.4%	135人/226人 59.7%	未実施	未実施
教員就職結果 (含講師)	122人/235人 51.9%	131人/237人 55.3%	133人/227人 58.6%	130人/221人 58.8%	—	—	—

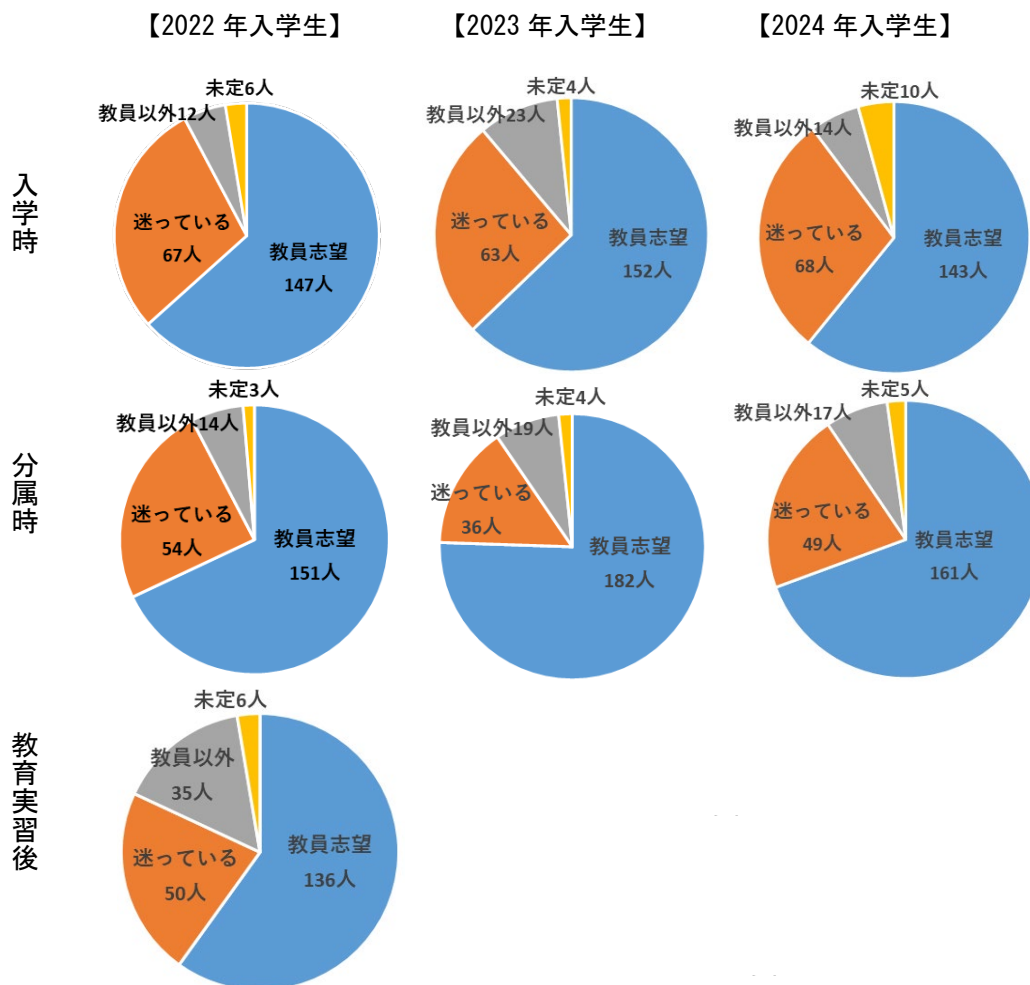
※入学年 2021 年の就職結果は 2 月末現在



学校教員として就職した者、次年度に向けて講師就職した者は、この4年間で少しずつ増加傾向にある。それに対し、企業就職者は漸減している。

今年度卒業生（2021年入学生）の特徴は、教員志望者数が、入学時から卒業時まで大きく変動せず、3回生まで進路を迷っていた者も最終的に教員になることを選んだ者がかなり見受けられた点である。

学内の様々な場面において、教員の仕事の魅力を発信し、丁寧に指導していきたい。



過去においては、1回生の入学時に比べ、分属時に教員志望者が減少する年度もあったが、ここ3年間は教員志望を堅持している。

教育実習後に、はっきりと教員以外の進路を目指す者の数が増え、実際の企業就職も例年それに近い人数になる。

また、入学時調査で、教員以外の就職を希望、もしくは進路未定の者が、どの年度も20～30人程度いる。教員養成学部としての本学の魅力、取り組みを今後も広く高校生に周知していく必要がある。

3 卒業時の就職状況からみる進路希望の推移

卒業時の就職決定先をグループ化して、学生個別の教員志望変遷を追ってみた。
それぞれの就職先のグループ別に教員志望の変遷をたどる。

【2021 年度入学生】

グループを次のように分けた。2024 年度卒業生 221 人のうち、教員志望アンケート（1 回生入学時・1 回生コース決定時・3 回生教育実習後）の 3 回分の回答を得ているのは 216 人である。

A 【教員採用試験合格者で学校に正規採用された者】

112 人（回答者 111 人）

B 【教員採用試験不合格だが、教員志望で講師になった者・含私立】

19 人（回答者 18 人）

C 【国家・地方公務員試験を合格し採用された者】

15 人（回答者 15 人）

D 【公務員試験により幼稚園・保育士に採用された者】

6 人（回答者 6 人）

E 【一般企業に採用された者】

40 人（うち幼保は 3 人）
（回答者 39 人（うち幼保は 3 人））

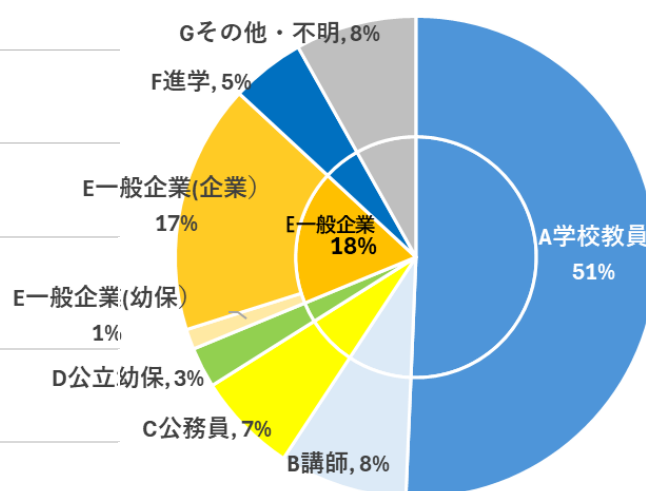
F 【大学院に進学した者含留学】

11 人（回答者 10 人）

G 【自営業・その他・不明】

18 人（回答者 17 人）（3 月末には、減少予想）

就職決定先別人数比（回答者221名）



※2021 年度入学生の就職結果は 2 月末現在

【2020 年度入学生】

グループを次のように分けた。2023 年度卒業生 227 人のうち、教員志望アンケート（1 回生入学時・1 回生コース決定時・3 回生教育実習後）の 3 回分の回答を得ているのは 220 人である。

A 【教員採用試験合格者で学校に正規採用された者】

112 人（回答者 109 人）

B 【教員採用試験不合格だが、教員志望で講師になった者・含私立】

21 人（回答者 19 人）

C 【国家・地方公務員試験を合格し採用された者】

17 人（回答者 17 人）

D 【公務員試験により幼稚園・保育士に採用された者】

8 人（回答者 8 人）

E 【一般企業に採用された者】

44 人（うち幼保は 6 人）
（回答者 44 人（うち幼保は 6 人））

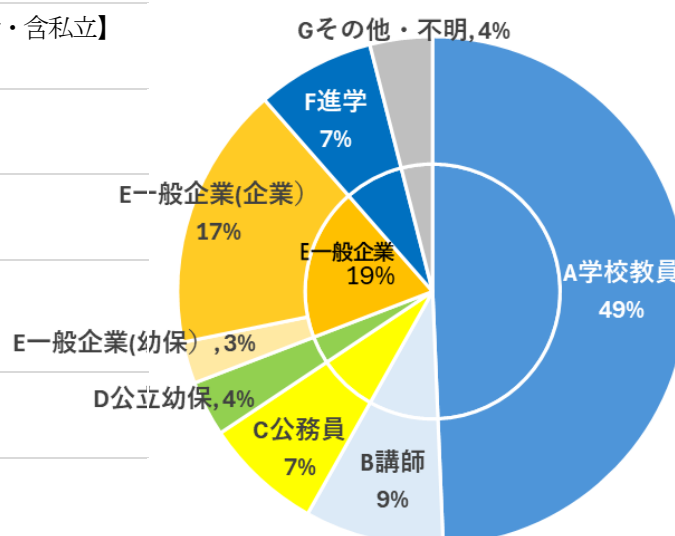
F 【大学院に進学した者含留学】

17 人（回答者 17 人）

G 【自営業・その他・不明】

8 人（回答者 6 人）

就職決定先別人数比（回答者227名）



【2019 年度入学生】

グループを次のように分けた。2022 年度卒業生 237 人のうち、教員志望アンケート（1 回生入学時・1 回生コース決定時・3 回生教育実習後）の 3 回分の回答を得ているのは 196 人である。

A 【教員採用試験合格者で学校に正規採用された者】

104 人（回答者 88 人）

B 【教員採用試験不合格だが、教員志望で講師になった者・含私立】

27 人（回答者 21 人）

C 【国家・地方公務員試験を合格し採用された者】

12 人（回答者 10 人）

D 【公務員試験により幼稚園・保育士に採用された者】

8 人（回答者 4 人）

E 【一般企業に採用された者】

54 人（うち幼保は 10 人）
（回答者 49 人（うち幼保は 10 人））

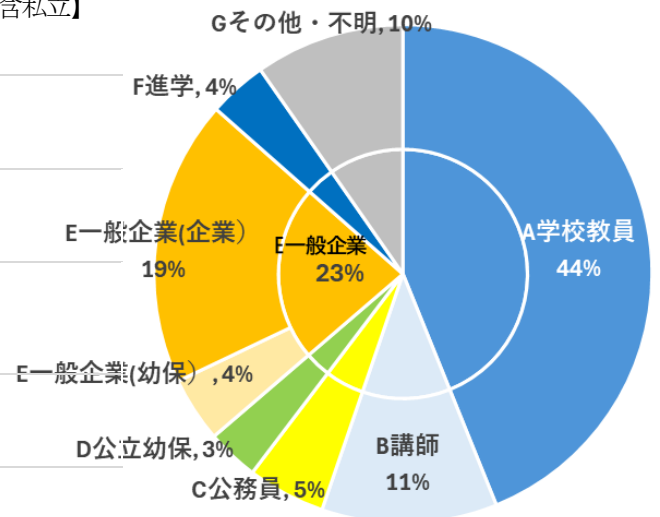
F 【大学院に進学した者含留学】

9 人（回答者 7 人）

G 【自営業・その他・不明】

23 人（回答者 17 人）

就職決定先別人数比（回答者237名）



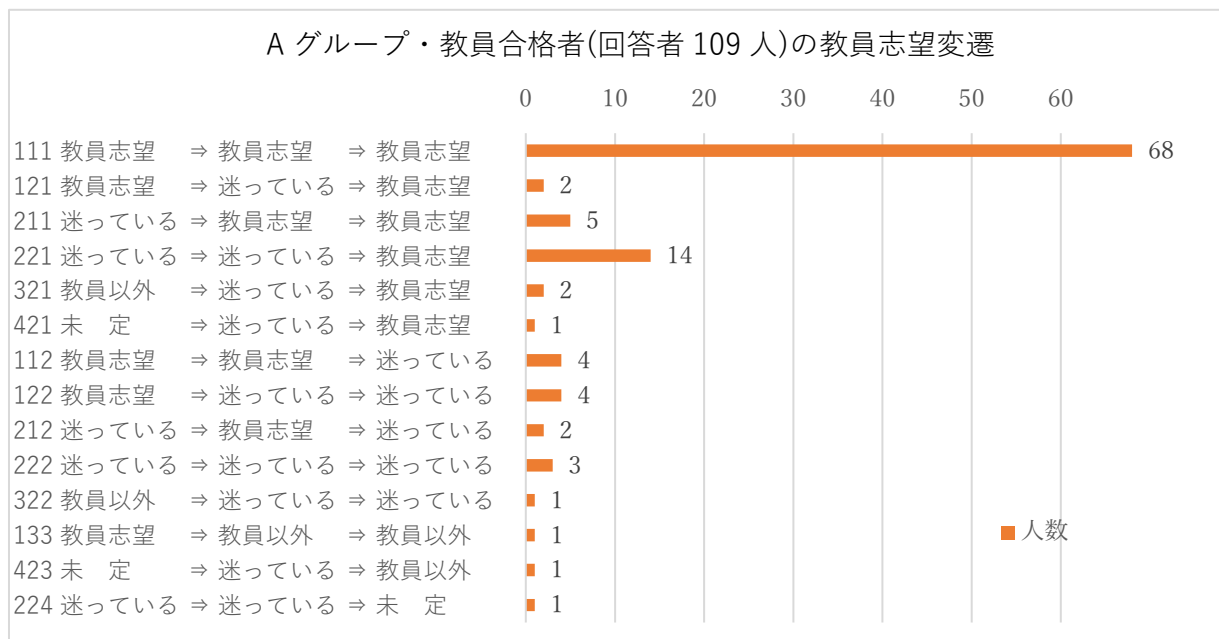
◆ A グループからGグループ7種類の卒業時の進路別グループの教員志望変遷パターン

志望調査項目 : 1 教員志望 2 教員になるか迷っている 3 教員以外をめざす 4 未定

調査時期 : 1 年入学時調査 ⇒ 1 年コース決定時 ⇒ 3 年教育実習後

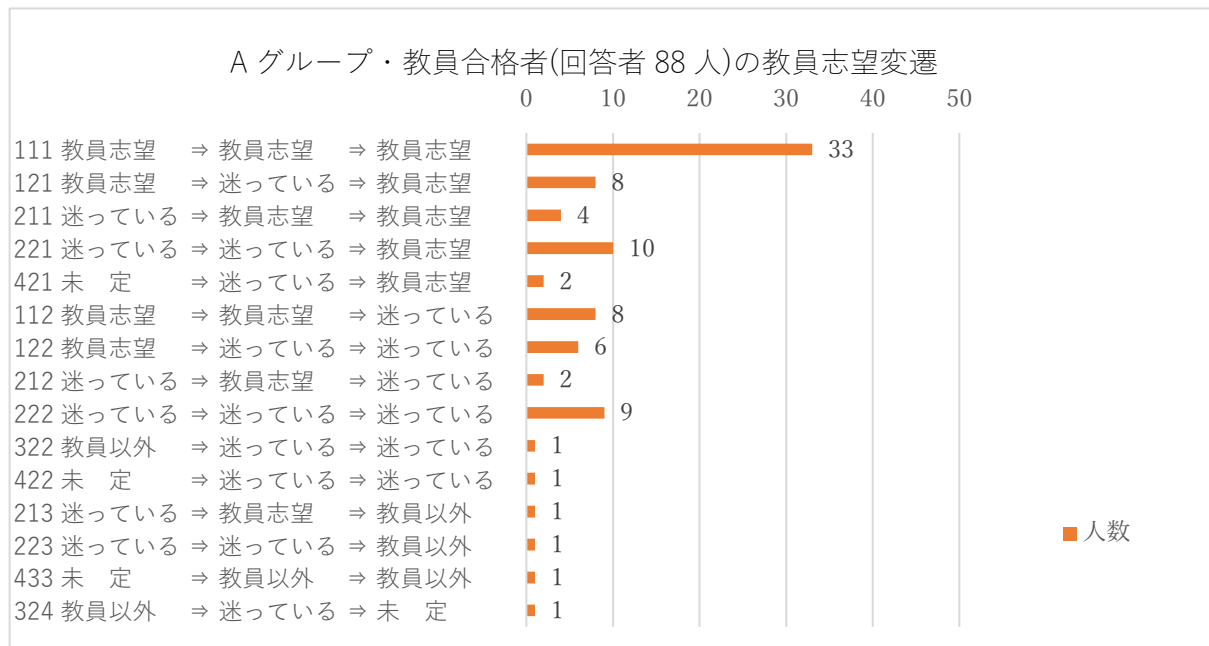
2020 年度入学生

【A のグループ（教員）に属す学生（回答者 109 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



〈 2019 年度入学生との比較 〉

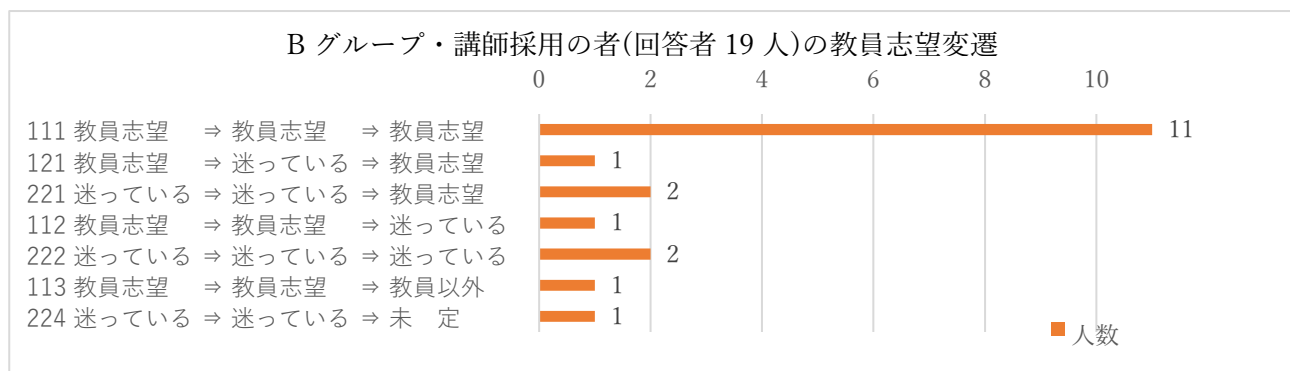
【A のグループ（教員）に属す学生（回答者 88 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*入学後から卒業時までの教員志望の変化がなく、一貫しているものが多いが、途中で迷いが生じたり、ずっと迷いながらも最終的に教員志望に至り、採用試験に合格した者も一定数いる。

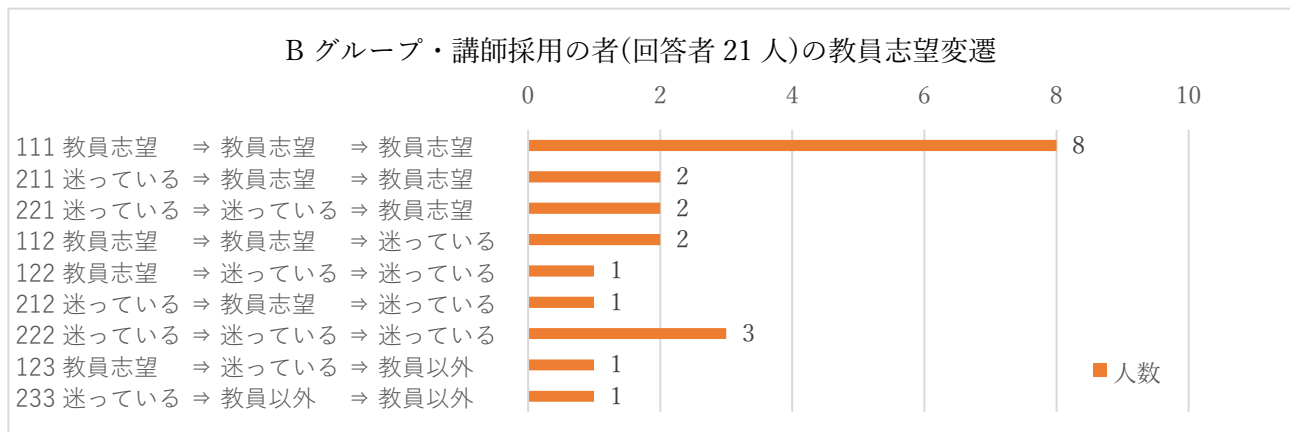
2020 年度入学生

【B グループ（講師）に属す学生（回答数 19 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



〈 2019 年度入学生との比較 〉

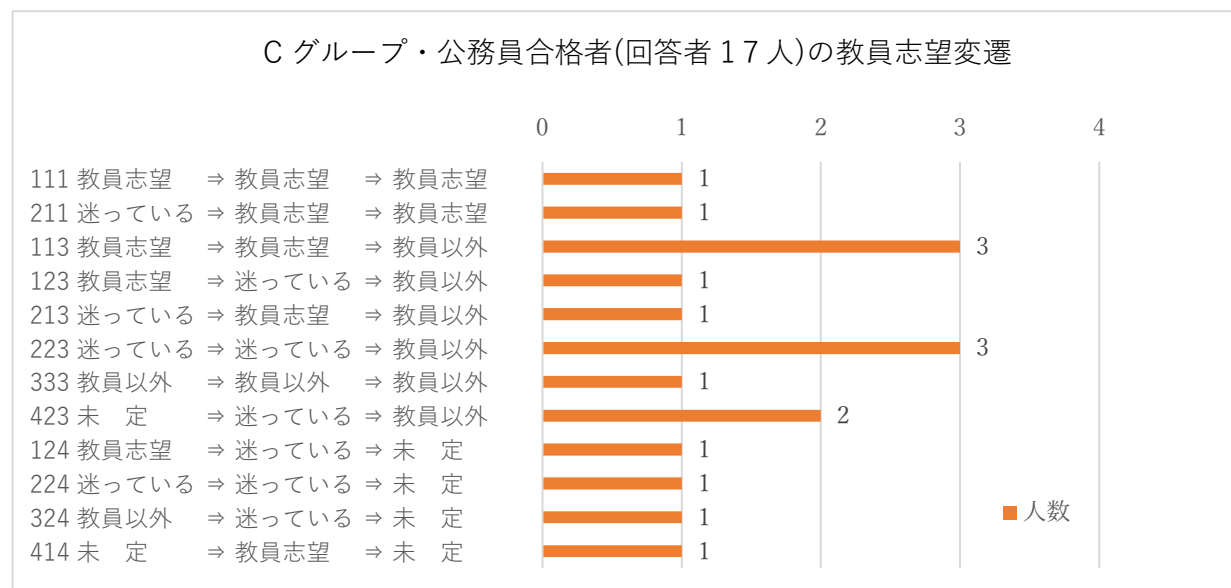
【B グループ（講師）に属す学生（回答数 21 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*教員志望の気持ちをいずれかの時期に持っている者が多い。

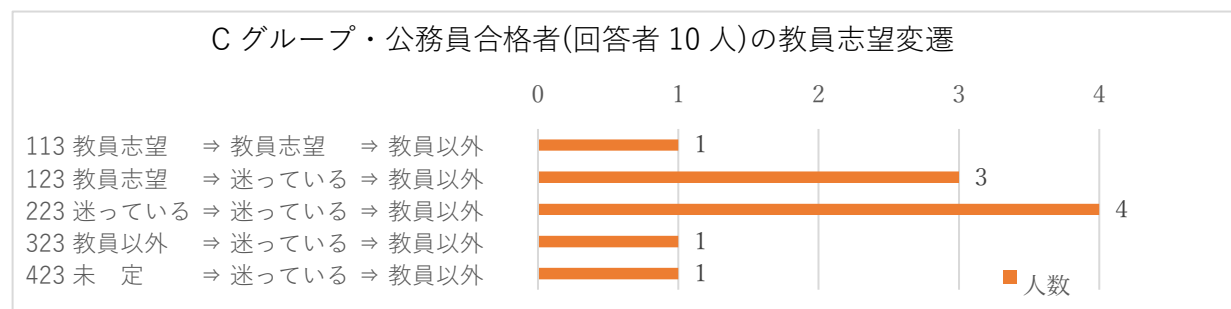
2020 年度入学生

【Cグループ（公務員）に属す学生（回答数 17人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



〈 2019 年度入学生との比較 〉

【Cグループ（公務員）に属す学生（回答数 10人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】

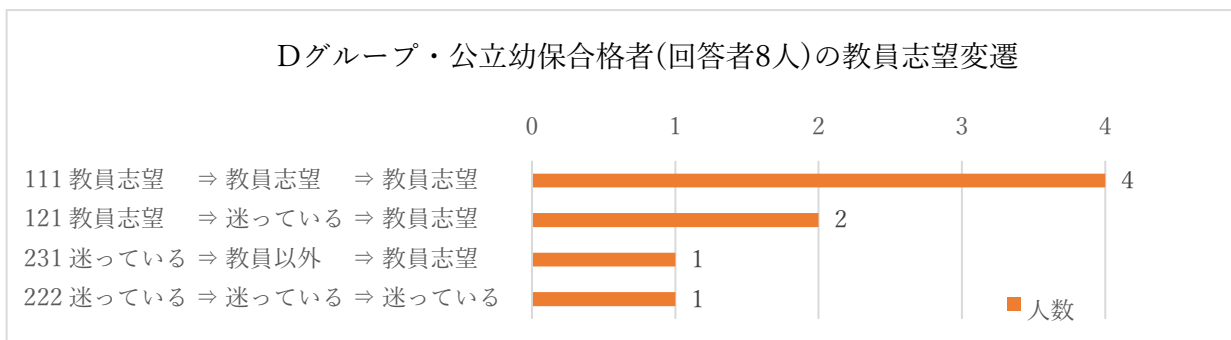


＊ほとんどの者がいずれかの時期に教員以外と考えている。

教育を学び、学んだことを行政的視点で生かすため公務員をめざした者もいる。

2020 年度入学生

【Dグループ（公立・幼稚園・保育士）に属す学生（回答数8人）の教員志望変遷は、以下のとおり】



〈 2019 年度入学生との比較 〉

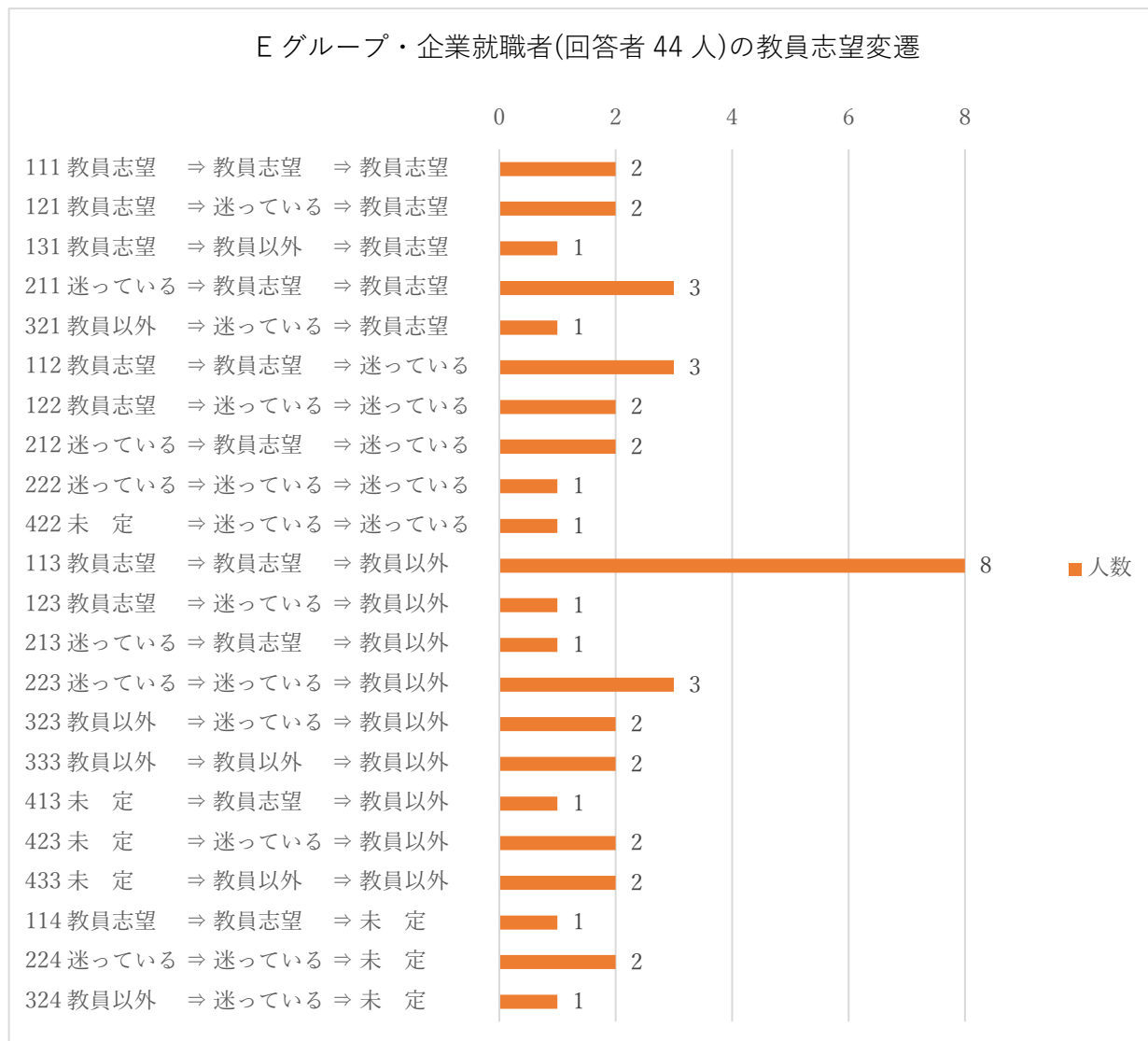
【D グループ（公立・幼稚園・保育士）に属す学生（回答数 4 人）の教員志望変遷は、以下のとおり】



* 公立幼保の採用試験は市町の公務員試験を受験することになるが、幼稚園教諭も保育士も教員志望である。採用試験は幼稚園教諭と保育士を分けて実施される場合と一緒に募集される場合がある。

2020 年度入学生

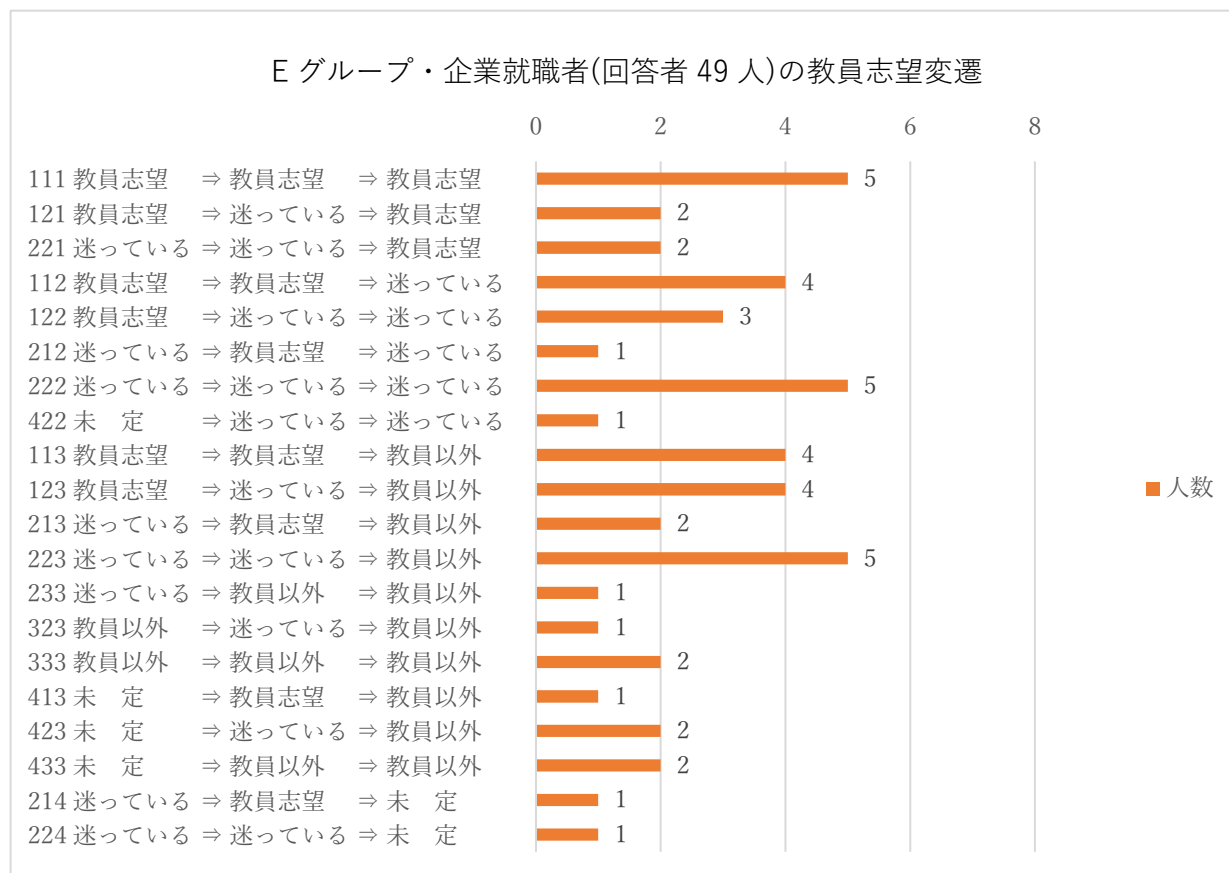
【E グループ（一般企業）に属す学生（回答数 44 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



* 入学時点から「迷っている」「教員以外」と回答している者が多く、教育実習後にはっきりと「教員以外」を考えている傾向がある。

〈 2019 年度入学生との比較 〉

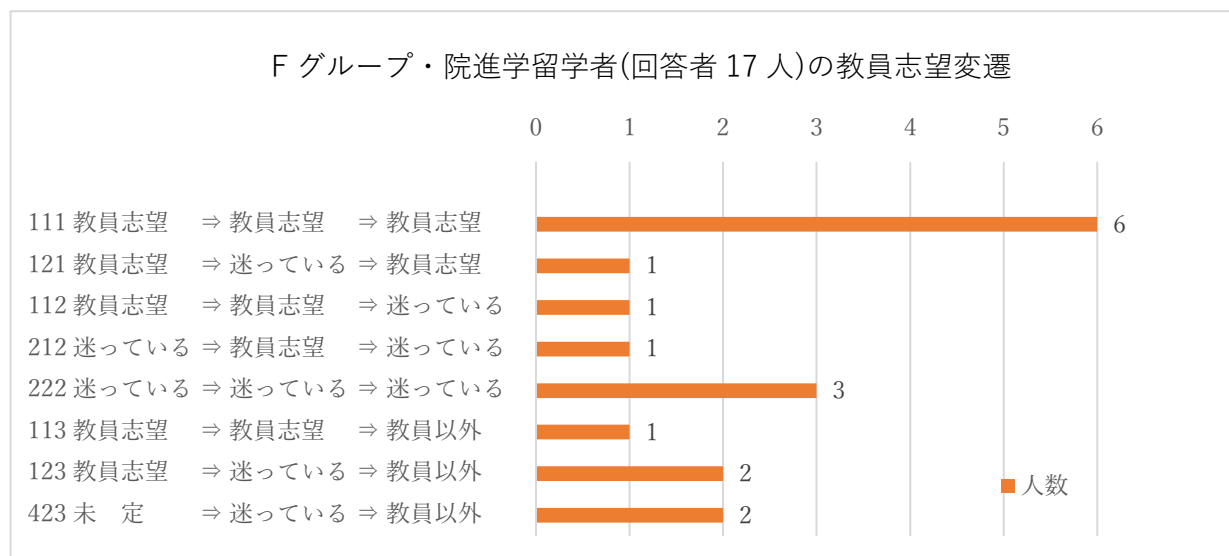
【E グループ（一般企業）に属す学生（回答数 49 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*早い時点で、迷ったり、教員以外を考えたりしている。

2020 年度入学生

【F グループ（院進学・留学）に属す学生（回答数 17 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



〈 2019 年度入学生との比較 〉

【F グループ（院進学・留学）に属す学生（回答数 7 人）の教員志望変遷は、以下のとおりである。】



*教員志望で大学院に進学する者とともに、在学中に関心が深まった他の分野での学びを深めたい者も一定数いる。

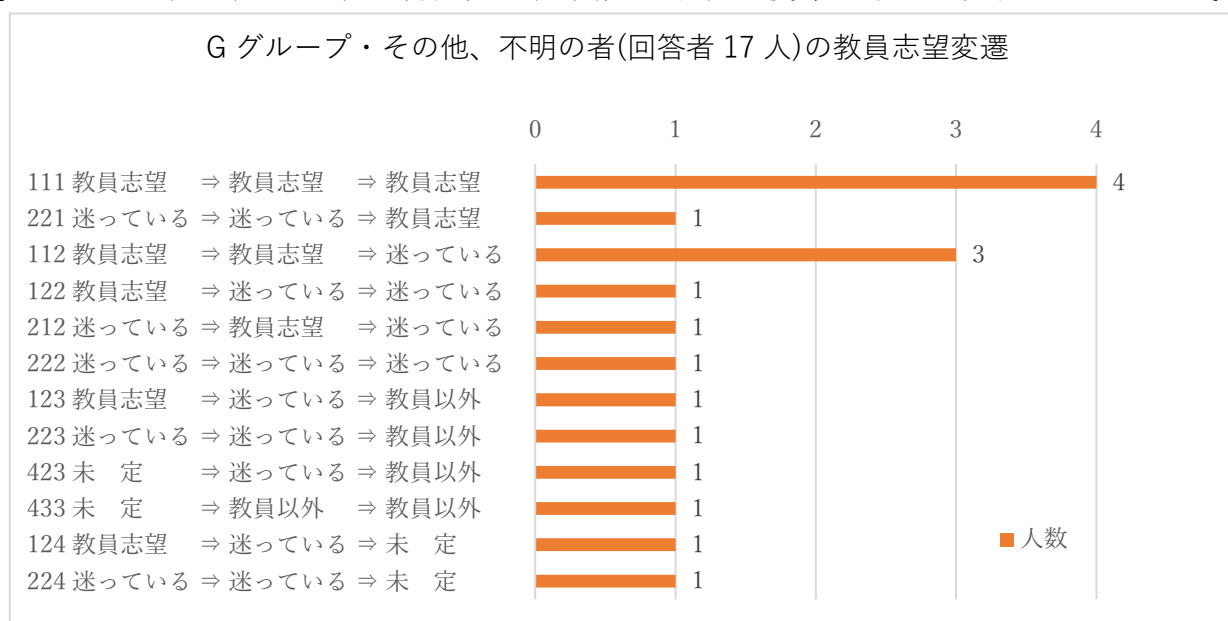
2020 年度入学生

【G グループ（その他・不明）に属す学生（回答数 6 人）の教員志望変遷は以下のとおりである。】



〈 2019 年度入学生との比較 〉

【G グループ（その他・不明）に属す学生（回答数 17 人）の教員志望変遷は以下のとおりである。】



*いずれかの時期に迷いがあり、教員以外の進路を志す者が多い。

【考察】

2021年度卒業生、2022年度卒業生、2023年度卒業生、2024年度卒業生の教員志望の変遷を辿ってみた。これらの年度は、大学在学時のいずれかの時期にコロナ禍の影響を受けている。自分自身の大学生活や授業の形態が大きく変わり、オンラインのシステムが可能なかぎり取り入れられ、教員免許取得に向けた教育実習においてコロナ禍の影響を大きく受けた年度もある。いずれの年度においても、実習先の小学校や中学校と連携を密に取りつつ、その時々状況に応じて最善と思われる取り組みが進められてきた。

教育実習終了後に、子どもたちや現場の先生方との出会いや学校現場での経験により、教員志望をより固める学生の報告を耳にするのは大変うれしい。同時に、現場の教師の働きぶり、教育活動の多様さに自信をなくし、教員志望が揺らぐ学生も多いが、時期を置かず種々のサポートや声かけをすることにより、本来の目標に立ち返っていく学生の姿も見受けられた。教育実習での経験は、教員志望をさらに確固たるものにしたり、進路を迷っている学生が、教員以外を目指す大きな分岐点になっているように思われる。

また、最近では、教育現場の大変さ、過酷さに関する報道が目立つが、教職の魅力、やりがい、現場で頑張っている先生方の姿をもっと発信していく必要性を強く感じる。

教員養成学部の学生には「知・徳・体」を一体で育む学校教育の重要性を深く受け止めてほしい。そして教育の仕事に携わる素晴らしさ、未来の担い手となる子どもたちの成長を育む教員の仕事のやりがいをしっかり受け止め、一步一步前進してくれることを願っている。

(キャリア支援 西坊 晴美)

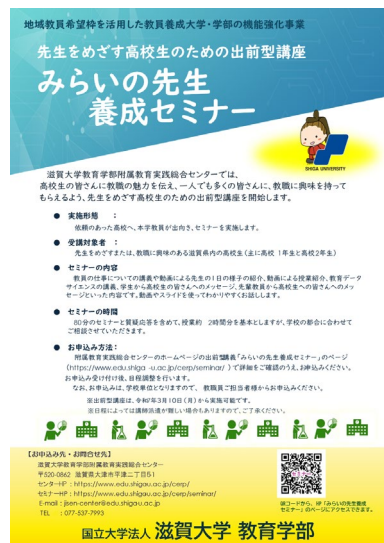
11 地域教員養成プログラム

今年度から、教育学部においては文部科学省「地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部」の機能強化事業」に採択され、新たに「地域教員養成プログラム」に着手した。これは、地域がかかえる教育課題を正しく理解し、地域の文化的・歴史的財産に愛着をもちながら、確かな教育力を軸として、それに教育データサイエンス／ICT／DX 活用力を掛け合わせることで、様々な地域の教育課題を主体的に克服していこうとする意欲ある教師を育てることを目的としている。

本センターにおいては地域教員養成プログラムの中で、① 高校生を対象とした入学前教育、および② 滋賀県北部（彦根市、米原市、長浜市）における教育実習の実施に関わっていく。そのために主に① の事業を担当する小島特任教授、② の事業を担当する横尾特任教授が新たにセンターに着任した。

➤ 高校生を対象とした入学前教育

① については、これまで本学で、東大津高校、水口東高校と共同実施していた「教職探究講座」を今年度からは他の高校へも拡大した。県内の 14 高校に案内を出し、そのうち 10 校からあわせて 105 名の生徒が参加した。これと併せて「先生をめざす高校生のための出前型講座 みらいの先生養成セミナー」の今年度 3 月からの実施に向けて、動画撮影やテキスト作成などを行っている。このセミナーは、高校 1、2 年生を対象に原則 80 分で実施される。・教員の仕事と役割、・滋賀で教えるということ、・教育データサイエンス、・本学部生からのメッセージ、・本学部出身の先輩の先生からのメッセージ の内容について、小島特任教授の講義と動画などによってわかりやすく伝えていく。



➤ 滋賀県北部（彦根市，米原市，長浜市）における教育実習の実施

② については、横尾特任教授が中心になって、彦根市、米原市、長浜市との連携協定締結から始まり、具体的な実習校の選定、教育実習の実施手順の検討などが着実に行われている。学内においても学生への広報・面談を経て、来年度の交流実習から滋賀県北部での実習が開始される予定である。

【令和6年10月以降のおもな実践】

- 〈10月〉 ・ 北部地域実習の企画立案と検討協議
- 〈11月〉 ・ 北部3市教育委員会との事前協議
・ 第3回教育実習委員会での説明と承認
- 〈12月〉 ・ 北部3市教育委員会への訪問と概要説明
・ 本事業に係るシンポジウムの開催
- 〈1月〉 ・ 教育実習事前説明会（1回生対象）の開催
・ 対象となる学生との個人面談（滋賀県北部出身者と東部出身者対象）
・ 長浜市との包括連携協定締結
・ 第4回教育実習委員会での説明と承認
- 〈2月〉 ・ 北部3市教育委員会との協議と調整
・ 長浜市校長会での概要説明と協力依頼
・ 彦根市校長会での概要説明と協力依頼
- 〈3月〉 ・ 米原市校長会での概要説明と協力依頼
・ 米原市との包括連携協定締結
・ 実習受入（予定）校との事前協議
・ 北部実習対象の学生との個人面談

(神 直人)

11 業務報告（春学期）

	教職支援事業				地域教育支援事業	
	キャリア支援	教育実習支援	教師力養成サークル 「教師のたまご」	石山プロジェクト	教職探究講座・出前講義・共同研究事業	
4月	・新入生対象キャリアガイダンス諸準備・オンライン実施 ・キャリア支援室管理/備品・書類・図書整理及び貸出（以後年間常時） ・就職関係揭示物整理（以後年間常時） ・就職求人票分類・整理（以後年間常時） ・就職相談面談・面接指導 ・就職エントリーシート添削 ・教員採用試験小論文添削 ・教員採用集面接・集団討論練習会	・学生面談 ・地域実習連絡協議会（栗東、守山、草津） ・教育実習委員会 ・地域実習校挨拶訪問（大津） ・地域実習市教委挨拶訪問（栗東、守山、大津、草津） ・基本実習オリエンテーション（3回生） ・基本実習開始式（地域実習3回生） ・附属教育実践総合センター会議	・教員採用試験に向けての個別面談（受かる力UP） ・教員採用試験小論文対策（受かる力UP） ・教員採用試験県外受験者集団面接練習（受かる力UP） ・教員採用試験3年生受験対策（受かる力UP）	・春学期実施の打合せ 石山PJ（幼・小） ・退職女性校長会、退職園長への協力依頼 ・春学期参加募集受付（SUCCESS掲載） ・春学期募集締切➡石山PJ（幼・小）4/25（5/8まで延長）	・出前講義「米原市米原小学校」4/24	4月
5月	・教員採用面接・集団討論練習会 ・インターンシップ面接指導 ・進路面談 ・公務員小論文添削・面接練習 ・教員採用試験小論文添削 ・2020入学生教員志望変遷資料作成 ・新入生キャリア支援案内・アンケート実施（SUCCESS） ・就職相談・面接練習指導	・学生面談 ・地域実習校挨拶訪問（栗東、守山、草津） ・基本実習訪問指導 ・教育実習事前説明会（2回生）	・教員採用試験に向けての個別相談（受かる力UP） ・教員採用試験小論文対策（受かる力UP） ・教員採用試験県外受験者集団面接練習（受かる力UP） ・教員採用試験3年生受験対策（受かる力UP）	・退職女性校長会 石山PJ（小）に関して挨拶5/10 ・打合せ会 石山PJ（幼・小）5/10	・出前講義「彦根市立亀山小学校」5/9 ・出前講義「彦根市立高宮小学校」5/9 ・出前講義「彦根市立平田小学校」5/17 ・出前講義「草津市立矢倉こども園」5/20	5月
6月	・進路相談 ・就職面接練習 ・公務員小論文添削・面接練習 ・教員採用試験面接・集団討論練習会 ・教員採用試験小論文添削 ・新入生キャリア支援アンケート回収 ・新入生キャリア支援アンケート結果報告 ・新入生キャリア支援相談個票作成	・学生面談 ・基本実習訪問指導	・教員採用試験小論文対策（受かる力UP） ・教員採用2次試験面接及び模擬授業練習（受かる力UP）	・石山PJ（幼）省察会6/14 ・石山PJ（小）省察会6/21	・共同研究の募集 ・出前講義「豊郷町立愛里保育園」6/5 ・出前講義「豊郷町立豊郷幼稚園」6/5 ・出前講義「草津市立老上こども園」6/17 ・出前講義「光泉カトリック中学・高等学校」6/18	6月
7月	・教員採用直前対策面接練習会資料作成 ・教員採用直前対策面接練習会 ・教員採用二次対策面接練習 ・インターンシップ事前指導 ・就職面談・面接指導 ・公務員小論文添削・面接練習	・学生面談 ・基本実習中間指導（3回生） ・中間指導アンケート実施（SUCCESS） ・交流実習オリエンテーション（2回生） ・実習基礎①（2回生） ・附属教育実践総合センター担当者会議	・教員採用2次試験面接及び模擬授業練習（受かる力UP） ・教員採用2次試験場面对応練習（受かる力UP） ・特別企画活動①《現職教員招聘》「授業支援ソフトの操作及び活用について」（授業力UP）	・石山PJ（小）省察会7/12 ・石山PJ（幼）省察会7/18	・共同研究審査 ・共同研究採択通知 ・出前講義「亀岡市教育委員会社会教育課」7/4 ・出前講義「東洋大学附属姫路高等学校」7/13 ・出前講義「草津市立老上こども園」7/10 ・出前講義「近江八幡市立金田小学校」7/22 ・出前講義「大阪府泉南市立東小学校」7/24 ・出前講義「草津市立山田こども園」7/25 ・出前講義「豊郷町教育委員会」7/30	7月
8月	・教員採用試験面接練習 ・就職相談・面接指導 ・教員採用試験フォローアップ面談 ・教員志望変遷資料作成・整理	・学生面談 ・教育実習委員会 ・実習基礎②（2回生）	・教員採用2次試験面接及び模擬授業練習（受かる力UP） ・教員採用2次試験場面对応練習（受かる力UP）	・石山幼小への秋学期実施意向確認 ・退職女性校長会、退職園長へ協力依頼 ・秋学期参加募集受付（SUCCESS掲載）	・新潟県南魚沼市立蔵神小学校」8/1 ・出前講義「草津市立山田こども園」8/5 ・出前講義「滋賀県立野洲養護学校」8/21	8月
9月	・就職相談・面接指導 ・就職エントリーシート、面接カード添削 ・就職・教採ガイダンス資料作成	・学生面談 ・観察実習オリエンテーション（1回生） ・基本実習訪問指導 ・教育参加ガイダンス（1回生）	・「教師のたまご」第2年次活動内容検討	・秋学期募集締切（小）9/26（9/30まで延長） ・秋学期募集締切（幼）9/26（10/2まで延長）	・出前講義「草津市立老上こども園」9/9 ・出前講義「草津市立矢倉こども園」9/18 ・R6年度教職探究講座、共催高校等に開講案内	9月
	キャリア支援	教育実習支援	教師力養成サークル 「教師のたまご」	石山プロジェクト	教職探究講座・出前講義・共同研究事業	
	教職支援事業				地域教育支援事業	

11 業務報告（秋学期）

教職支援事業					地域教育支援事業
	キャリア支援	教育実習支援	教師力養成サークル 「教師のたまご」	石山プロジェクト	教職探究講座・出前講義・共同研究事業
10月	・就職・教採ガイダンス（説明講義） ・教員採用試験・公務員試験結果等報告書整理確認 ・教員養成研修資料作成 ・就職相談・面談 ・面接指導 ・企業就職説明会の調整（経済学部と）	・学生面談 ・基本実習訪問指導 ・1回生教育参加ガイダンス ・1回生教育参加プランニング ・教職実践演習	・「教師のたまご」第2年次活動内容検討 ・臨時講師等個別相談（遊び心と即戦力UP）	・秋学期石山PJ（幼）ガイダンス10/2 ・春学期報告会・秋学期打合せ会 石山PJ（幼）10/4 ・打合せ会 石山PJ（小）10/2	・出前講義「草津市立常盤こども園」10/21
11月	・教員養成研修（説明講義） ・就職相談・面談 ・教員採用試験・就職関係図書選定 ・企業就職説明会（大津サテライト）	・学生面談 ・基本実習訪問指導 ・教育実習委員会 ・基本実習事後指導担当者打合せ会 ・基本実習事後指導Ⅰ・Ⅱ ・事後指導アンケート実施（SUCCESS） ・附属教育実践総合センター担当者会議 ・地域実習校謝意訪問（栗東・守山・草津）	・「教師のたまご」参加者募集パンフレット配信 ・臨時講師等個別相談 ・大津市陸上記録会役員体験 11/12（遊び心と即戦力UP） ・教員採用試験対策オリエンテーション（受かる力UP）	・石山PJ（幼）省察会11/15 ・石山PJ（小）省察会11/22 ・石山小学校創立150周年記念「石山祭」ブース出展11/23	・出前講義「甲賀市教育委員会」11/12 ・出前講義「滋賀県立豊話学校」11/22
12月	・就職相談・面談 ・キャリア支援室図書整理 ・就職用エントリーシート添削 ・滋賀県教員採用試験問題開示・コピー ・公務員試験面接練習	・学生面談 ・教育参加ハンドブックの確認 ・地域実習連絡協議会（栗東、守山、草津） ・地域実習校謝意訪問（大津） ・基本実習事後指導（補講）	・「教師のたまご」遊び心と即戦力UP活動案内配信（4回生対象） ・次年度教員採用試験に向けた基礎学習（受かる力UP）	・石山PJ（幼）省察会12/18 ・石山PJ（小）省察会12/20	・出前講義「草津市立老上こども園」12/16 ・出前講義「草津市立山田こども園」12/25 ・教職探究講座実施12/18・12/19
1月	・春季教職セミナースタートアップ「面接・討論」について・資料作成 ・就職相談・面談 ・就職エントリーシート添削 ・進路相談 ・教員採用試験問題研究（滋賀県および近隣県市）	・学生面談 ・実習基礎指導（補講） ・令和5年度実習のまとめ ・実習マニュアルの確認及び改訂 ・体育実技練習	・特別企画活動②《外部講師招聘》「レクリエーション技法を取り入れた人間関係づくり」1/30（遊び心と即戦力UP） ・次年度教員採用試験に向けた基礎学習（受かる力UP）	・出前講義「大津市立堅田小学校」1/14 ・出前講義オンデマンド配信「東大阪市子どもこやか部子育て支援室」1/15～1/31 ・出前講義「草津市立矢倉こども園」1/20	1月
2月	・就職相談・面談 ・就職エントリーシート添削 ・教員採用試験小論文添削 ・教育実践センター報告書等原稿作成 ・春季教職セミナースタートアップ「面接・討論」について（講義） ・スタートアップ面接練習会（説明） ・2021年入学生教員志望受選データ集計	・学生面談 ・副免実習基礎①② ・教育実習委員会 ・実習マニュアルの確認及び改訂 ・教育実践総合センター報告書原稿作成	・次年度教員採用試験に向けた基礎学習（受かる力UP） ・特別企画活動③《教職大学院とコラボ》「新任教員Welcomeセミナー」2/26（遊び心と即戦力UP）	・出前講義「守山市立図書館」2/1 ・出前講義「甲賀市立水口小学校」2/14 ・出前講義「草津市立常盤こども園」2/19 ・出前講義「野洲市立さくらばさまこども園」2/21 ・共同研究事業 成果報告	2月
3月	・春季スタートアップ面接練習会 ・次年度新入生対象ガイダンスの実施方法検討・準備 ・就職相談・面談 ・就職エントリーシート添削 ・教員採用試験小論文添削 ・公務員採用試験小論文添削	・学生面談 ・副免実習基礎③④ ・令和6年度実習計画立案	・次年度教員採用試験に向けた基礎学習（受かる力UP）	・退職女性校長会（梅の実会） 学部長へ挨拶、石山PJ継続依頼	3月
・年報（第8号 令和6年度版）発行 HP掲載					
	キャリア支援	教育実習支援	教師力養成サークル 「教師のたまご」	石山プロジェクト	教職探究講座・出前講義・共同研究事業
	教職支援事業				地域教育支援事業

教育実践総合センター年報 第8号

2025年3月発行

滋賀大学教育学部 教育実践総合センター

〒520-0862 大津市平津二丁目5番1号

TEL 077-537-7993(直通)

FAX 077-537-7909

<https://www.edu.shiga-u.ac.jp/cerp/>
